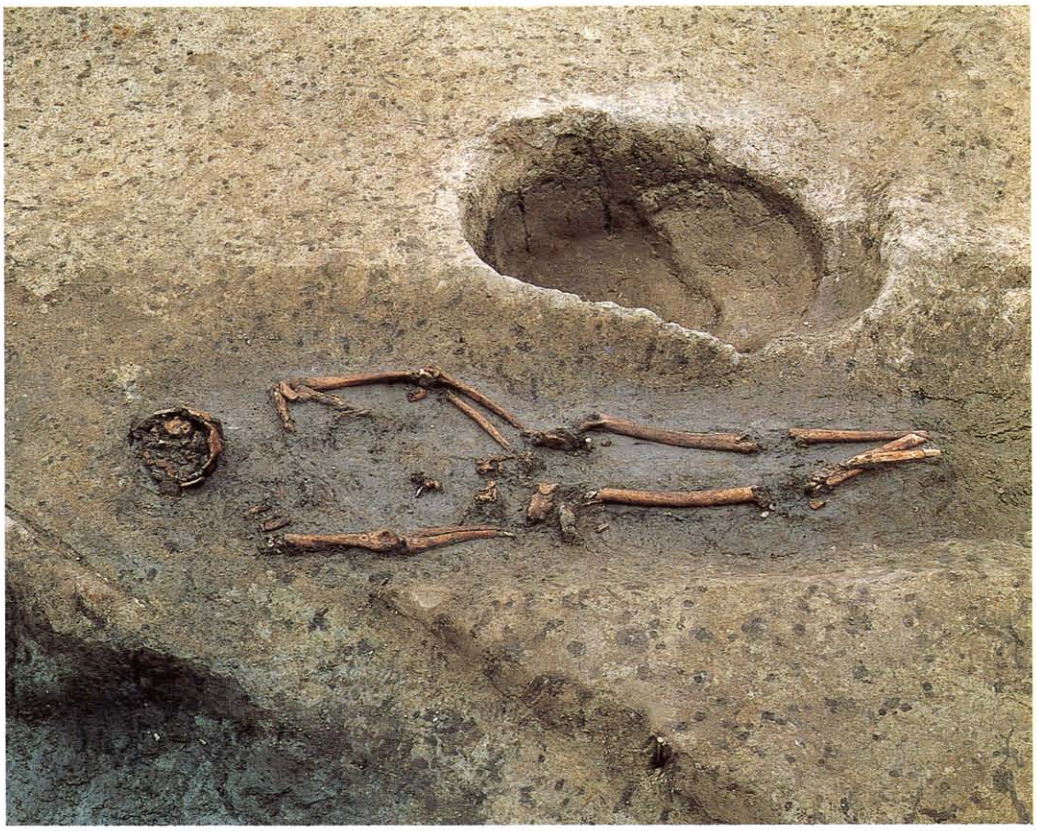
平成9・10年度
神戸市遺跡現地説明会資料集

神 戸 市 教 育 委 員 会

1. 住吉宮町遺跡　調査地全景

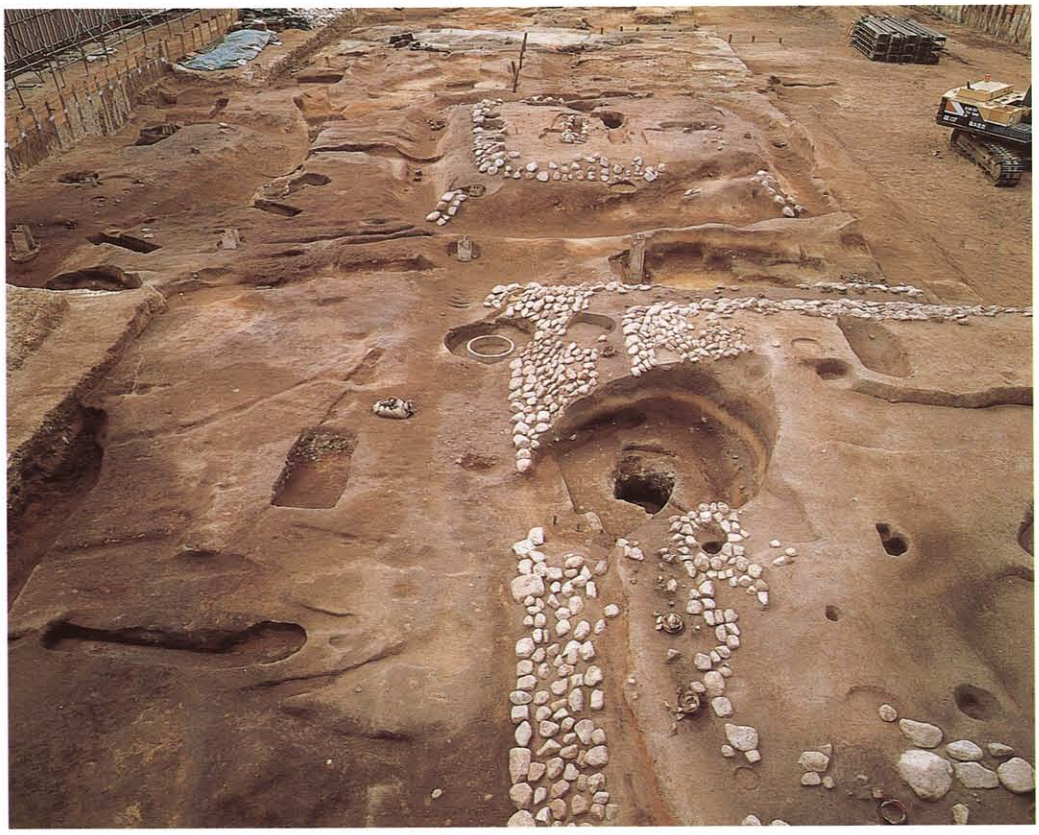


2. 新方遺跡　弥生時代前期人骨

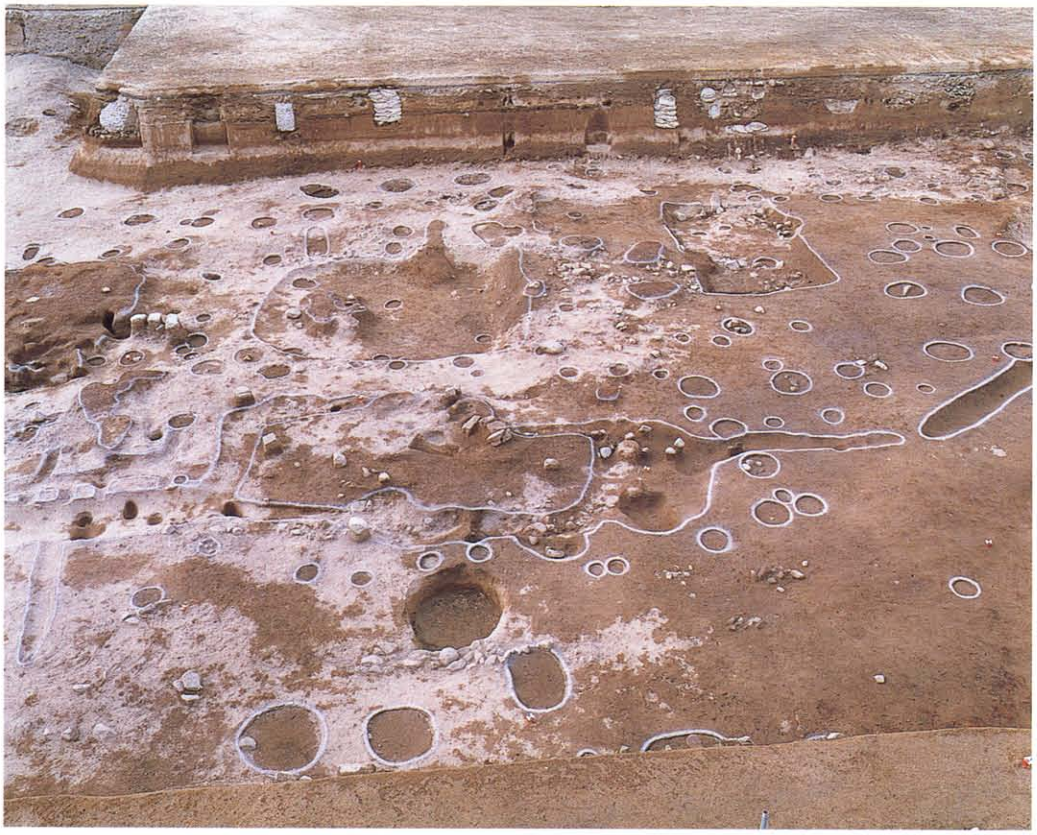
3. 湯山遺跡（伝豊太閤湯殿あと）庭園遺構

4. 勝雄遺跡　調査地全景

9. 若松町遺跡　調査地全景



10. 住吉宮町遺跡　古墳検出状況



13. 二宮遺跡　鍛冶遺構

14. 松野遺跡　調査地全景

目　次

頁

現地説明会資料

平成９年度

1．住吉宮町第24次現地説明会資料（平成９年４月20日）……1
2．新方遺跡現地説明会資料（平成９年４月29日）……10
3．有馬極楽寺（伝豊太閤湯殿あと）現地説明会資料（平成９年５月25日）……21
4．勝雄遺跡現地説明会資料（平成９年12月７日）……29
5．御蔵遺跡の概要（平成10年２月６日）……45
6．兵庫松本遺跡見学のしおり（平成10年３月22日）……47

平成10年度

7．上沢遺跡見学のしおり（平成10年５月10日）……49
8．神楽遺跡発掘調査説明会のしおり（平成10年６月４・５日）……51
9．若松町遺跡現地説明会資料（平成10年６月６日）……53
10．兵庫津遺跡調査の概要（平成10年８月14日）……59
11．御蔵遺跡見学のしおり（平成10年10月４日）……63
12．住吉宮町第30次現地説明会資料（平成11年１月24日）……65
13．二宮遺跡現地説明会資料（平成11年３月７日）……78
14．松野遺跡現地説明会資料（平成11年３月２日）……92

展示会・見学会資料

平成９年度	場　所	期　間	
15．淡河町内遺跡展示会	淡河町地域福祉センター	平成10年1月31日~平成10年2月8日	99
平成10年度			
16．須磨区の遺跡	若宮小学校	平成10年5月29日~平成10年6月19日	103
17．新方ムラのまつり	玉津南公民館	平成10年6月24日~平成10年7月3日	105
18．二葉町出土の船材	埋蔵文化財センター	平成10年8月1日~平成10年8月2日	107
19．発掘現場を見学しよう	若松町遺跡	平成10年7月29日	109
20．地下に眠る道場の歴史展	農業振興センター	平成10年11月2日~平成10年11月3日	117
21．須磨区の遺跡	若宮小学校	平成10年11月14日~平成11年12月1日	119
22．宮川小学校とその周辺の遺跡	宮川小学校	平成10年11月14日~平成11年12月1日	121

現地説明会資料

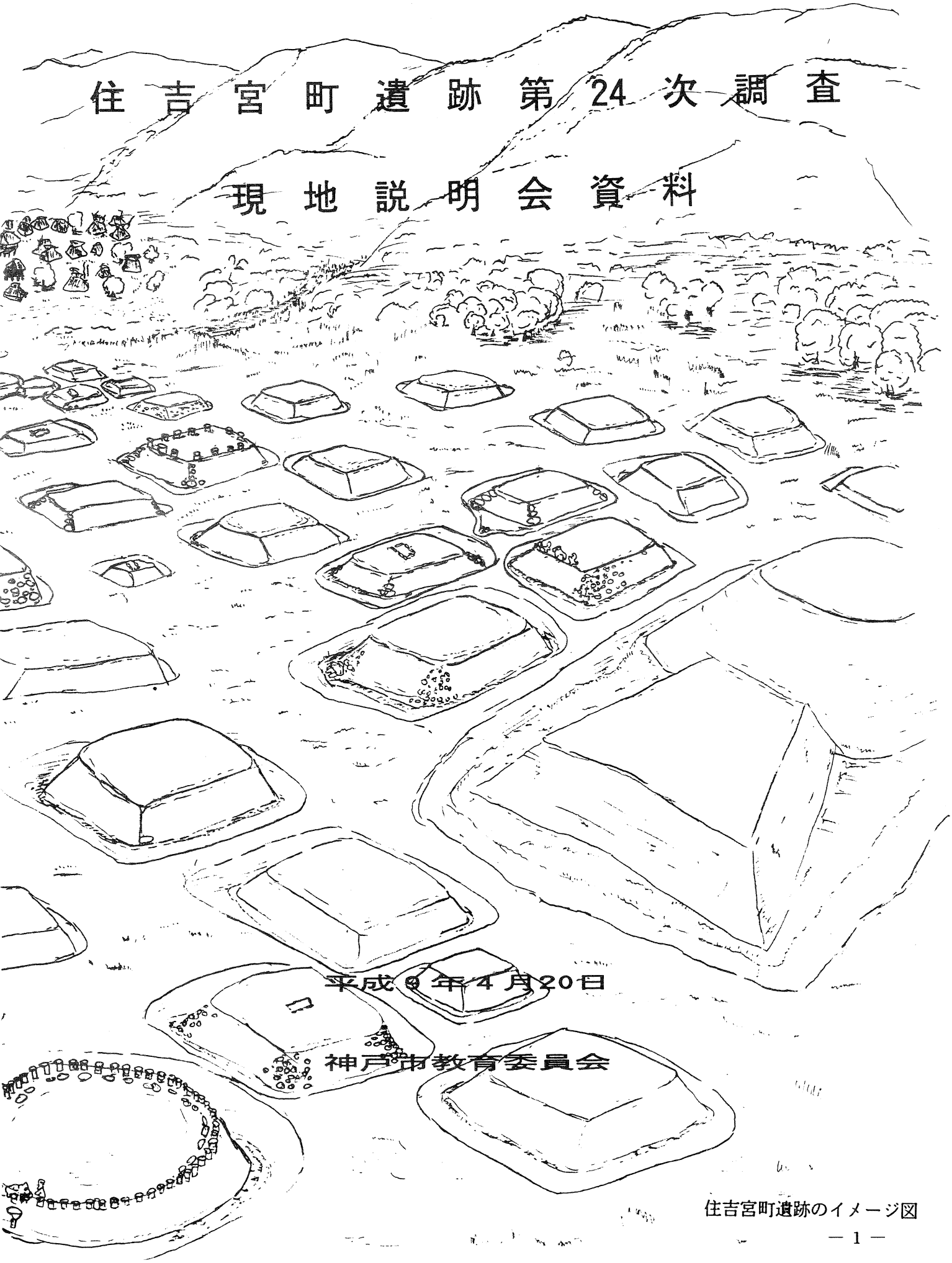
平成９年度

住吉宮町遺跡第24次調査

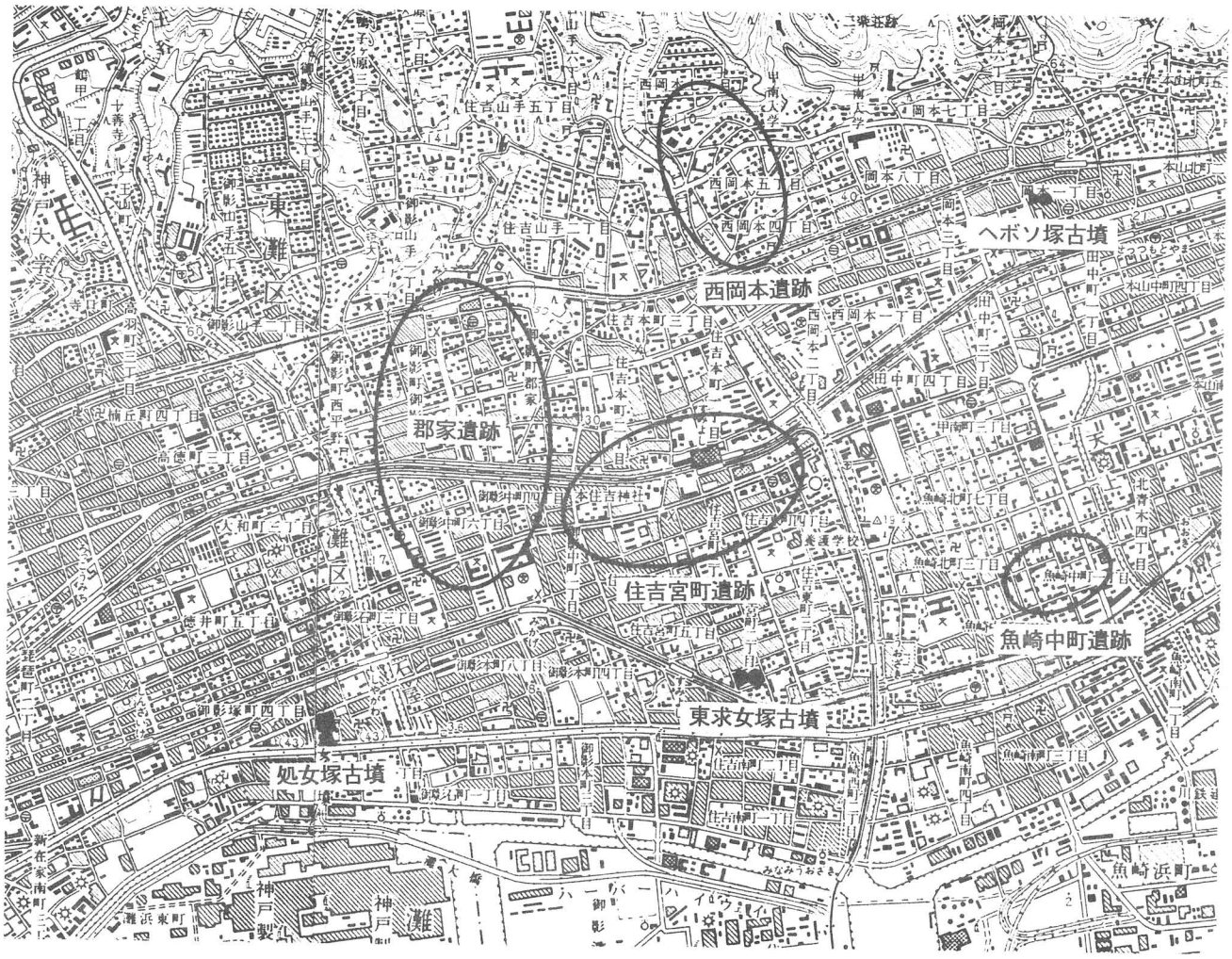
現地説明会資料

平成9年4月20日

神戸市教育委員会



住吉宮町遺跡のイメージ図



住吉宮町遺跡と周辺の主な遺跡　S＝1/25000

1．はじめに　　平成７年１月17日に起こった阪神・淡路大震災により、神戸市東灘区住吉一帯は甚大な被害を受けました。今回の住吉宮町遺跡の調査は、震災で倒壊した住宅の跡地に、被災者を対象とした共同住宅の建設計画が上がり、その工事に伴って行われた、震災復興関連の調査です。

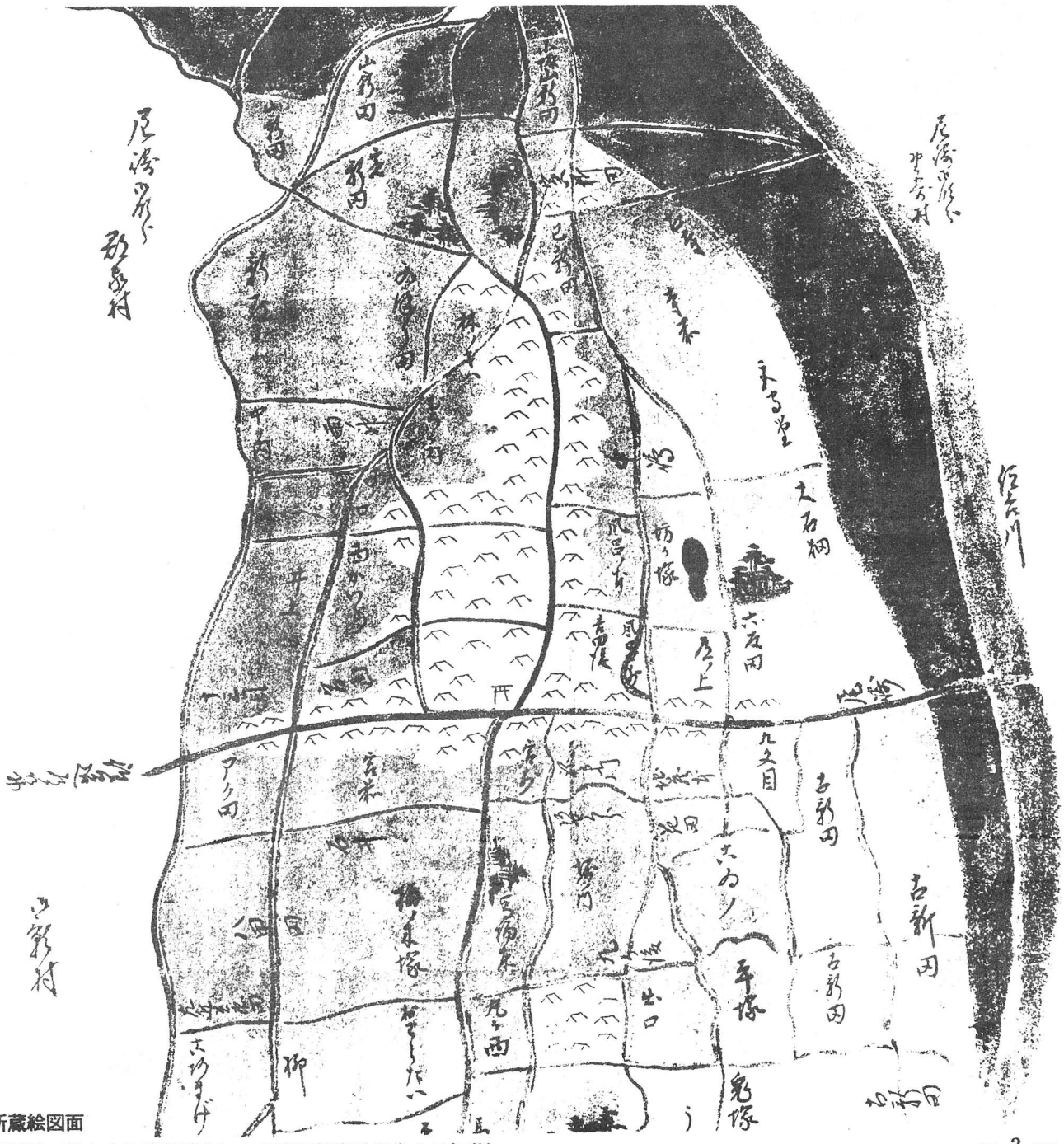
六甲山系の南側一帯には、中小の河川によって扇状地が形成されています。住吉宮町遺跡は、住吉川やその他の小河川によって形成された扇状地に立地します。今回の調査地の現標高は 28m前後です。

住吉宮町遺跡は昭和60年に発見されて以来、これまでに23次にわたる調査が行われています。これまでの調査では古墳時代初頭（庄内併行期）の竪穴住居址や周溝墓、古墳時代中期の帆立貝式古墳である住吉東古墳と、その周囲に造られた古墳時代中期から後期にかけての古墳群、奈良時代の菟原郡衙（うばらぐんが）に関連すると考えられる掘立柱建物址や井戸、平安時代の地鎮遺構を伴う掘立柱建物址などが見つかっています。

これまでに見つかっている古墳は、帆立貝式古墳である住吉東古墳以外は全て一辺５mから15mの方墳で構成され、「住吉宮町古墳群」とも言うべき古墳群を形成しています。その範囲は現在のところ、国道２号線より北側で、東西600m、南北200mにわたり、これまでに約40基確認されており、この付近には、まだ数多くの古墳が眠っていることと思われます。

今回の調査地の約30m南にある、ＪＲ住吉駅の駅ビル（ＳＥＥＲ）の建設に伴う調査では、古墳10基と古墳時代初頭の周溝墓が３基見つかっています。またこの付近の地名はかつては住吉町字坊ケ塚とよばれており、住吉神社に残されている江戸時代の絵図面には前方後円形の「坊ケ塚」と書かれた古墳が描かれています。付近の地籍図をみると、今回の調査地の東側に隣接する区画（現在のコープ駐車場）に前方後円形の地割りがあり、現在では見られませんが、ここが上記の絵図面に描かれている「坊ケ塚」と考えられます。

２．調査の概要　今回の調査範囲内では、４基の古墳と溝、土坑及び庄内期の土器棺が確認されました。４基の古墳はいずれも、古墳の上端部分は後世の水田などの造成によって削られていましたが、４基とも古墳が造られてしばらくしてから洪水によって砂におおわれたため、それより下の部分に関しては良好な状態で残っていました。なお古墳の名称はこれまでの調査で確認された古墳との混乱を避ける為に調査次数である「24」を付けて呼称します。

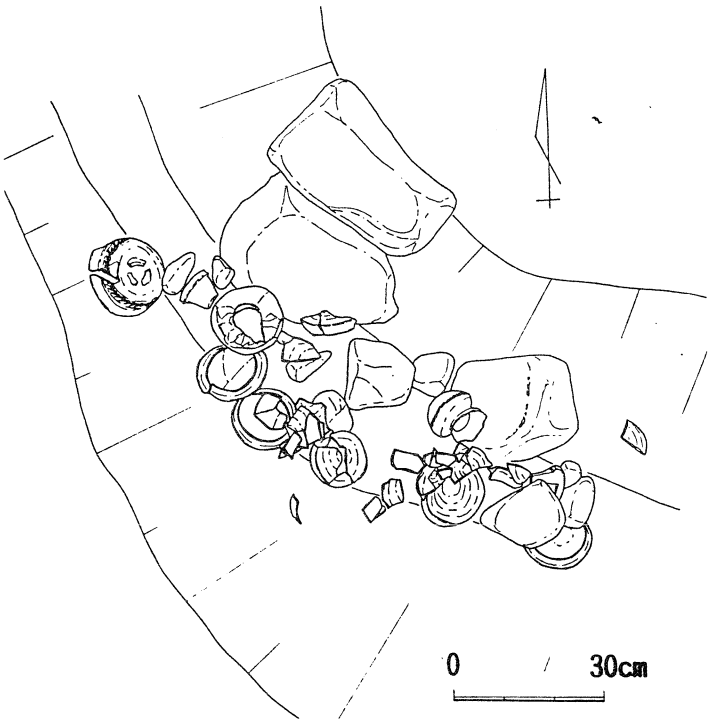


住吉神社所蔵絵図面
（『坊ケ塚遺跡（住吉宮町遺跡群Ⅱ）』兵庫県教育委員会より転載）

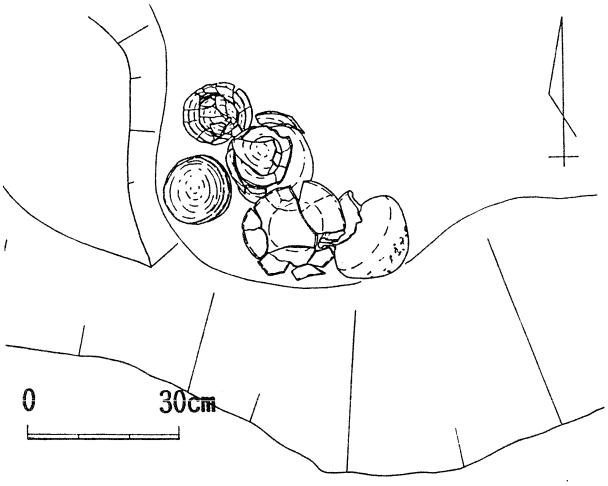
Y＝85,275.000
2 号 墳
土器群 3
鉄刀
1 号 墳
土器群 2
土器群 1
3 号 墳
箱式石棺
4 号 墳
X＝－141,890.000
土器群 4
平安時代の自然流路
SK01
須恵器壺
紡錘車
土器群 5
SX01
SD01
0
10m

調査地全体図

24—1号墳　　24—1号墳は一辺 7.5mの方墳です。各コーナ部分に人頭大の石を数個置いています。南側の周溝のほぼ中央を南に拡張し、溝底に須恵器の坏・壺を供えています。また周溝の南西コーナーにも須恵器の坏・高坏・はそう・土師器の壺を供えています。これらの土器の中には、お酒や食物を入れてお供えしていたものと考えられます。

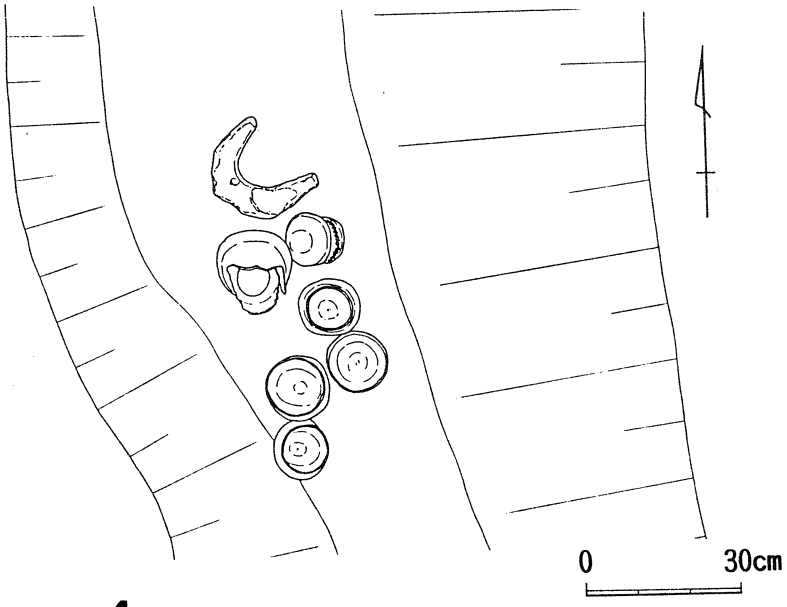


1号墳　土器群1出土状況



1号墳　土器群2出土状況

24—2号墳　　24—2号墳は南北 4.5m以上×東西 3.5m以上の方墳です。南西コーナ部分のみ検出され、調査区外に延びるため、全体の規模は明らかではありません。西側の墳丘斜面には葺石を葺いていますが、南側斜面では検出された範囲内では、葺石は葺いていません。西側の周溝底に須恵器の坏・壺と鉄製品の鋤先が供えられています。コーナーに近い西側の周溝底には、墳丘から転落したと思われる須恵器の甕の破片が多数出土し、南側斜面から周溝にかけては馬形埴輪や人物埴輪などの形象埴輪を含む埴輪片が出土してます。



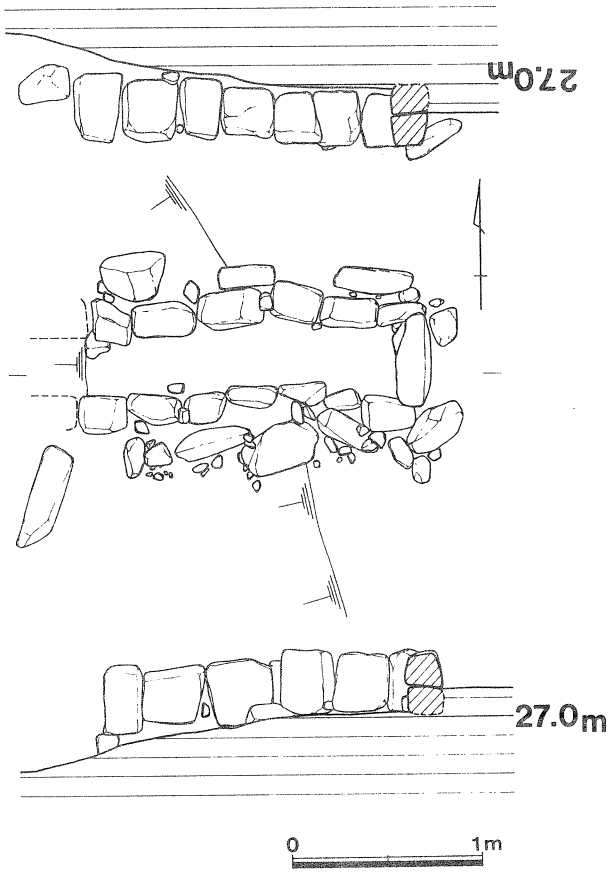
2号墳　土器群3出土状況

24―3号墳　24―3号墳は一辺 7.7mの方墳です。墳丘の西側は、平安時代の洪水によって削られ、周溝のみが残存します。墳丘中央には、偏平な花崗岩を東西方向に並べた、箱式石棺が存在しますが、この箱式石棺も、その西端部分は前記の洪水によって削られています。その大きさは内法で幅40cm、長さ165cm 以上を計ります。棺内からは遺物は出土しませんでしたが、石棺の東側掘形内より、刀子と思われる鉄製品が出土しています。また、東側周溝底の南東コーナーに近い所に、須恵器の高坏4個と土師器の壺が供献されています。

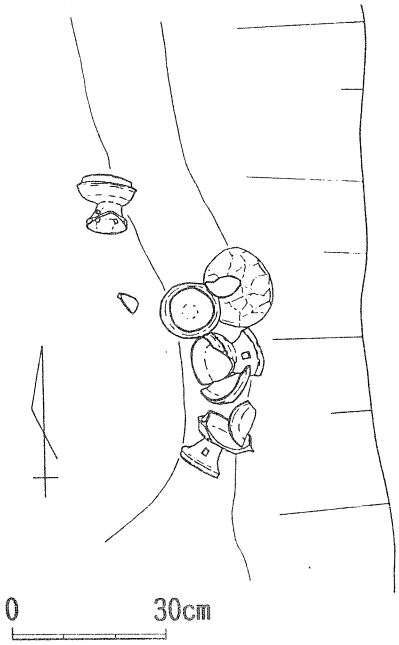
24―4号墳　24―4号墳は一辺15mの方墳です。今年度の調査範囲内では北西と南東コーナー部分のみが検出されていますが、そのコーナー部分の墳丘斜面にのみ葺石を葺いています。西側周溝の北西コーナーに近い所に、墳丘から転落したと思われる土師器の壺の破片が多数出土し、南西コーナーでは墳丘から転落した壺が、また墳丘南斜面には土師器の甕の破片が、南側の周溝底からは、須恵器の把手付き椀、土師器の高坏、壺、滑石(かせき)製の紡錘車2個などが出土しています。

土器棺　24―4号墳の南側で古墳時代初頭（庄内併行期）の、土器棺と思われる完形の壺が出土しています。この壺は倒置された状態で埋納されており、その埋納状態から壺棺と考えられます。

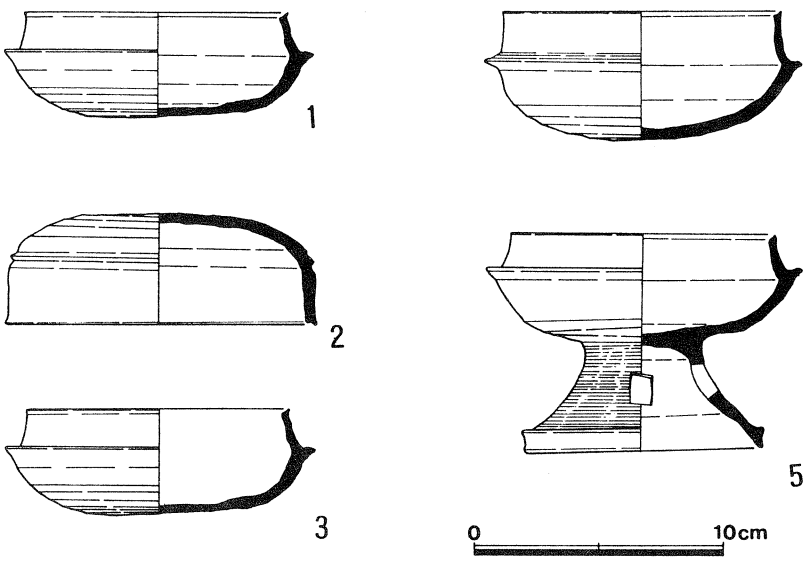
時期　以上の4基の古墳から出土した遺物からこれらの古墳は、5世紀後半から6世紀初頭にかけて次々と築かれたものと考えられます。



3号墳　箱式石棺平面・立面図



3号墳　土器群4出土状況



1．　1号墳　土器群1
2～4．2号墳　土器群3
5．　3号墳　土器群4

出土遺物実測図

3．まとめ

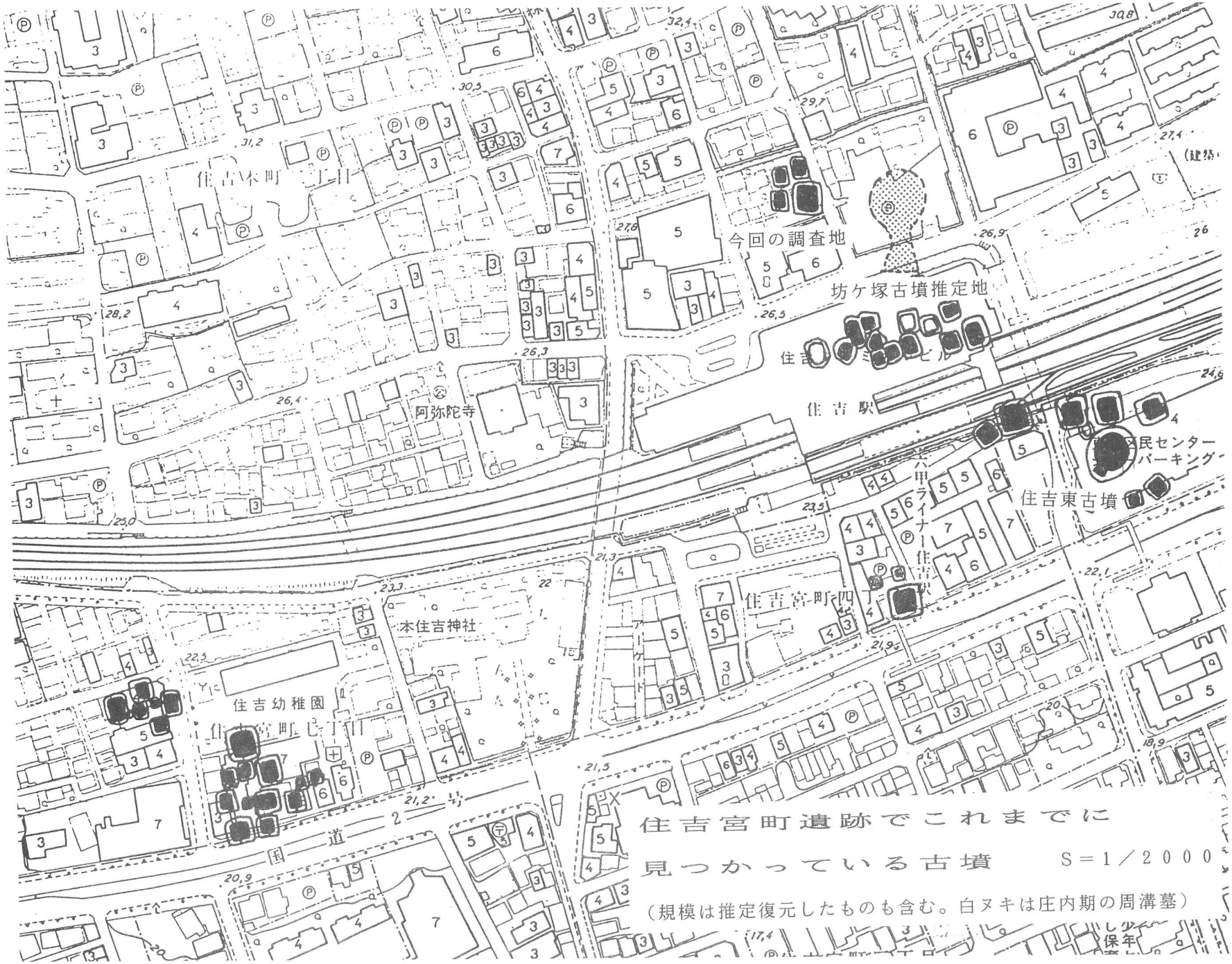
今回の調査は、これまでの調査で見つかっている「住吉宮町古墳群」の北端に位置しますが、今回の調査地点がこの古墳群の北端であるかどうかは明らかではありません。しかし先記したように、この調査地に隣接して、全長 40mほどの前方後円墳と思われる「坊ケ塚古墳」があったと考えられることから、この周辺一帯には同様の小古墳が、多数埋没していることと思われます。

これまでに見つかっている古墳を見ると、この「住吉宮町古墳群」は、前方後円墳である「坊ケ塚古墳」や、帆立貝式古墳である「住吉東古墳」などの小豪族の墓と考えられる古墳の周りに、村落内の有力な人達の古墳が造られていることがわかってきました。その形は大きさや、葺石の有無、埴輪の有無などの違いはありますが、全て方墳です。

また、これらの墓を造った人々の集落は住吉宮町遺跡の西側に、ほぼ同時期の竪穴住居が多数見つかっている郡家遺跡と考えられます。

以上のように、今回の住吉宮町遺跡の調査では、これまでの調査成果とあわせて、古墳時代後期の初め（5世紀末から6世紀始め）という、古墳時代における大きな社会的な変化の起こる画期の時期での、古墳群の形成を知る上で重要な資料となりました。また、この地域の居住域や墓域が判り、当時の生活空間の様子が判る貴重な資料となりました。今後この地域の調査が進むにつれてこの時代の姿がより一層我々の目の前に現れてくるものと思われます。

今回の調査では立命館大学文学部教授　和田　晴吾先生（神戸市文化財専門委員）にご指導を頂きました。
また、村上工務店のご協力を得ました。



住吉宮町遺跡でこれまでに見つかっている古墳　S＝1／2000

（規模は推定復元したものも含む。白ヌキは庄内期の周溝墓）

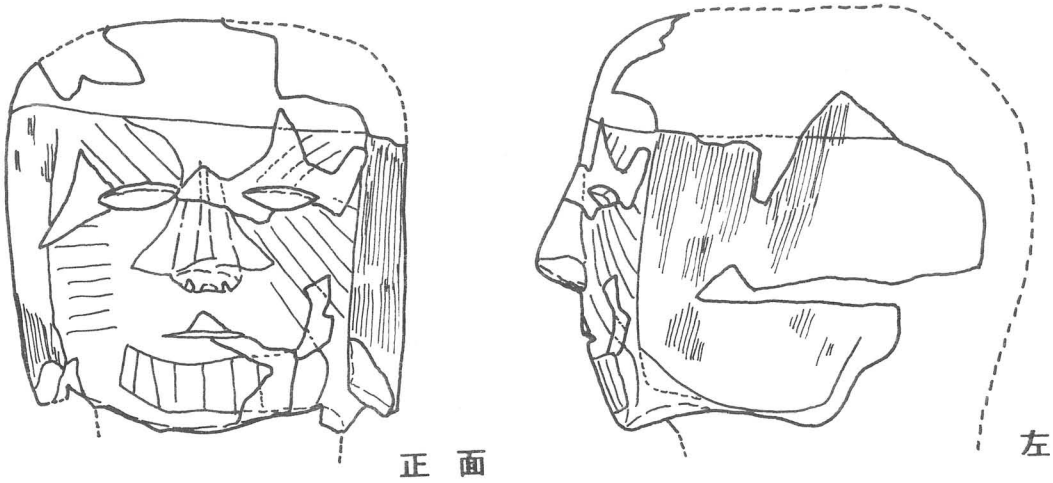
追加資料

2号墳出土埴輪

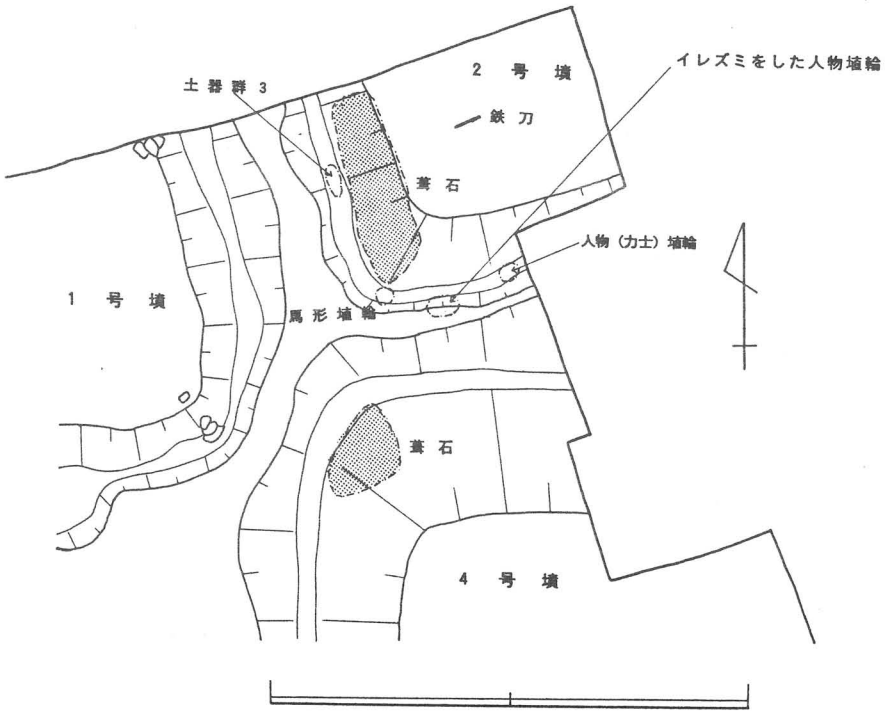
今回出土した遺物の復元作業を進めますと、2号墳から出土した埴輪の中に、2体の人物埴輪があることがわかりました。そのうちの1体には、顔面にイレズミの表現をしていました。今のところ頭部のみ復元できましたが、頬や鼻の上やあごの下に、ヘラで線刻し、イレズミを表現しています。イレズミをした男子の埴輪はこれまでに近畿地方を中心に出土していますが、神戸市内では初めてで、兵庫県下でも2例目の出土です（1例目は芦屋市打出小槌古墳）。このような、イレズミをほどこした埴輪は古墳を守る人か、武人を表していると思われます。

もう一体の埴輪は指先から肩、そして腰の部分が復元できた人物埴輪です。腕を前に延ばし、腰にはフンドシ状の帯があることから力士の埴輪と考えられます。

以上の2体の埴輪は、この古墳の被葬者の葬送の様子を表したものか、霊を守るために置かれたものと考えられます。



イレズミをした人物埴輪実測図（S＝1／2）



住吉宮町遺跡第24次調査・2号墳周辺遺構平面図

新方

現地説明会資料

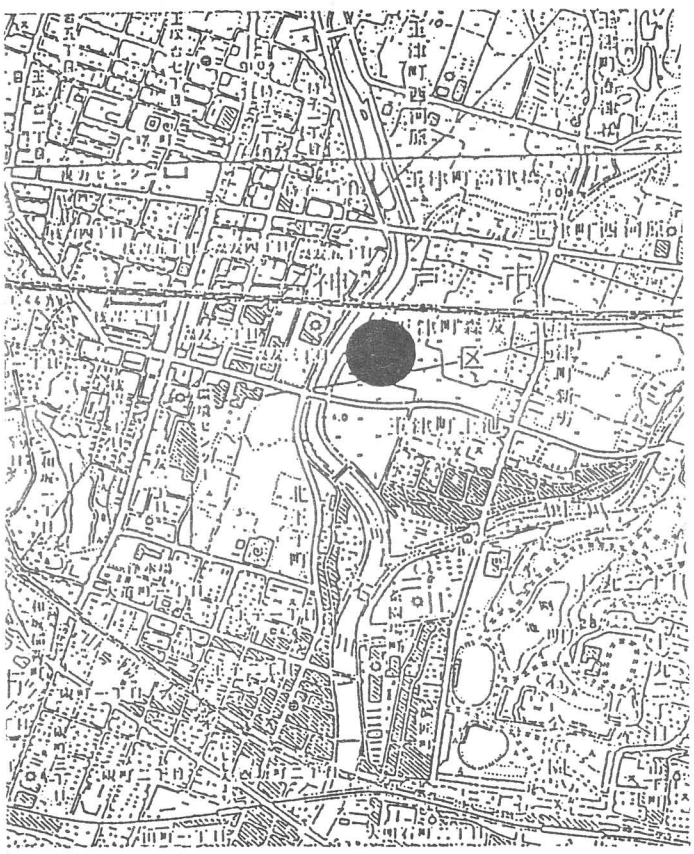
平成九年四月二十九日

神戸市教育委員会

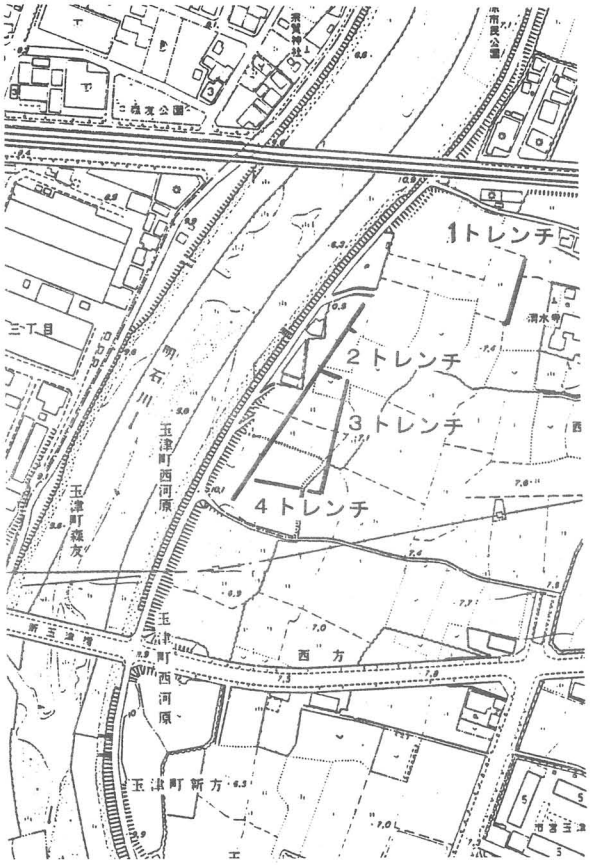
今回の調査にあたっては、京都大学霊長類研究所教授　片山一道先生、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長　工楽善通先生、立命館大学文学部教授　和田晴吾先生の各先生にご指導とご教示をいただきました。野手・西方地区土地区画整理準備組合のご協力をいただきました。

1・はじめに

新方遺跡は、明石川と伊川の合流する地点の北側、標高8～10mの沖積地に位置しています。昭和45年に、山陽新幹線建設に伴う調査で発見されました。これまでの調査では、旧石器時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物が確認されています。遺跡の範囲は、東西約1.5km、南北約1kmです。これまでの調査で、弥生時代前期末から中期初頭にかけては、自然河道から農具や紡織具を含む木製品が出土しています。弥生時代中期初頭の竪穴住居からは、管玉や玉砥石などが出土しており、玉造り工房跡と推定されています。また、弥生時代中期には、一辺20mをこえるような規模を持つ方形周溝墓や、斜面に河原石を貼りつけた特殊な円形周溝墓などが検出されました。古墳時代中期末から後期にかけては、竪穴住居が多数営まれており、玉造りに伴う原石や未製品、勾玉・管玉などが多量に出土しています。その他、古墳時代から奈良時代にかけては水田となり、鎌倉時代には掘立柱建物や、呪符木簡が出土した井戸などが調査されています。



調査地位置図　野手西方地点



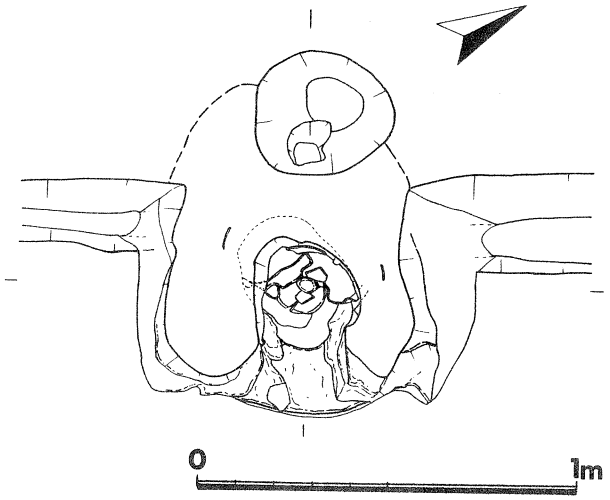
トレンチ配置図

2．調査の概要

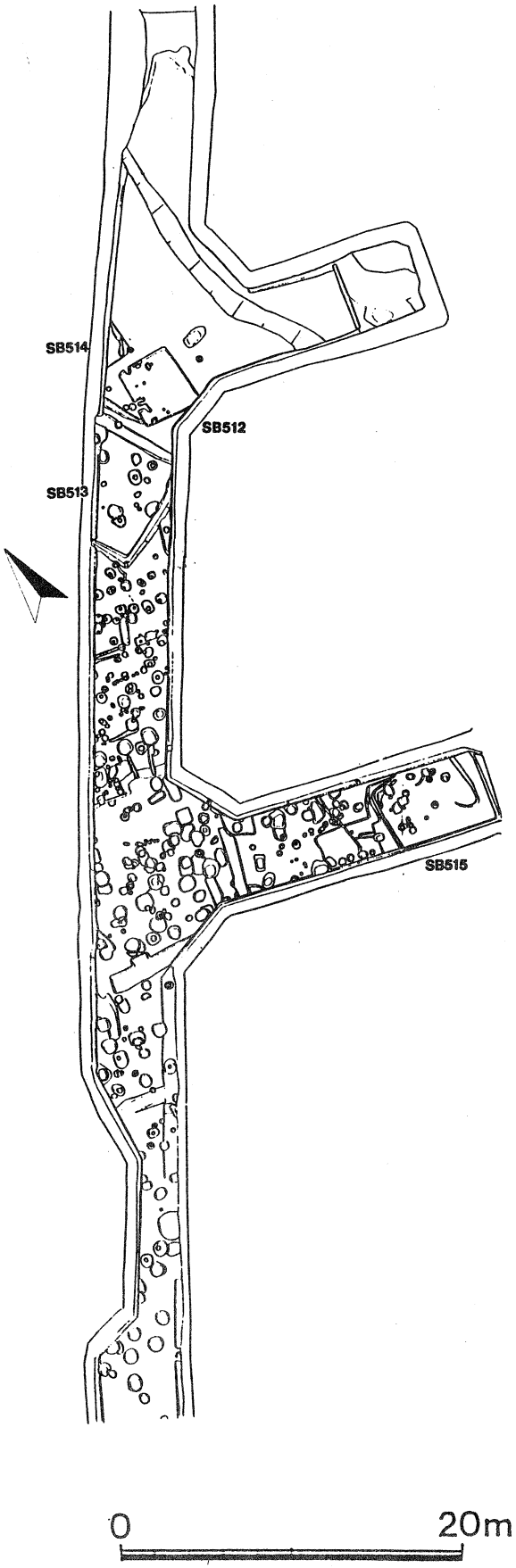
今回の調査は、震災復興事業の一環として、住宅供給を目的とした土地区画整理事業を行うために、事前に実施している、遺跡の範囲確認調査で、約2200㎡をが調査対象地です。これまでに弥生時代前期前半から江戸時代に至る遺構面が８面確認されました。弥生時代の遺構面については現在調査中です。

古墳時代以降

主な成果を列記しますと、江戸時代の墓地、畑作遺構。中世の掘立柱建物群や井戸。奈良時代から平安時代の掘立柱建物群、井戸。古墳時代中期から後期の掘立柱建物群、竪穴住居群です。特記される遺構は、古墳時代中期の玉造りに関係する集落群の検出、竪穴住居から検出された造り付けのカマド、全体の規模は不明ですが、方形の掘形の一辺が60～90cmの４間×３間以上の大型の掘立柱建物、製塩土器を含む多量の土器が投棄された溝等が挙げられます。



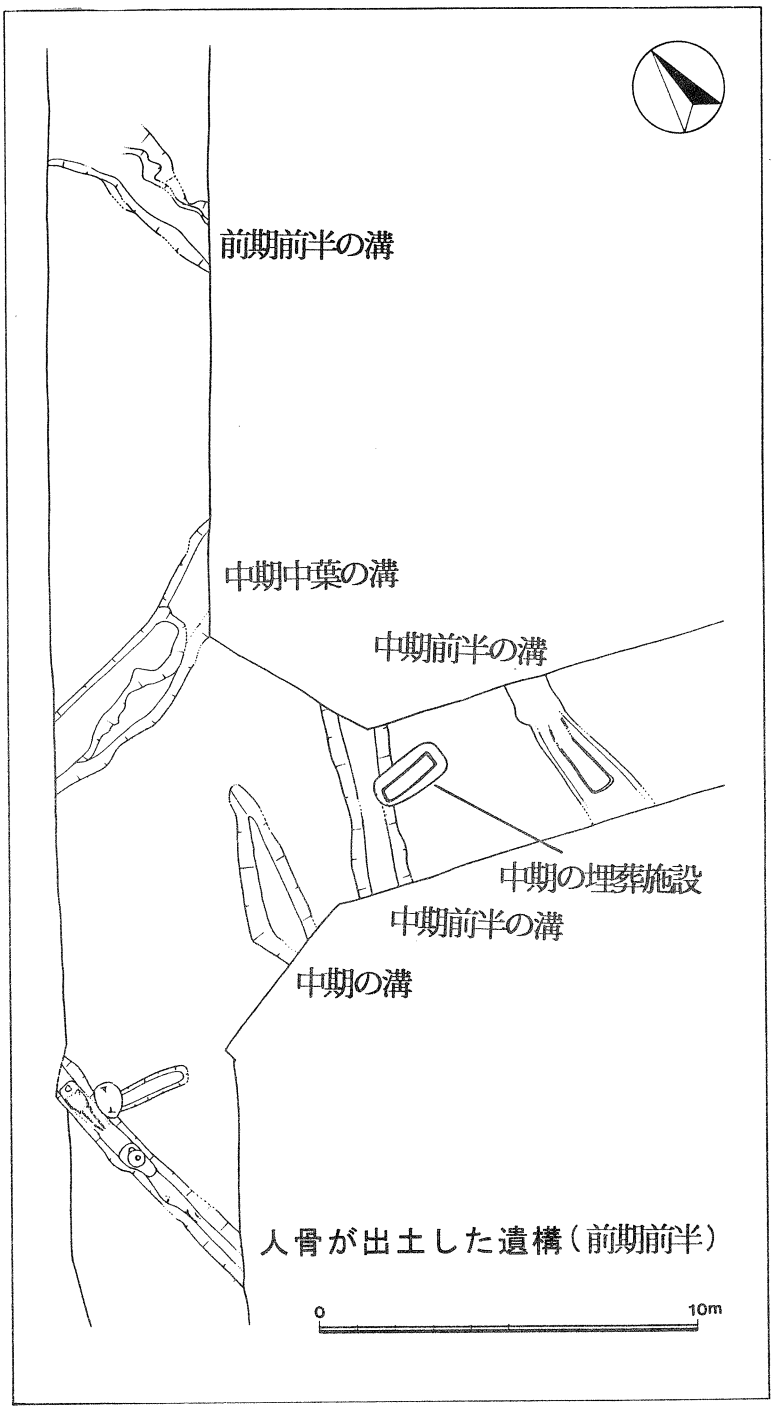
古墳時代のカマド（ＳＢ５１２）



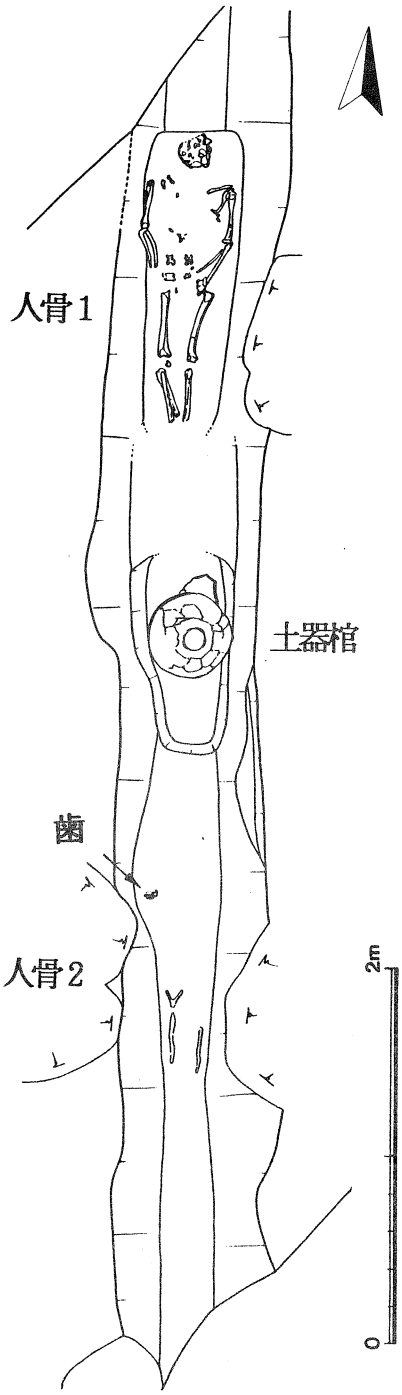
古墳時代の遺構平面図

弥生時代の遺構

調査継続中であるため全容は明らかではありませんが、前期の埋葬施設と溝、中期の溝が検出されています。特記される遺構は、中期前半では、多くの土器と共に、玉造りに伴う原石を出土した溝、中期中葉では供献土器（きょうけんどき）と考えられる土器を出土した溝があります。弥生時代前期前半においては、人骨2体と、棺として使用されたと思われる鉢が倒立した状態で検出された溝状の遺構などが、現在までで確認されています。今回は、前期前半の溝状の遺構を中心にご説明いたします。



弥生時代の遺構平面図



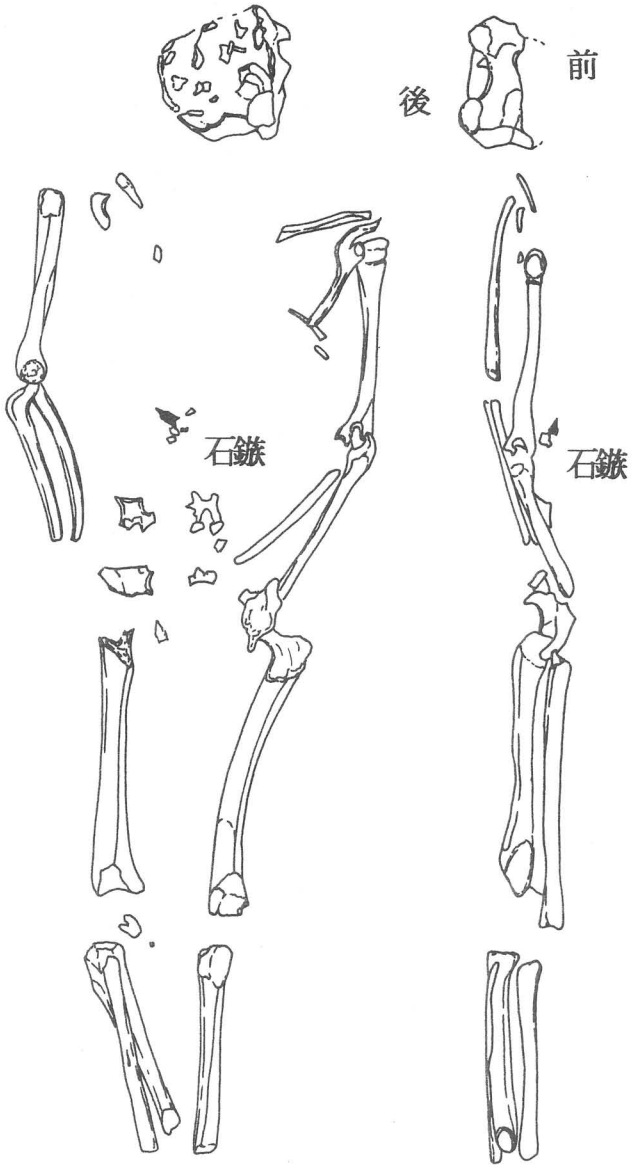
溝状遺構平面図

前期前半の溝状遺構

この遺構の規模は、幅約１ｍで、深さについては、調査継続中であるため不明です。長さは、調査区外へと延びるため不明ですが、８ｍ以上の規模です。２体の遺体と鉢は、溝状の遺構がある程度埋まった段階で、それぞれに掘り込んで埋置していることが観察できました。

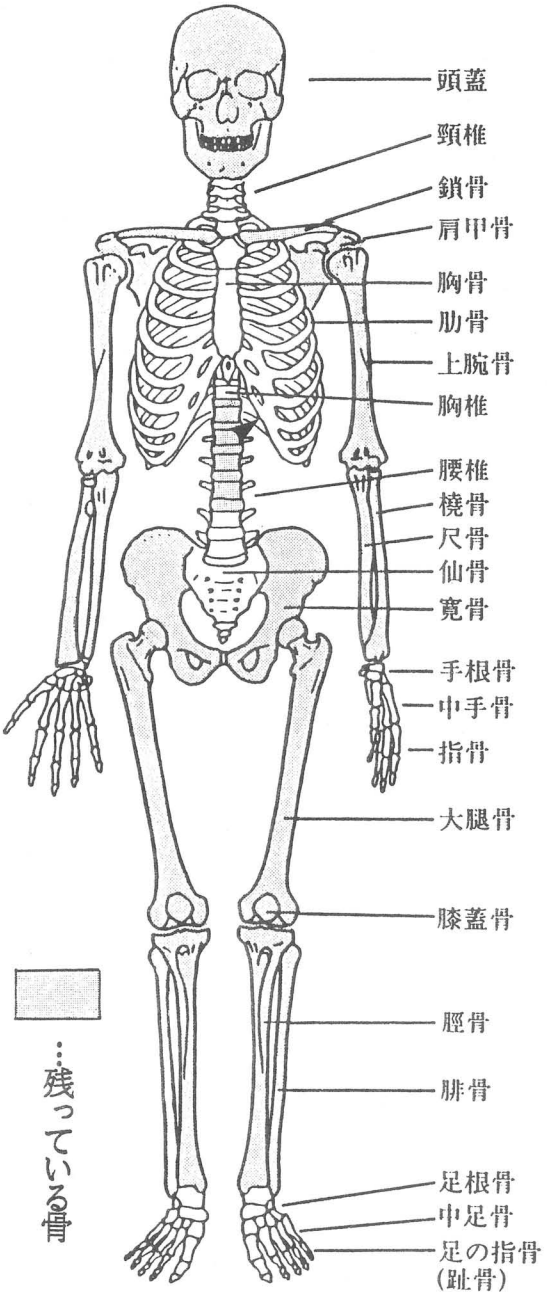
人骨１

人骨１は、死後早い段階で埋葬され、長期間露出されずに埋められているため、骨



後ろから　　右横から

人骨１の出土状況（縮尺１／１０）



前から

人骨各部の名称

「古人骨は語る」1990より一部改変

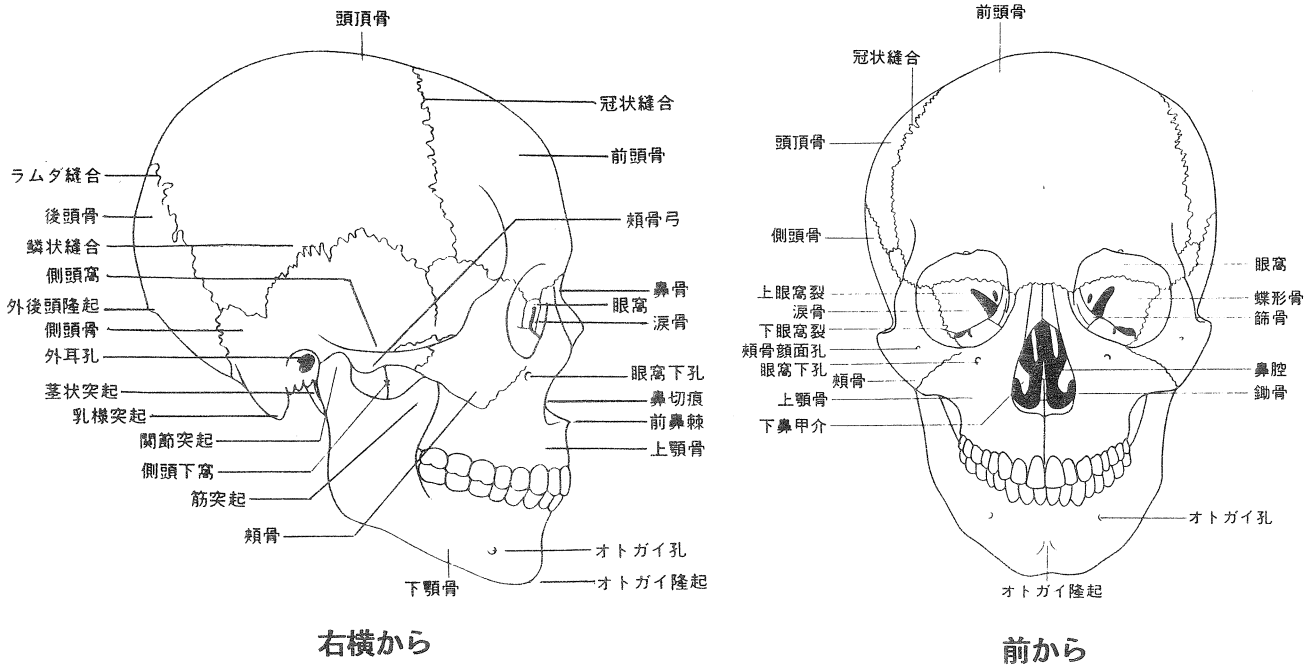
の残存状況が良好で、ほぼ全身の骨が残されています。出土状況から、うつ伏せに埋葬されている事が確認されました。頭位は北です。頭骨は土圧によって陥没し、手は腰骨の下に合わせています。脚は延ばした状態です。手足を縛っていた痕跡はありません。死亡年齢は成人男性（18～40歳）で、身長155 ～160 cm、肩幅が広く、手足の骨も頑丈でがっしりとした身体であったと考えられます。縄文人で良く見られる特徴（ 低身長、頭骨が頑丈で大きく、湾曲の多い四肢）と弥生人的な特徴（広い肩幅、大きめの上半身）を併せ持っており、日本人の形質的変化を考える上で貴重な資料となりました。また、椎骨付近で小型のサヌカイト製石鏃（石のやじり）が１点出土し、死亡した時には身体にささっていたと考えられ注目されます。

人骨２

人骨２は、遺存状況は悪く、歯が13本と上下顎骨（あごの骨）と四肢長骨（手足の長い骨）のいづれかと考えられる骨の痕跡だけが残されていました。うつ伏せの状態で、頭位は北です。検出された歯のうち、７ 本の歯は、かみ合わせた状態で検出されました。歯には強い咬耗（すり減り）が認められました。死亡年齢は壮年から熟年（30～50歳）で、性別は不明です。また、人骨１同様、胸部付近で石鏃が１点検出されました。

土器棺

土器棺と考えられる鉢は、胴部の直径が約40cmの大きさで、他の土器の破片の上に伏せた状況で出土しました。頸部に段を持ち、胴部が張る器形で、非常に丁寧に作ら



頭蓋骨各部の名称

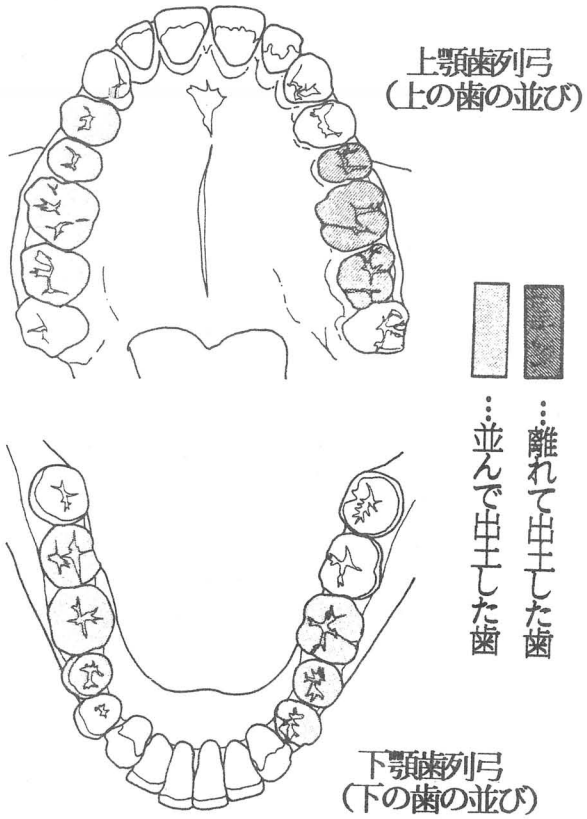
「歯の解剖学」1994より一部改変

れています。土器表面の風化も無いため、地表に露出していた期間は短かったと考えられます。土器の内部の土をこれから詳しく分析する予定です。

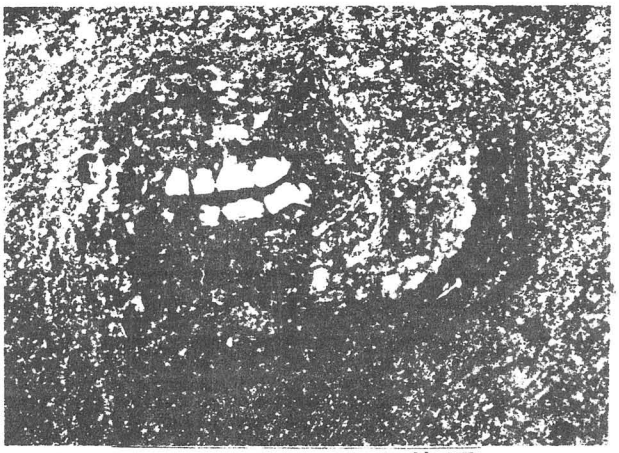
3．まとめ

弥生時代前期前半の人骨が良好な状況で検出でき、農耕社会に移行した日本人の身体形質の変化を知る良好な資料を得ることができました。また、2体とも、うつ伏せで、石鏃が腹部付近から検出されている事など、特異な状況で埋葬されていることが注目されます。うつ伏せで埋葬された例は山口県土井ケ浜遺跡で1例あるのみで、非常に珍しいといえます。うつ伏せで埋葬する理由については、いろいろな事が考えられますが、その理由を解明するには至っていません。

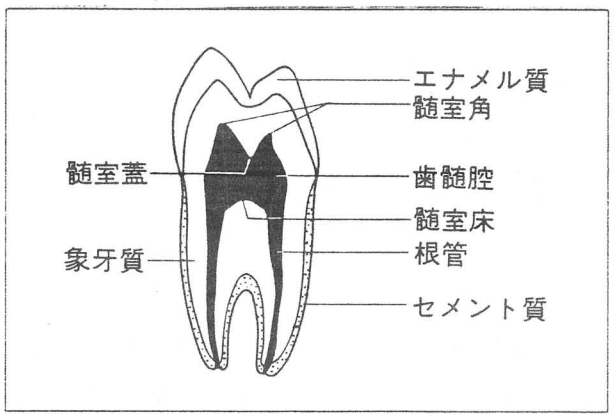
今回出土した石鏃は小型で、石鏃が狩猟のみに使用されていた古いタイプのもので、戦闘に使用され始める時期の好資料となります。また、畿内では、戦闘の開始時期は、弥生時代中期で畿内中心部（大阪府山賀遺跡など）で始まると考えられていましたが、畿内の周辺部において、前期前半にまで遡る戦いの犠牲者が確認された事は注目されます。



人骨２で検出された歯

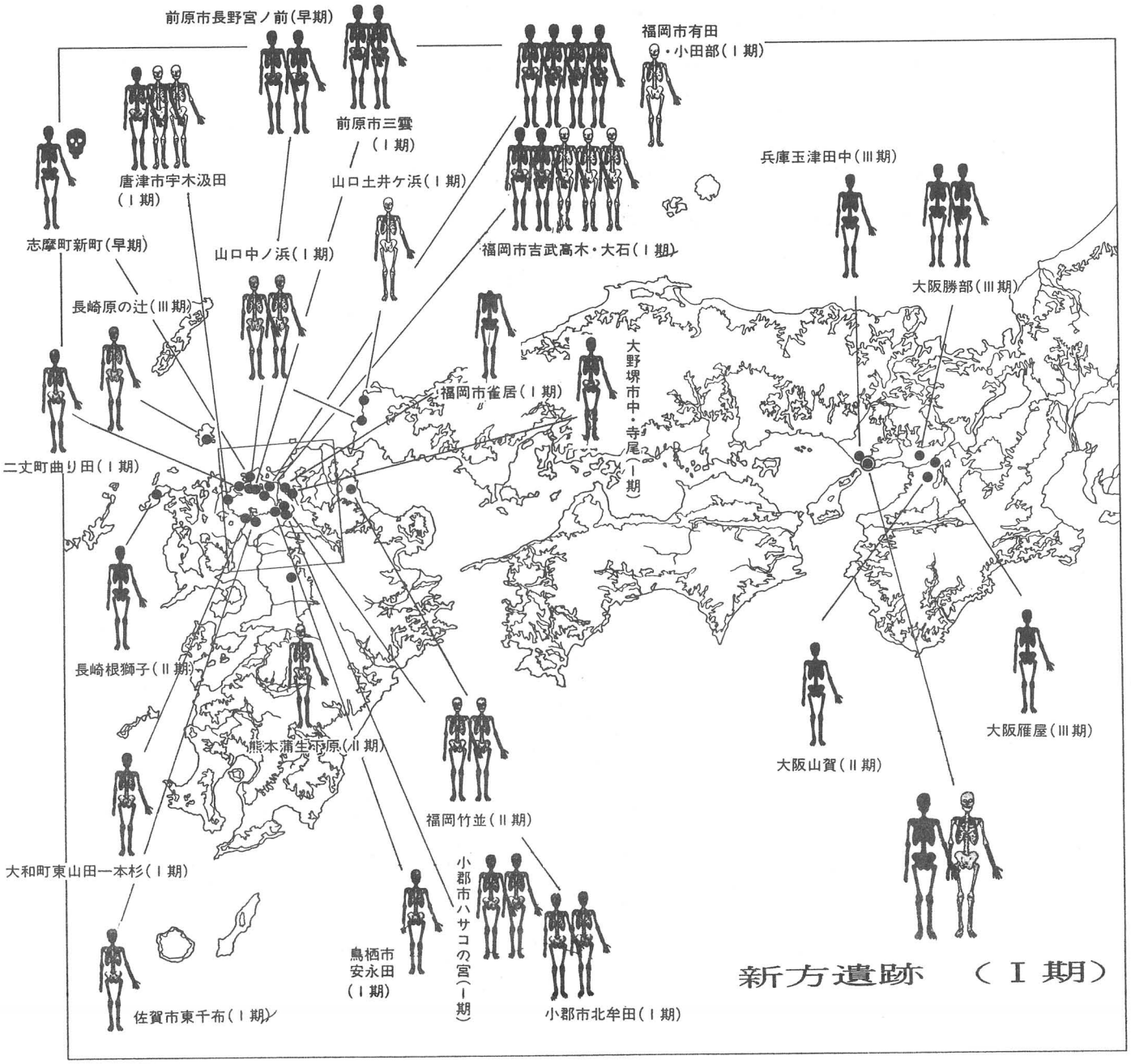


人骨２の歯の出土状況



歯の各部分の名称 「歯の解剖学」1994より

参考資料1



弥生時代前半の戦いの犠牲者の分布図

「倭国乱る」1997に新方遺跡追加、一部改変

参考資料2

新方遺跡（野手・西方地区）出土の弥生人骨

人骨1

保存状況　両下肢の下体骨下部から、足骨を除くほぼ全身の骨格が残る。ただし、体幹部の椎骨や肋骨などは保存が悪く、ほぼ完全に腐食する。

姿　勢　俯臥、伸展位の姿勢

頭部　頭頂を上に向け、顔は北向き。体肢骨の割には頭骨は大きい。土圧により頭骨は潰れる。

両腕　腰の前に両手を合わせた状態。ただし結縛はない。

両脚　平行に伸び、膝の結縛はない。

性　別　男性と判別できる。（下記の部分の特徴から。）

- 右腰骨大坐切痕
- 後頭結節
- 前頭骨の側頭線
- 鎖骨の大きさ
- 大腿骨の粗線の発達
- 上腕骨の三角筋粗面の発達

死亡年齢　成人（18～40歳）

身体的特徴　体　格　小柄、身長は155 ～160 cm程度

四肢長骨　全体的に短いが頑丈

尺骨近位端・上腕骨遠位端共に大きく頑丈である。

尺骨・橈骨は共に湾曲強く、大腿骨の粗線の発達、上腕骨の三角筋粗面の発達から、筋肉質の体型であったと考えられる。

頭蓋骨　頑丈。頭蓋長は約195 mm。

肩　幅　右鎖骨を見る限り大きかったと推定。

疾患・骨損傷

現状では認められない。

上位の腰椎又は下位の胸椎の何れか１個にサヌカイト製石鏃が刺さっていた模様。死亡時に受傷した可能性が高いので非常に注目できる。

人骨2

保存状況　上下の顎骨と歯のみが残る。上下の顎骨は輪郭は判るが完全に腐食しており、詳しい形態は読み取れない。

姿　勢　俯臥

性　別　不明

死亡年齢　壮年から熟年(30 ～50歳)

身体的特徴　歯列弓は崩れている。

・右上第1小臼歯　歯冠の全面で強く咬耗。咬頭部は象牙質を露出。
・右上第2小臼歯　歯冠の全面で強く咬耗。
・右上第1大臼歯
・右上第2大臼歯
・右下第2小臼歯
・右下第1大臼歯
・右下第2大臼歯

◎以上7本の歯は、咬合した状態で認められる。釘植していることは間違いない。

・左下第1小臼歯
・左下第2小臼歯
・左下第1大臼歯

◎以上3本の歯は、釘植した状態で認められる。

その他に遊離歯として、以下の破片が存在する。

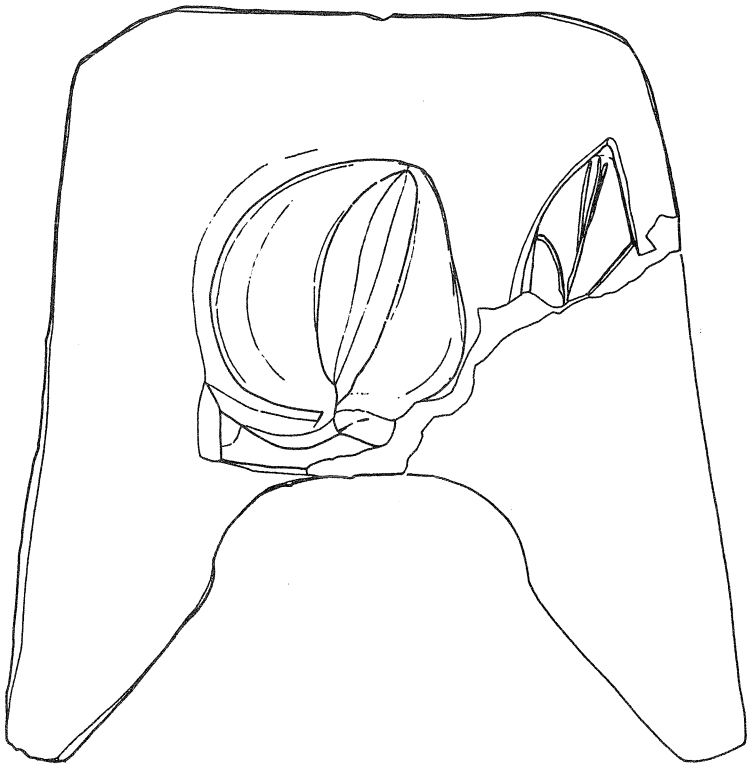
・左上第1大臼歯
・左上第2大臼歯
・左上第2小臼歯

その他

・両人骨とも胸部の骨格に当たる部分からサヌカイト製石鏃が出土。しており、注目できる。死亡時に石鏃で受傷しており、最初の弥生人について多くの情報を提供してくれる。

・人骨1は、縄文人に良く見られる特徴（低身長、頑丈で大きな頭骨）と、弥生人的な特徴（広い肩幅・大きめの上半身など）を併せ持っており、日本人の身体形質の変化を考える上での貴重な資料となろう。

有馬極楽寺（太閤秀吉湯山御殿あと）
現地説明会資料



平成９年５月２５日

神戸市教育委員会

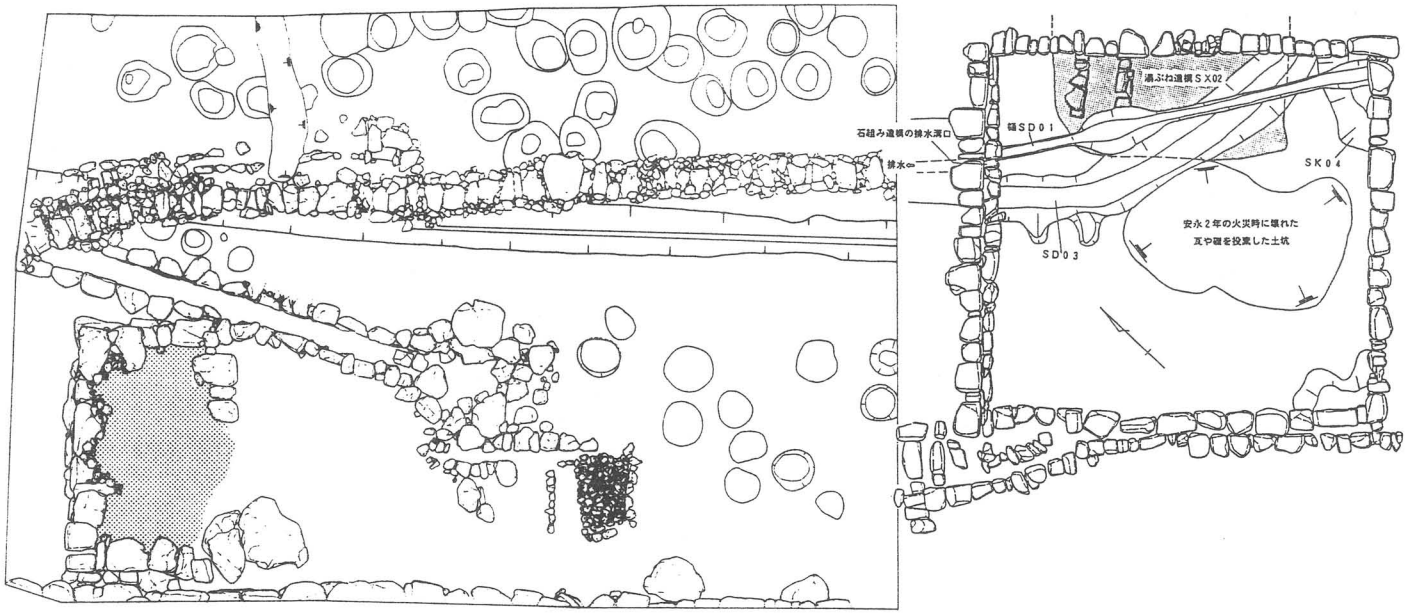
はじめに　平成8年12月20日から開始された有馬極楽寺の発掘調査において、秀吉の湯山御殿の湯ぶねと推定される遺構が検出され、平成9年3月16日にこの遺構を中心として現地説明会を開催いたしました。

その後ひきつづいて行われた調査の進展にともなって、安土桃山時代の遺構面においてこの御殿に付属すると推定される庭園が良好な状態で遺存していることが確認されました。確認された庭園関係の遺構には、

①茶の湯に使用する水をひき、それを汲む園池
②大ぶりの石を用いた石垣
③庭木の移植あと

などがあります。このほか、④泉源から湯をひくための何本かの樋の存在も確認されています。

今回の現地説明会ではこれらの遺構を中心として、出土した遺物等もあわせご覧いただきたいと思います。

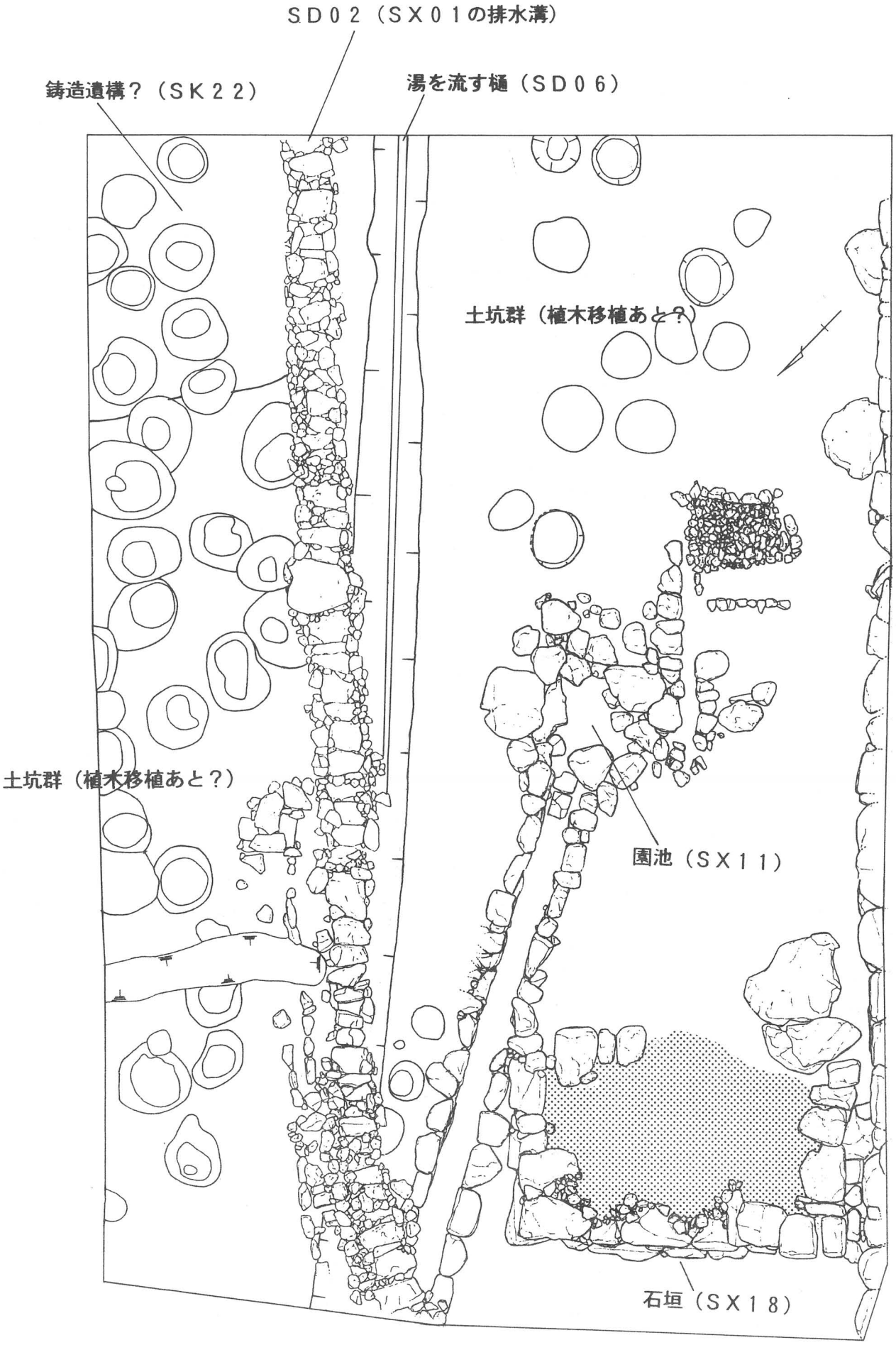


第３遺構面平面図（安土桃山時代）　Ｓ＝１／１５０

検出された遺構

園池（ＳＸ１１）　茶の湯に使用するための水をひき、それを汲むための池と考えられます。この池は上流からひかれた水を小規模な滝として池に落とす構造になっています。池の石組みは大ぶりの花崗岩・凝灰岩を直径３ｍ程度の範囲に組むもので、池底には青い砕石が敷かれています。池底の中央付近には花崗岩で組んだ浅い凹みがあります。

池の東側には一辺約１ｍの前石がおかれ、ここから滝をながめ、その一段下に据えられた珪化木に下り、池底の凹みの水を汲んだと考えられます。　池の下流は一段落とされ、水が石組みの溝を直線的に流れ下ります。



第３遺構面庭園部分平面図

0　5m

3

石垣（ＳＸ１８）　この溝の左岸は石積みが分岐し、これはひとかかえ以上ある石を用いた石垣となってさらに直角に屈曲し、北西に面する石垣へと続きます。この石垣の裏には大量の礫が詰め込まれ、この部分はあるいは建物の基礎になるのかとも考えられますが、後世の攪乱などもあって、どういった性格の遺構なのかはっきりとしません。石垣の前面にも石が敷かれ、何らかの形で利用されたと思われますが、それを推測する手がかりはつかめていません。

植木移植あと　園池および石垣遺構ほか、一部の地点を除く調査地の全域にわたって径１ｍ程度の土坑が４０以上確認されました。これらの土坑の一部には、何ものかをぐるぐる巻きにした藁縄が遺存していて、その内側にはこの周辺の土とはまったく色調の違う土が詰まっていました。

これら遺構のほとんどは庭園の植木の移植あとであると推定されます。遺存していた藁縄は植木の移植に際し、根のまわりにまかれたものでしょう。一部の土坑には植木の根が遺存していて、これらを調べることによってその樹種が判明するかもしれません。

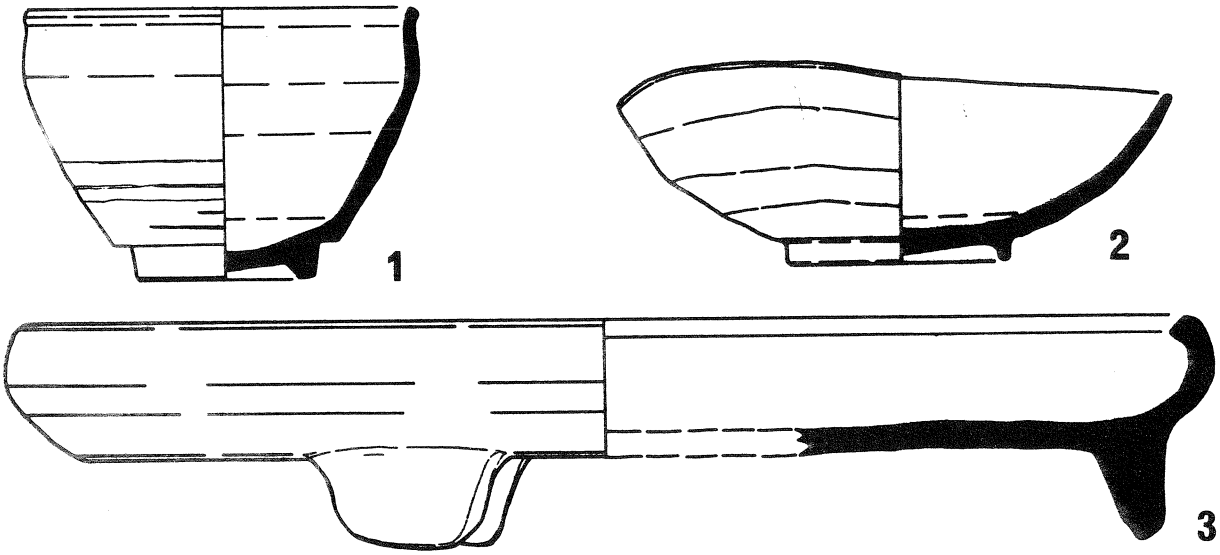
樋（ＳＤ０６）　泉源方向から調査区の中央付近を横切って直線的にのびる暗渠式の樋と推定されます。樋自体は腐ってしまい遺存していませんが、内部にたまった湯ゆあかや樋を埋めた痕跡がはっきり残っていて、埋め込まれたこの樋が幅１３㎝の断面方形、用材の厚み約３㎝であることを確認できました。これまでの調査でも別の樋あと（ＳＤ０１）が確認されています。

出土遺物

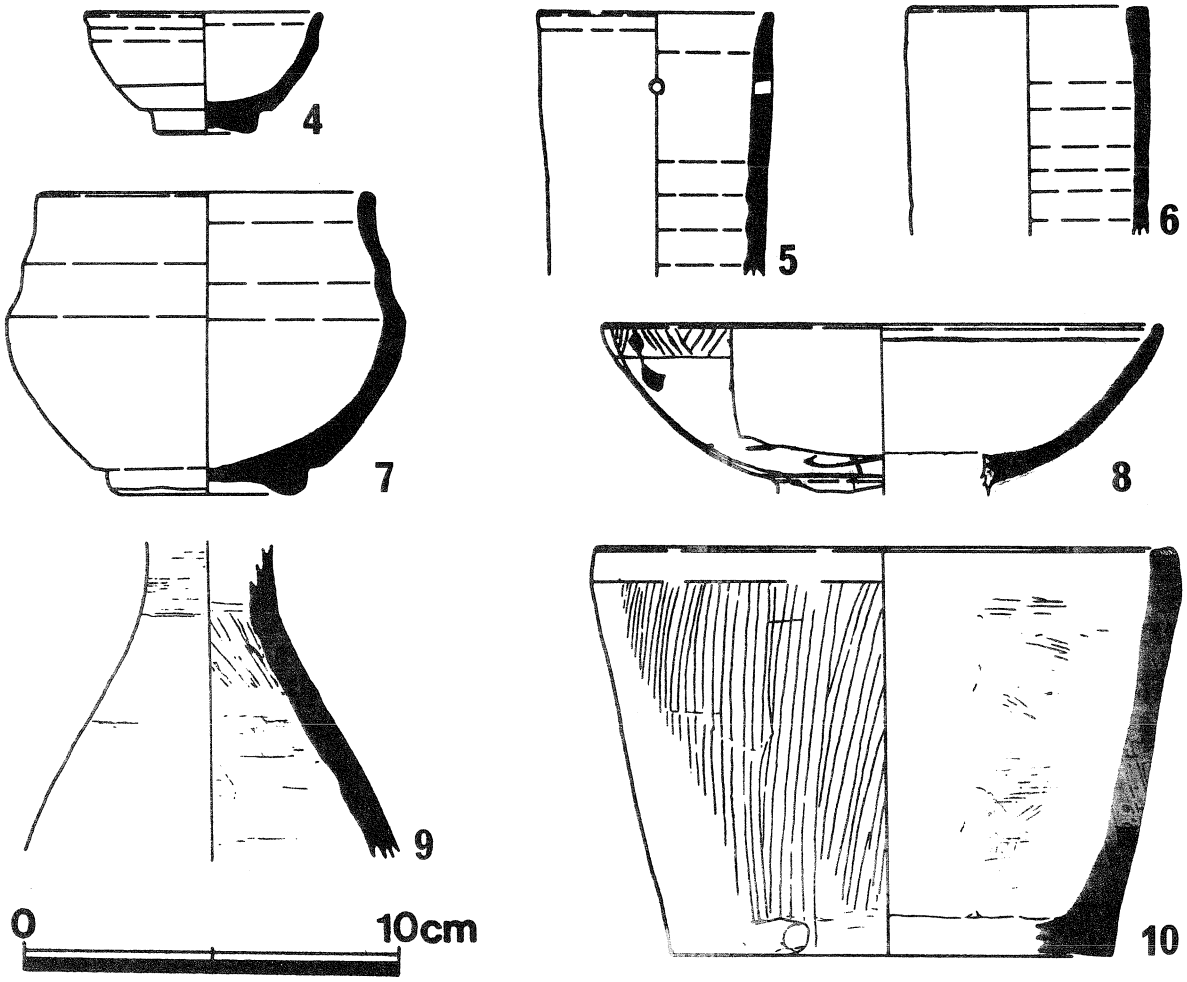
茶碗　安土桃山時代の遺構面から出土した茶碗類には国産（丹波焼・備前焼・瀬戸美濃焼等）・中国産・ベトナム産のものがあります。しかし、そのいずれも最高級のものとはいえず、秀吉の使用した茶道具はのこっていないようです。

瓦　これに対し、園池（ＳＸ１１）が瓦と粘土を使って埋め立てられていることもあって瓦類はかなりの量、 1.5ｔを越える量がこれまでに出土しました。瓦には平瓦・丸瓦のほか、桃の図柄をもつ鬼瓦・鯱などがあります。大坂城および四天王寺から出土した瓦と同じ文様の型を使った軒瓦があり、豊臣家おかかえの瓦師が湯山御殿に葺かれていた瓦を製作していることが明らかになりました。また、湯山御殿が建てられた文禄・慶長年間よりも古い天正年間の瓦のあることも判明しました。この瓦は胎土の特徴から大阪で作られたと確認できるものがあり、湯山御殿の建物の一部には大阪から移築された建物のある可能性が推定されます。

元禄時代の火災層出土の陶磁器

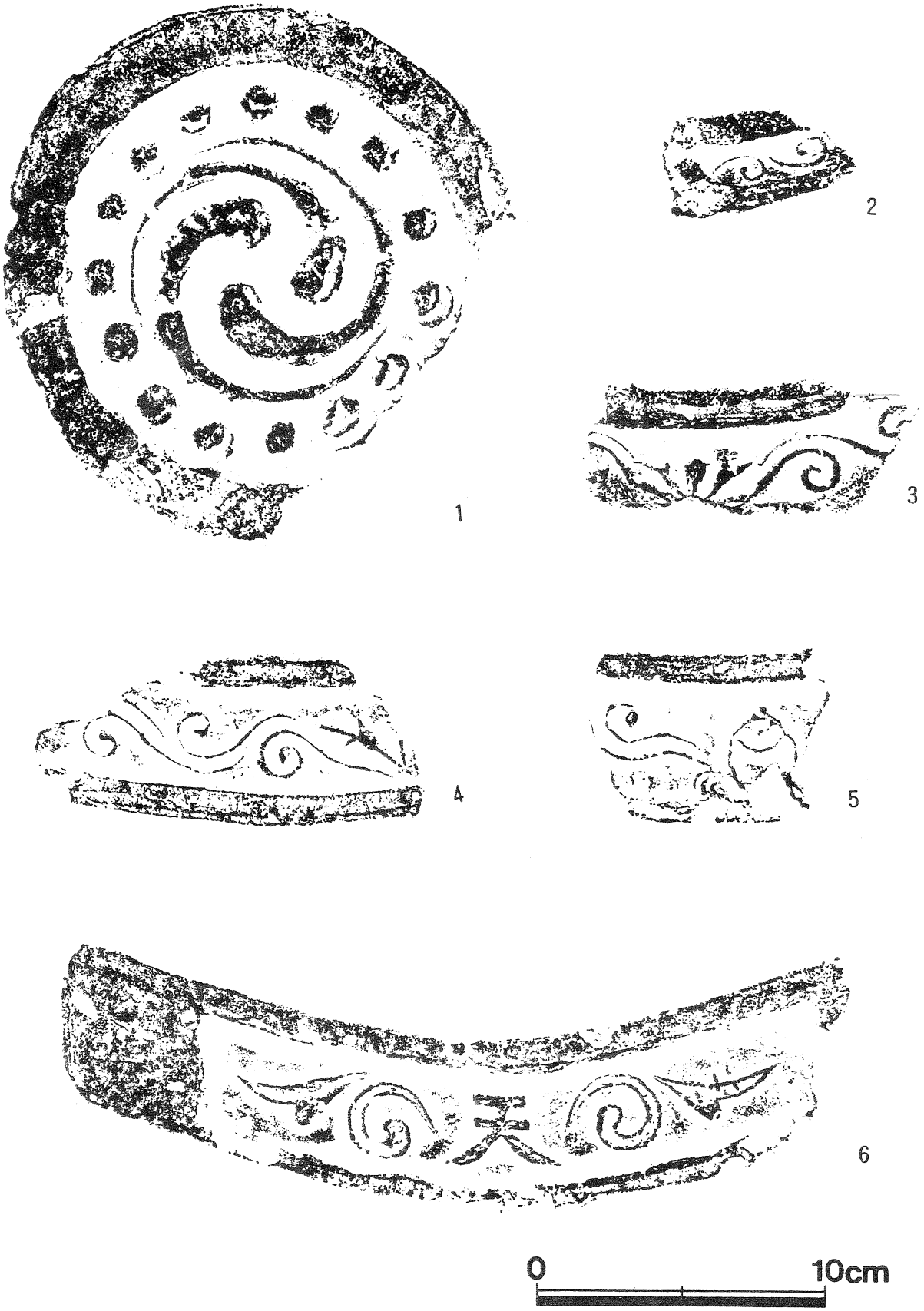


安土桃山時代の陶磁器



有馬極楽寺出土の陶磁器

1：美濃焼天目茶碗、2：美濃焼碗、3：丹波焼盤
4：美濃焼小天目茶碗、5・6：備前焼花入
7：軟質施釉陶器（内面黒色釉・外面白色釉）、8：ベトナム製染付碗
9：備前焼徳利、10：丹波焼鉢



安土桃山時代瓦の瓦当拓影
1：軒丸瓦、2～6：軒平瓦（2・3：大坂城例と同范、6：四天王寺例と同范）

まとめ

文禄3年(1594)に秀吉の湯山御殿が作られた際には、付近の家々65軒が強制退去させられているという記録があり、その敷地はかなり広いものであったと考えられます。地元では極楽寺・念仏寺のあたりに御殿があったと言い伝えられていましたが、正確な地点を伝える文書や絵図などの史料はありませんでした。今回の発掘調査によってその伝承の正しかったことが明らかになったわけです。

風早　恂さんの編まれた『有馬温泉史料』には慶長の大地震によって倒壊した湯山御殿修理費用明細の古文書がひかれています。これによって倒壊した御殿には化粧の間・湯殿・雪隠・湯屋・数寄屋などがあり、地震後さらに仮の御殿・新湯仮の湯屋・馬屋などが建てられたことが知られます。

今回の調査範囲においては、湯山御殿の礎石等は検出されませんでしたが、池の構造などからそのおおよその位置は推定できます。前石と滝の位置関係、またこの付近の地形から、御殿自体は極楽寺本堂から念仏寺のあるある地点にあったものと考えて間違いないでしょう。今後、周辺の調査が行われれば、御殿そのものが確認できると思います。

十二月二十九日、豊臣氏五奉行、有馬湯山御蔵米算用状ヲ下ス、

〔一話一言〕三十　摂州有馬湯山町古文書

摂州有馬湯山御蔵米御算用状

一、六拾壱石九斗三升　文禄四年残
一、百五拾石　慶長元年納物成
一、百五拾石　同弐年納物成
合三百六拾壱石九斗三升
右之はらひ

大蔵御局湯治ノ賄料

一、拾石　大蔵卿局御湯治の間のまかないニ被下、
大蔵卿局さし紙在之、

大地震ニ破損セル御殿ノ修理料

一、弐百拾四石弐斗六升　湯の山うへ御殿、大ちしんニそこれ、申候を、つくろい申候入用、
一、三拾七石弐斗六升　同所御けしやうの間、つくろいの入用、
一、拾九石弐斗三升　同所御湯殿の、つくろい入用、
一、拾九石壱斗　同所御せつちん、つくろいの入用、
一、拾八石七升　同所御ゆやの、つくろい入用、
一、拾四石一斗六升　同所御すきやの、つくろい入用、
一、六石三升　上様湯治被成候ニ付、かりの御殿立申候入用、
一、八石三升　右材木入置申候小屋之入用、
一、拾石七升　御くみ湯の樽の入用并人足飯米、小日記ニ在之、
一、拾八石弐斗壱升　新湯かりのゆや、同ゆのわき候水船之入用、
一、弐拾五石六斗三升　同所御馬や弐間半ニ五間半之入用、
はらひ
合四百石五升
過上三拾八石壱斗弐升
右之外

新湯仮屋水船料

一、銀子弐十四枚　御朱印　慶長三年分
一、銀子弐十四枚　只今迄　同弐年分
右皆済也、
右払御朱印並小帳請取申候、此日付以前之払御朱印・小帳等雖在之、重而御算用に相立間敷候也、
慶長三
十二月廿九日

長束大蔵大輔(正家)　判
石田治部少輔(三成)　判
増田右衛門尉(長盛)　判
浅野弾正少弼(長政)　判
徳善院(前田玄以)　判

善福寺
池之坊
掃部

「有馬湯山御蔵米算用状」風早　恂編『有馬温泉史料』上巻（1981）より引用

秀吉が没し、徳川家康が天下をとると、豊臣家につながる建造物のほとんどは伏見城をはじめとして徹底的に破壊されます。今回確認された園池も秀吉の湯山御殿を取り壊した際にそこに葺かれていた瓦をつかって埋め立てられていて、他の秀吉の遺跡と同じ運命をたどったものと考えられます。その御殿あとの上に徳川氏が信仰している浄土宗の極楽寺・念仏寺が建てられたようで、極楽寺の屋根の棟に三つ葉葵の紋がのっているのはこの間の事情を表しているかのようです。

しかし、埋め立てられたことがかえって幸いし、現在にまで湯山御殿に付属する池の石組みがほぼ完全な形でのこされ、御殿に葺かれていた瓦が大量に残ったのは、歴史の皮肉といったところでしょうか。

今回４００年ぶりに確認された秀吉の湯山御殿の湯ぶねおよび庭園あとは、現地での保存・公開が検討されています。今後、湯ぶね部分についてその全体のかたちを明らかにするための調査を引き続いて行うことになっています。今後の調査の進展にともなって湯山御殿自体も確認できるかもしれません。その調査成果をもとに、有馬にゆかりの深い秀吉の遺跡についての情報を可能な限り発信していきたいと思っています。

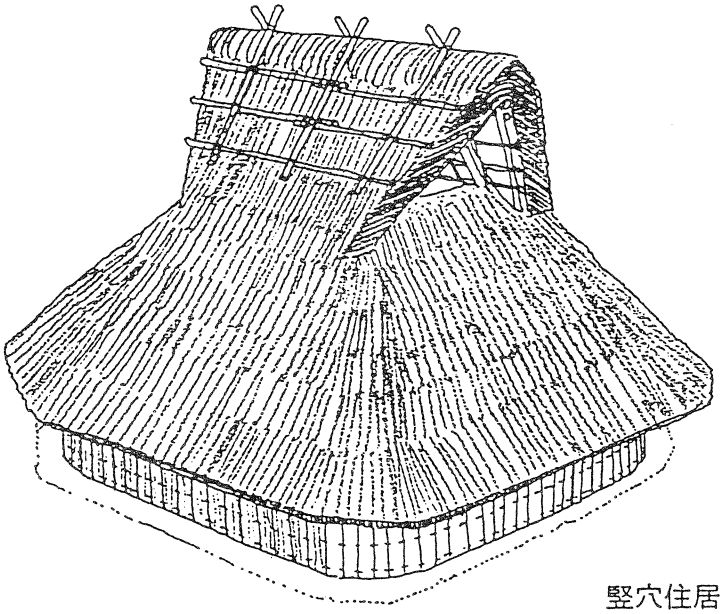
今回の発掘調査にあたっては、小野健吉氏・黒田慶一氏・西桂氏・宮本佐知子氏をはじめとする多くの方々からご教示・ご指導をいただきました。また、極楽寺をはじめ有馬温泉観光協会ほか各方面からの協力を得ています。

表紙：園池出土鬼瓦（S＝1／3）

勝雄遺跡

現地説明会

資料



竪穴住居

平成９年１２月７日

神戸市教育委員会

勝雄遺跡現地説明会資料

1．はじめに

勝雄地区は、神戸市北区淡河町の西端にあたり、西は三木市志染町、北は美嚢郡吉川町に接し、南東には帝釈・丹生の山々を望むことができる山中の集落であるが、地区の南辺を流れる淡河川がつくった河岸段丘と谷平野は淡河町域で最も広大であり、豊かな水田地帯が広がる地域です。

また勝雄地区は、安土・桃山時代からの宿場町であった本町地区の東に接し、地区の中央部を東西に湯乃山街道が通じていて、三木へ至る木梨峠への登り口にあたる。このように、勝雄地区は昔から交通の要としてひらけ、さらに豊かな水田地帯を擁して、淡河八幡神社が鎮座する淡河の中心地であったと思われます。

今回の発掘調査は、勝雄地区の土地改良事業に伴うもので、勝雄遺跡の第3次発掘調査になります。今回の発掘は淡河八幡神社の北西部を周る排水路予定地を調査して、飛鳥時代の竪穴住居8棟・掘立柱建物5棟、柱列1カ所、奈良時代の溝2条、鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物4棟が発見されました。

2．周辺の遺跡

淡河町ではじめて発掘調査がおこわれたのは、圃場整備に伴って実施された淡河城の調査です。淡河城の調査では城に関係する資料は発見されませんでしたが、弥生時代終

わり頃の竪穴住居が発見されています。さらに、中村地区の調査では古墳時代前期の竪穴住居と古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴住居と掘立柱建物、鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物・井戸などが発見されています。これらの資料から本町から中村周辺には、一時的な断絶があるものの弥生時代末～中近世にかけて営々とした人々の生活の足跡をたどることができます。

淡河町を特徴づける遺跡として、城跡・経塚・中世寺院跡などがあります。

城跡には、淡河城・萩原城・天正寺城・野瀬城・勝雄城などがあります。そのほとんどが、戦国時代の羽柴秀吉の三木城攻めに関連する城跡で、安土・桃山時代には廃城になりました。経塚は、山陽自動車道建設に伴って発掘調査された勝雄経塚や北山経塚・溝の上経塚など多数発見さています。経塚は、当初末法の世まで経典を保存する目的で仏教経典を容器に納め山中に埋納したが、鎌倉・室町には極楽往生・現世利益の祈願・供養を目的に造られたものです。

中世寺院には、現在も甍が聳える石峯寺があり、１１カ所の塔頭跡があります。

その他には、現在調査中ですが、木津遺跡で鎌倉時代～室町時代の大規模な居宅跡が発見されています。

このように、淡河町は平安時代以後の歴史の表舞台に現れ、遺跡も数多く残っています。しかし、奈良時代以前の遺跡は少なく、特に古墳は現在までの調査では発見されていません。

3．発見された遺構

発見された遺構は、すべて地面から30㎝～50㎝下の地山から掘られた状態で見つかりました。遺構の重なりの状態と出土した遺物から、およそ6時期にわたって人々が生活していたことがわかりました。

Ⅰ期　弥生時代後期（約１９００年前）

発見された遺構は北部でみつかった土坑１のみである。しかし、遺物包含層からは弥生土器の底などが発見されているので、後世の開墾・造成で削られてしまったとおもわれる。

Ⅱ期　飛鳥時代初め（約１４００年前）

長方形の長辺にカマドを造りつける竪穴住居がつくられる。竪穴住居4が埋まった後に竪穴住居3が建てられていることから竪穴住居4と竪穴住居7がこの時期の住居と考えられる。

Ⅲ期　飛鳥時代前半（約１３７０年前）

正方形に近い小型長方形の短辺にカマドを造り付ける竪穴住居の時期。竪穴住居3・竪穴住居8と竪穴の方向から竪穴住居6もこの時期の住居と考えられる。

Ⅳ期　飛鳥時代中頃（約１３５０年前）

直径50㎝～70㎝大の大型の柱穴に柱をすえた掘立柱建物を住居とした時期。建物の方位は一部でそろうが、一定でない。建物規模は短辺4.5m長辺6.0mと短辺4.5m、長辺5.0mに規格が統一されているようである。溝1はこの頃掘削されたと推定さ

れる。

Ⅴ期　　奈良時代後期（約１２００年前）

調査地の北部で発見された東西に掘られた溝２条が埋まった時期である。溝１は２度掘りかえしがおこなわれて継続して使用されたと考えられる。

Ⅵ期　　鎌倉時代後期～室町時代前期（約６５０年前）

小型の25㎝前後の柱穴に柱をすえた掘立柱建物の時期である。

Ⅵ期以後、調査地の周辺は水田として利用され、水溜状の遺構が数カ所が発見されたほかは、生活の跡は見つかっていない。

４．おわりに

勝雄遺跡に集落が出現した７世紀初めは、天皇家直轄支配地である壬生部・屯倉※用語解説の設置が盛んに行われ、耕地拡大政策が図られた時代である。それに伴って、地方の中小豪族が冠位十二階の制定などによって天皇家直属の官僚として天皇家直轄支配地の経営にあたったと考えられている。

このような時期、勝雄地区に忽然とカマドを造り付ける竪穴住居の集落が出現し、７世紀半ばに掘立柱建物に建て替えながら集落は営まれ、奈良時代まで継続すると考えられる。このような事例は、神戸市内では北区長尾町宅原遺跡・三重県四日市市貝野遺跡などで確認されており、７世紀初めの畿内周縁地域での古代村落がどの様な経緯で成立したかを検討するうえで、重要な資料を提供する遺跡と考えられる。

勝雄遺跡　遺構一覧（1）

遺　構　名	形　態	規　　模	時　　期
竪穴住居 1	方形	南北4.5m,　東西1.5m以上	7 世紀
竪穴住居 2	方形	南北4.2m,　東西1.3m以上	7 世紀
竪穴住居 3	方形	南北5.0m,　東西4.8m　カマド西	7 世紀（Ⅲ期）
竪穴住居 4	方形	南北4.3m,　東西5.2m	7 世紀（Ⅱ期）
竪穴住居 5	方形	東西4.2m,　南北1.2m以上	7 世紀
竪穴住居 6	方形	東西5.0m,　東西3.0m以上　カマド北	7 世紀（Ⅲ期）
竪穴住居 7	方形	南北4.9m,　東西6.1m　カマド北	7 世紀（Ⅱ期）
竪穴住居 8	方形	南北4.5m,　東西4.2m　カマド北	7 世紀（Ⅲ期）
掘立柱建物 1	小型柱掘形	南北4.0m以上，東西4.0m以上	中世（Ⅵ期）
掘立柱建物 2	大型柱掘形	南北4.5m以上，東西4.0m以上	7 世紀（Ⅳ期）
掘立柱建物 3	大型柱掘形	南北3.5m,　東西4.5m	7 世紀（Ⅳ期）
掘立柱建物 4	大型柱掘形	南北2.5m以上，東西5.5m	7 世紀（Ⅳ期）
掘立柱建物 5	大型柱掘形	南北2.5m以上，東西3.5m	7 世紀（Ⅳ期）
掘立柱建物 6	大型柱掘形	南北2.0m以上，東西6.5m以上	7 世紀（Ⅳ期）
掘立柱建物 7	小型柱掘形	南北3.6m,　東西2.5m以上	中世（Ⅵ期）
掘立柱建物 8	小型柱掘形	南北6.6m,　東西2.4m以上	中世（Ⅵ期）
掘立柱建物 9	小型柱掘形	南北4.6m,　東西1.5m以上	中世（Ⅵ期）

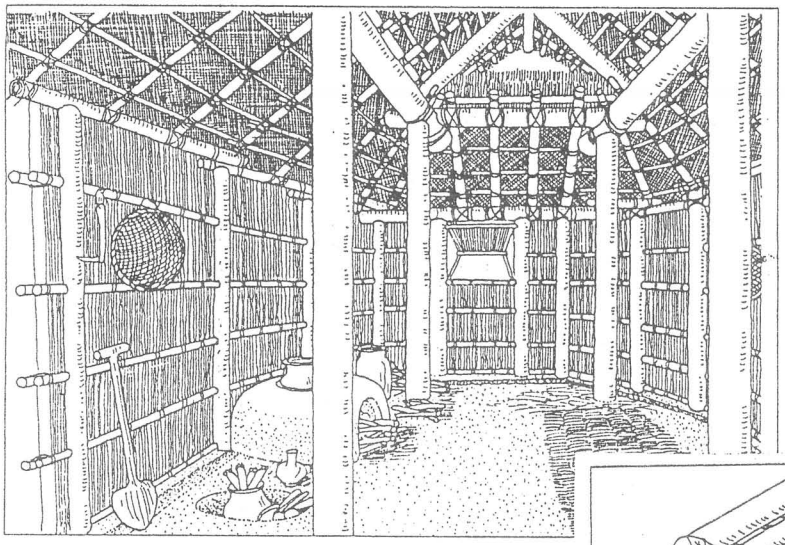
勝雄遺跡　遺構一覧（2）

遺構名	形態	規模	時期
柱列　1	大型柱掘形	東西6.5m，3間分	7世紀（Ⅳ期）
溝　1	断面台形	幅3.0m～1.5m，深さ1.0m	7世紀～8世紀
溝　2	断面U字形	幅1.2m，深さ0.6m	7世紀～8世紀
土坑　1	不定型	長径1.5m，短径1.1m	弥生時代後期（Ⅰ期）
土坑　2	方形	東西1.4m，南北1.0m　木炭床	7世紀（Ⅲ期）
土坑　3	方形	東西1.3m，南北2.5m　木棺墓？	中世（Ⅵ期）

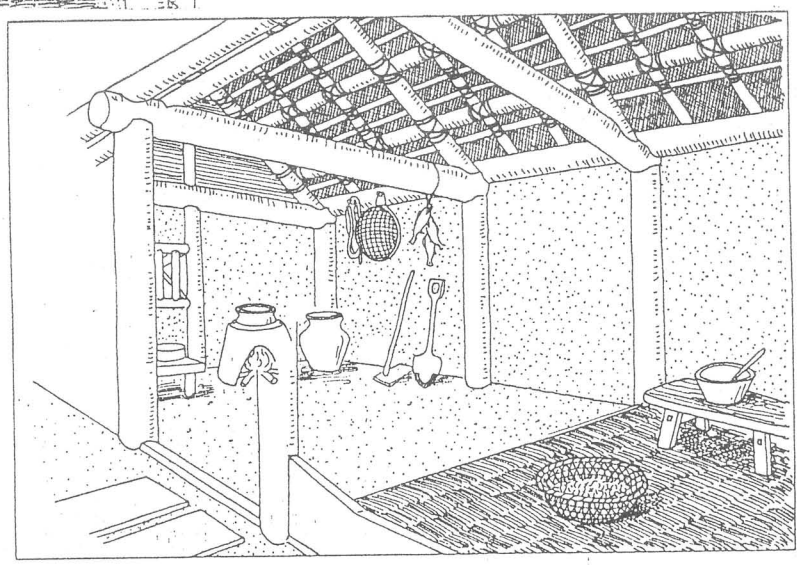
竪穴住居・掘立柱建物の有様

『復元日本大観5　古代住居と古墳』

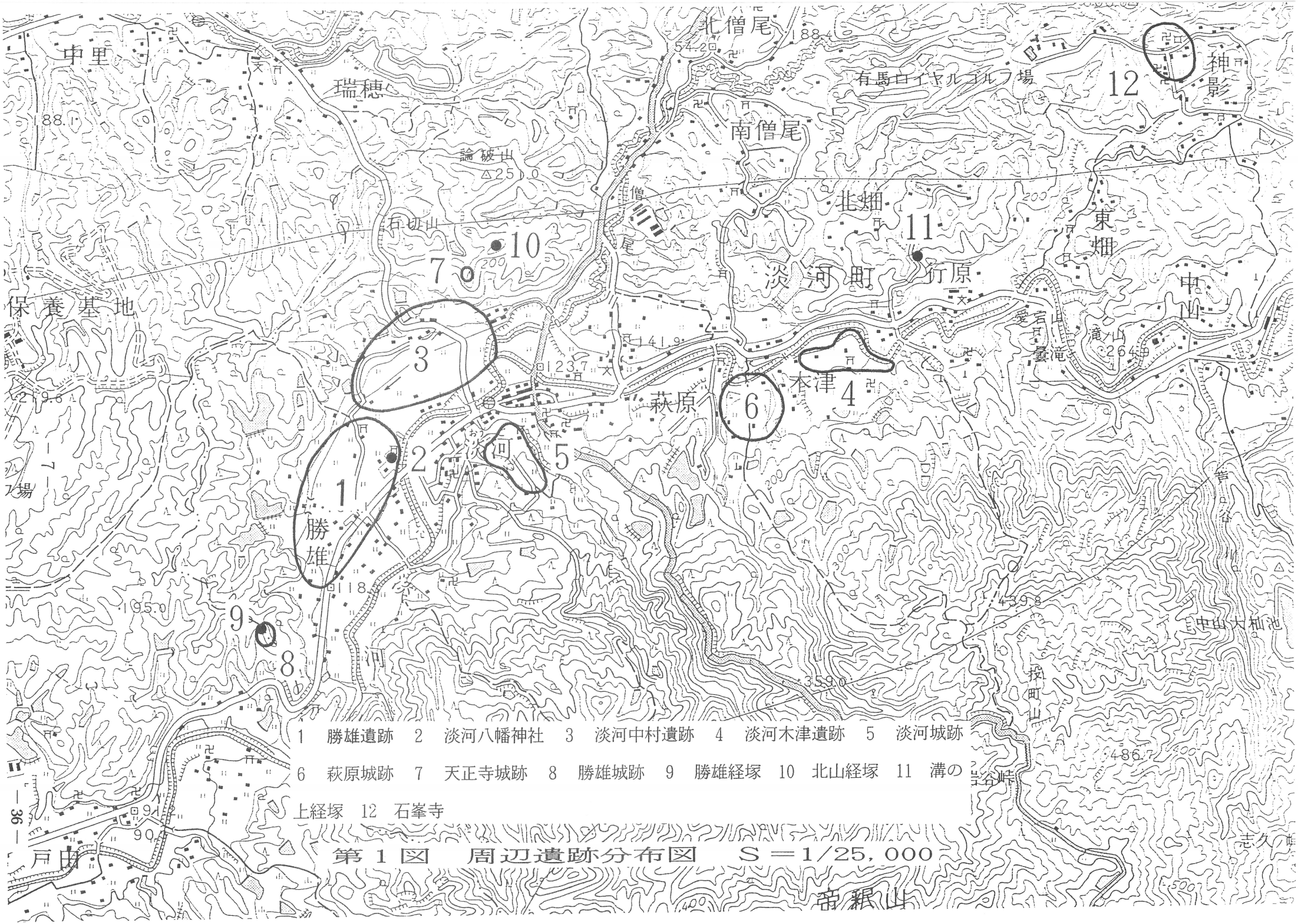
世界文化社　より転載



竪穴住居内部予想図

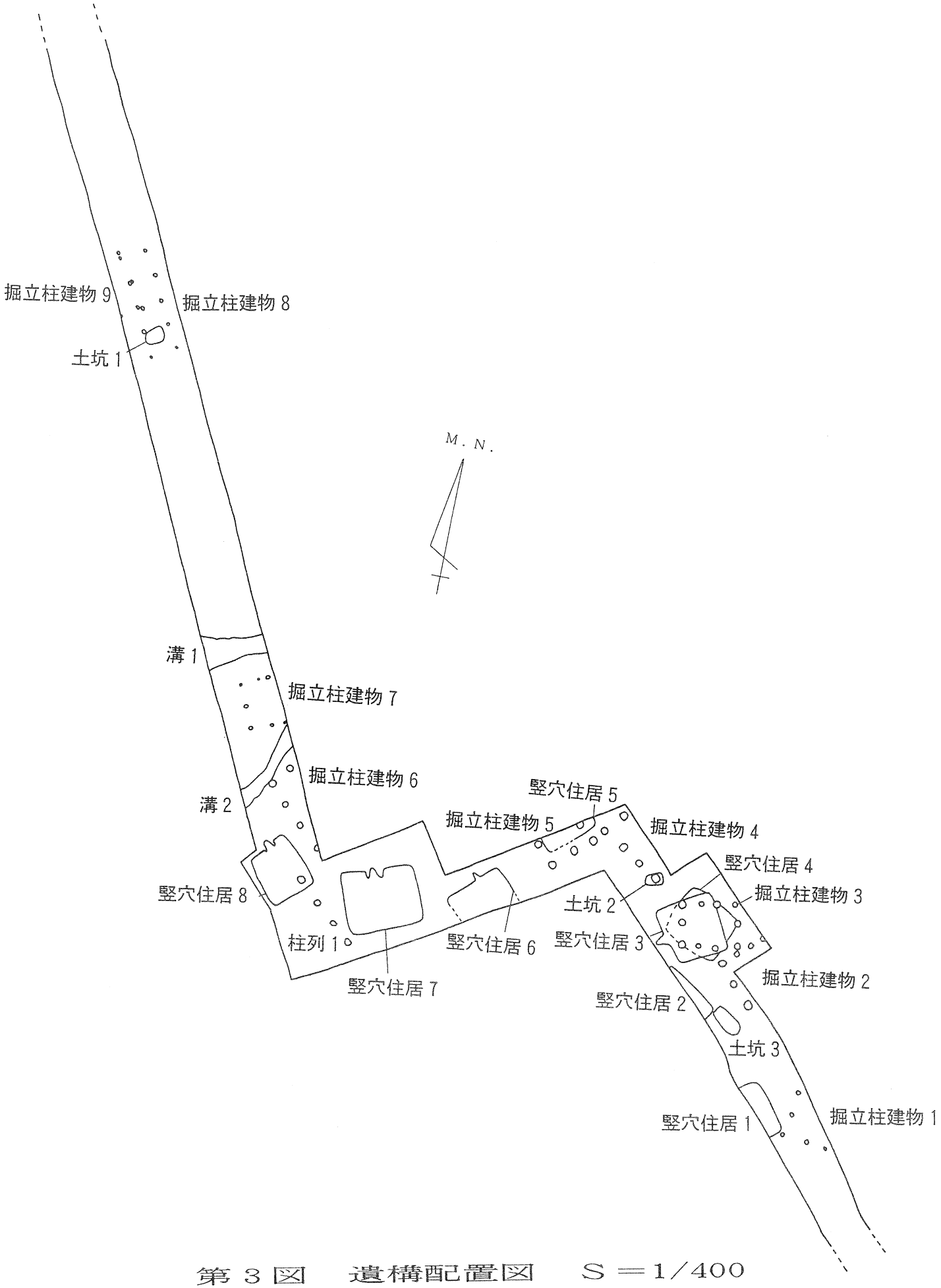


掘立柱住居内部予想図

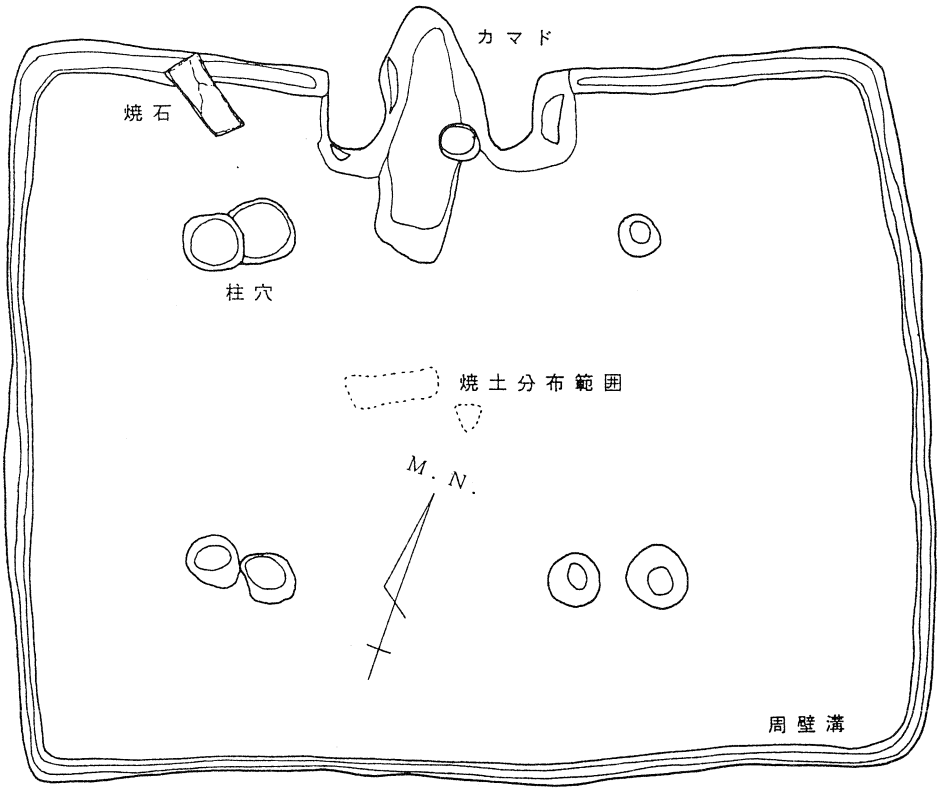


第１図　周辺遺跡分布図　Ｓ＝1/25,000

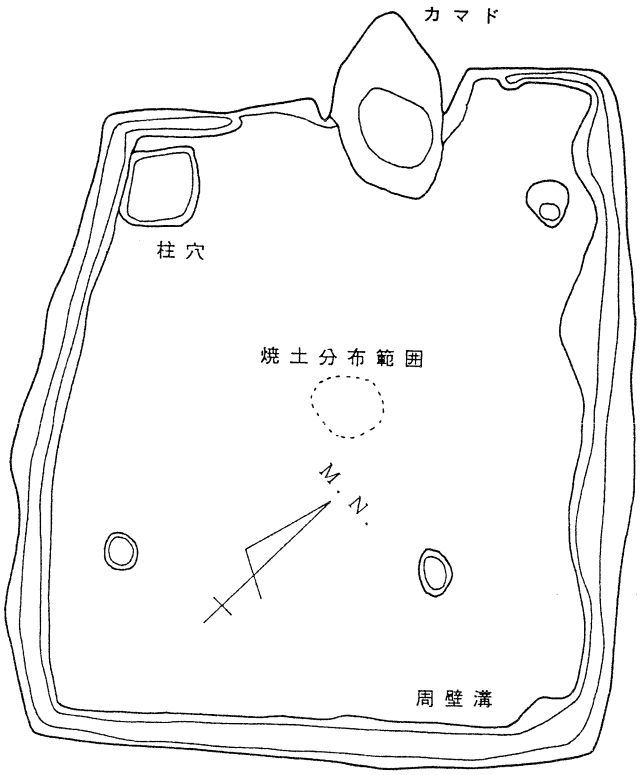
第２図　調査区配置図　S＝1/2,500



第３図　遺構配置図　Ｓ＝1／400

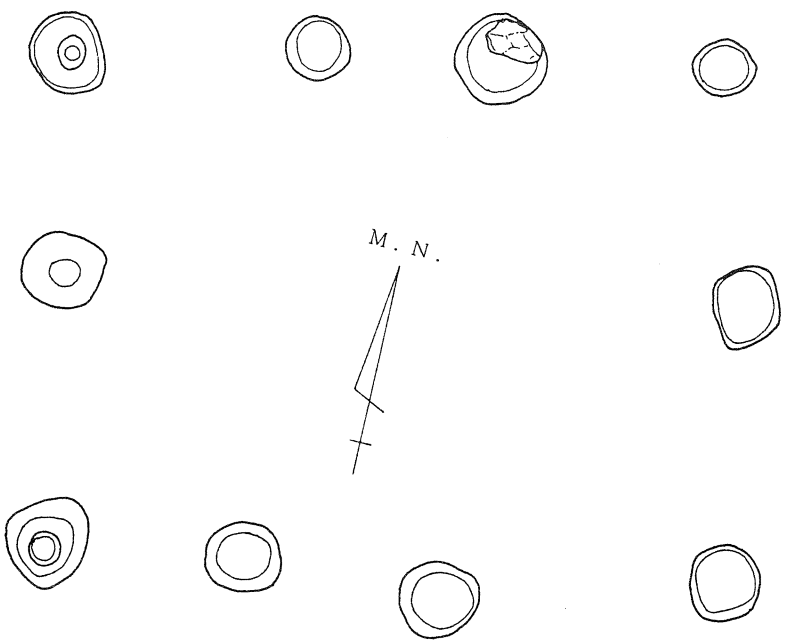


竪穴住居7

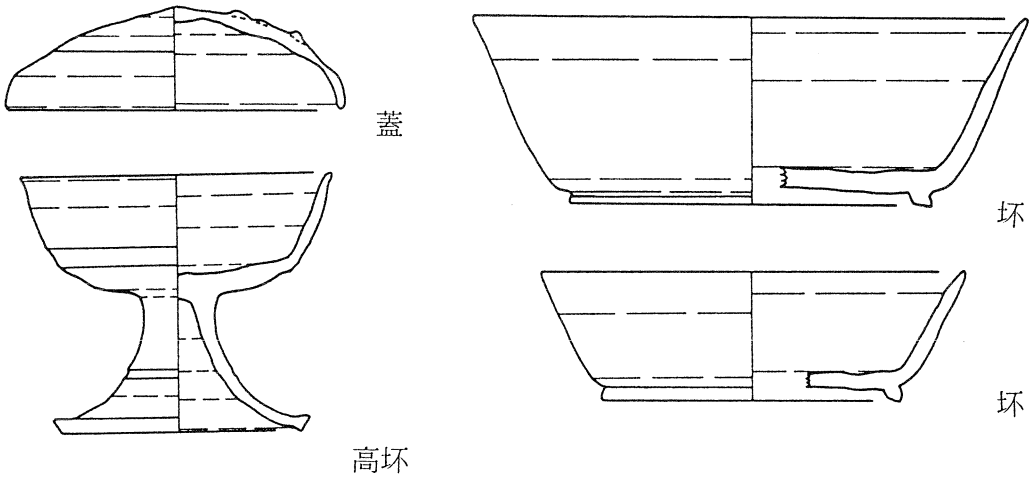


竪穴住居8

第4図　竪穴住居平面図　S＝1/50

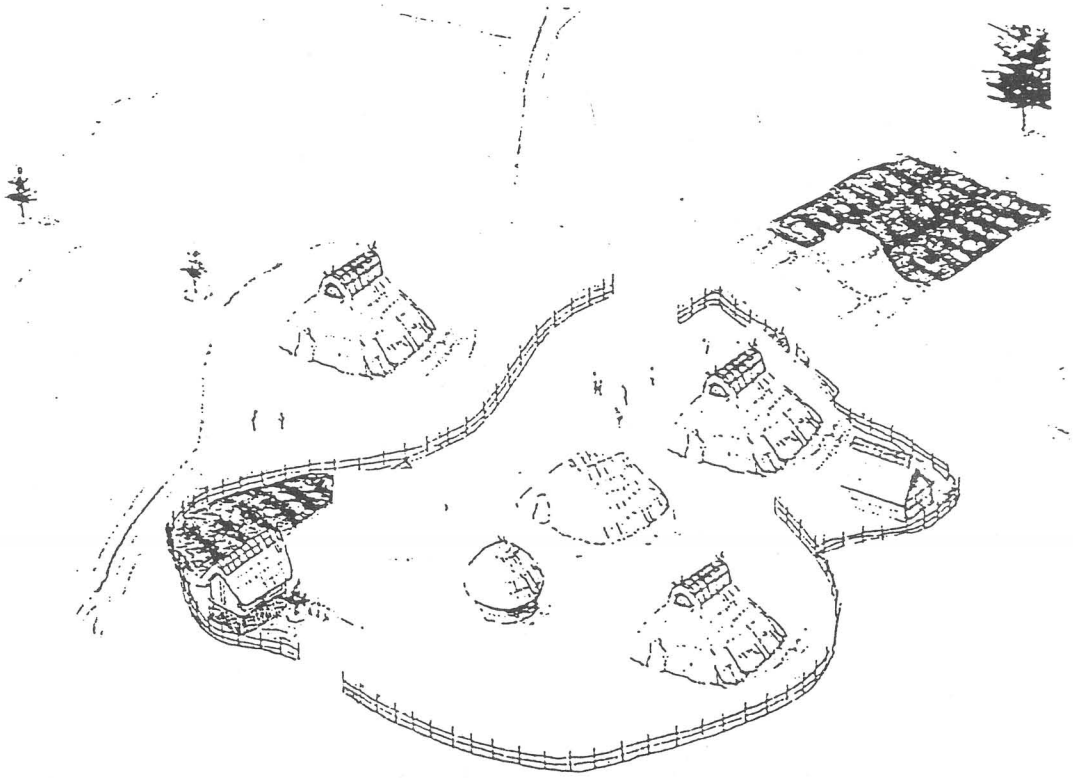


第５図　掘立柱建物３平面図　Ｓ＝1/50



第６図　勝雄遺跡出土須恵器　Ｓ＝1／５

当時の集落のうつりかわり



竪穴住居の村　（イメージ図）

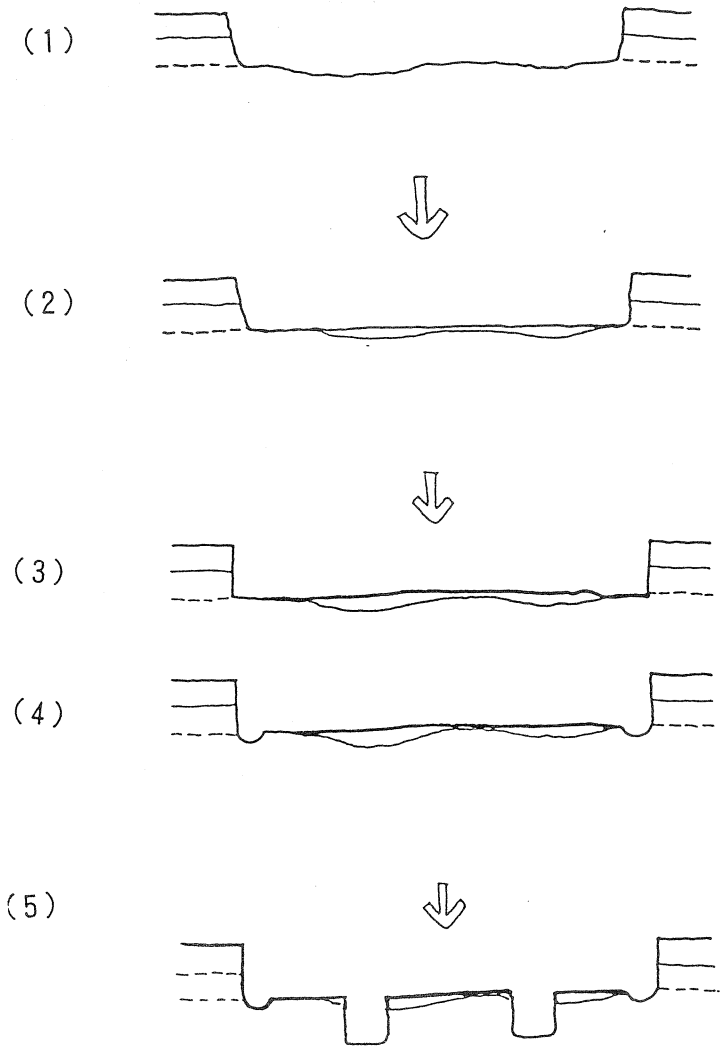
掘立柱建物の村　（イメージ図）

『復元日本大観５　古代住居と古墳』世界文化社
より一部改変転載

竪穴住居を建てる

『古代の村』より転載

床面のつくり方



（1）まず敷地が選ばれ住居の輪郭が決められる。この輪郭にそって地面が掘りおこされるが、これは荒掘りで、床面をととのえていない。地表から６０cm～７０cmほの深さまで掘っている。

（2）つぎに掘り上げた土を一部もどして、床面の凹凸をならして水平にする。

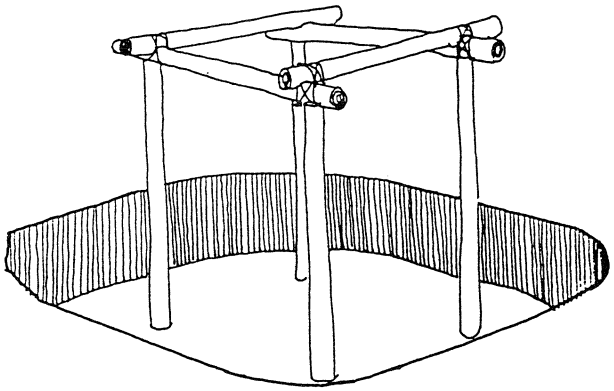
（3）床面ができると、カマドの位置がきめられ、床面もカマドの部分だけ掘り下げられ粘土・山砂によってカマドがつくり付けられる。

（4）カマドがつくられると、つづいて周囲の壁がととのえられる。壁のととのえと共に周囲に溝がほりこまれ、壁板を立てる準備が終了する。

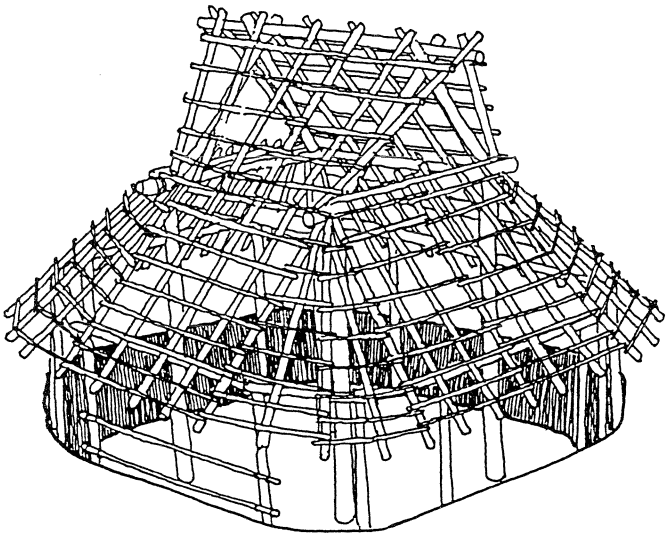
（5）壁溝がつくられると、今度は柱の位置が決められ、床面に柱穴が掘られる。

次に上屋(うわや)がつくられる。

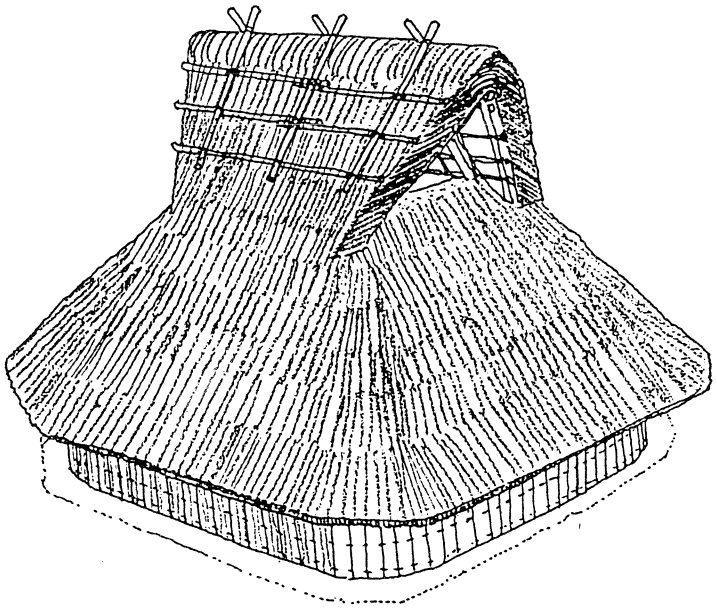
（6）まず、柱穴(はしらあな)に柱が立てられ、柱の上には桁(けた)がかけられ、その上に梁(はり)がわたされる。



（7）そして，梁(はり)の上に合掌(がっしょう)がつくられその上に棟木(むなぎ)がのせられる。この棟木(むなぎ)に垂木(たるき)がのせられ、垂木(たるき)の上に草葺(くさぶき)の屋根がかけられる。



（8）最後に、壁面(かべめん)がつくられ壁溝(かべみぞ)に板材(いたざい)をたてていって周囲から土の崩(くず)れを防いでいる。竪穴住居(たてあなじゅうきょ)の建築作業は一応終了する。床は土間(どま)となるわけだが、敷物(しきもの)・わらや草をしいていたのだろう。



用語解説

壬生部（みぶべ）―― 乳部とも書く。大化改新（たいかのかいしん）以前の天皇家の私有民の一種で、御子代部（みこしろべ）の中に含まれる。天皇が皇子（おうじ）のために設けたとされ、皇子（おうじ）の養育費の捻出（ねんしゅつ）する名目で、諸国の国造（こくぞう）の私有民を割（さ）いて設けられた集団と考えられている。土地単位ではなく、団体すなわち人間を単位としていた。

壬生（みぶ）部は各皇子（おうじ）ごとに定められ、多くは任務終了とともに名を失ったが、中には皇子（おうじ）の名を冠した御名代部（みなしろべ）という天皇家の私有民として存続したものもある。

このような名代部（なしろべ）・子代部（こしろべ）・壬生部（みぶべ）の設置は、五世紀～七世紀初め、大和朝廷（やまとちょうてい）の経済基盤の強化を目的として行われ、地方の国造（こくぞう）（豪族層）が官僚になっていったと考えられている。

屯倉（みやけ）―― 大化改新（たいかのかいしん）以前の大和朝廷（やまとちょうてい）直轄領地。穀物を収納する倉や、経営上の事務所の名称であったが、のちに土地や耕作農民を含む意味となった。勝雄遺跡の周辺では、西隣の志染（しじみ）町付近が縮見屯倉（しじみのみやけ）と考えられている。壬生（みぶ）部などとともに五世紀～六世紀の天皇家の経済基盤といえる。

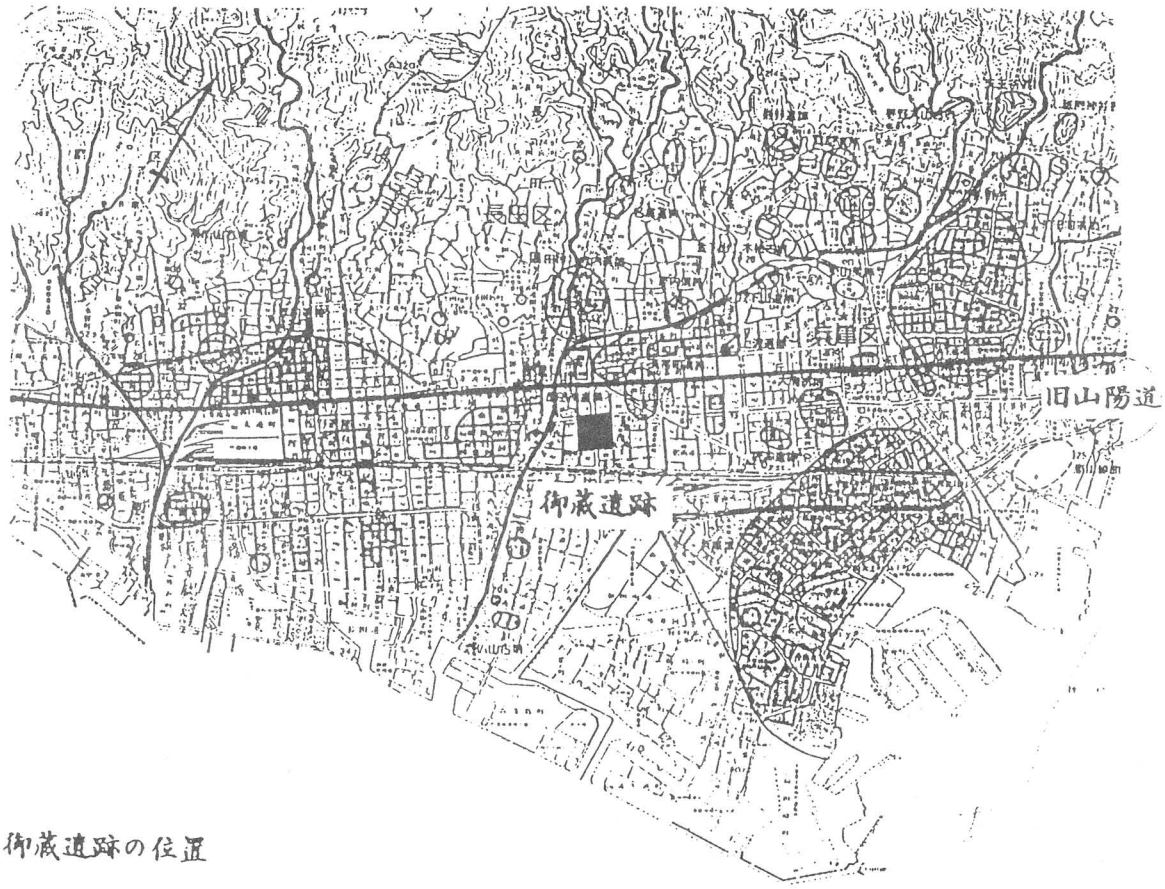
御蔵遺跡地元説明会資料
平成10年2月6日
神戸市教育委員会
（財）神戸市スポーツ教育公社

御蔵遺跡の概要

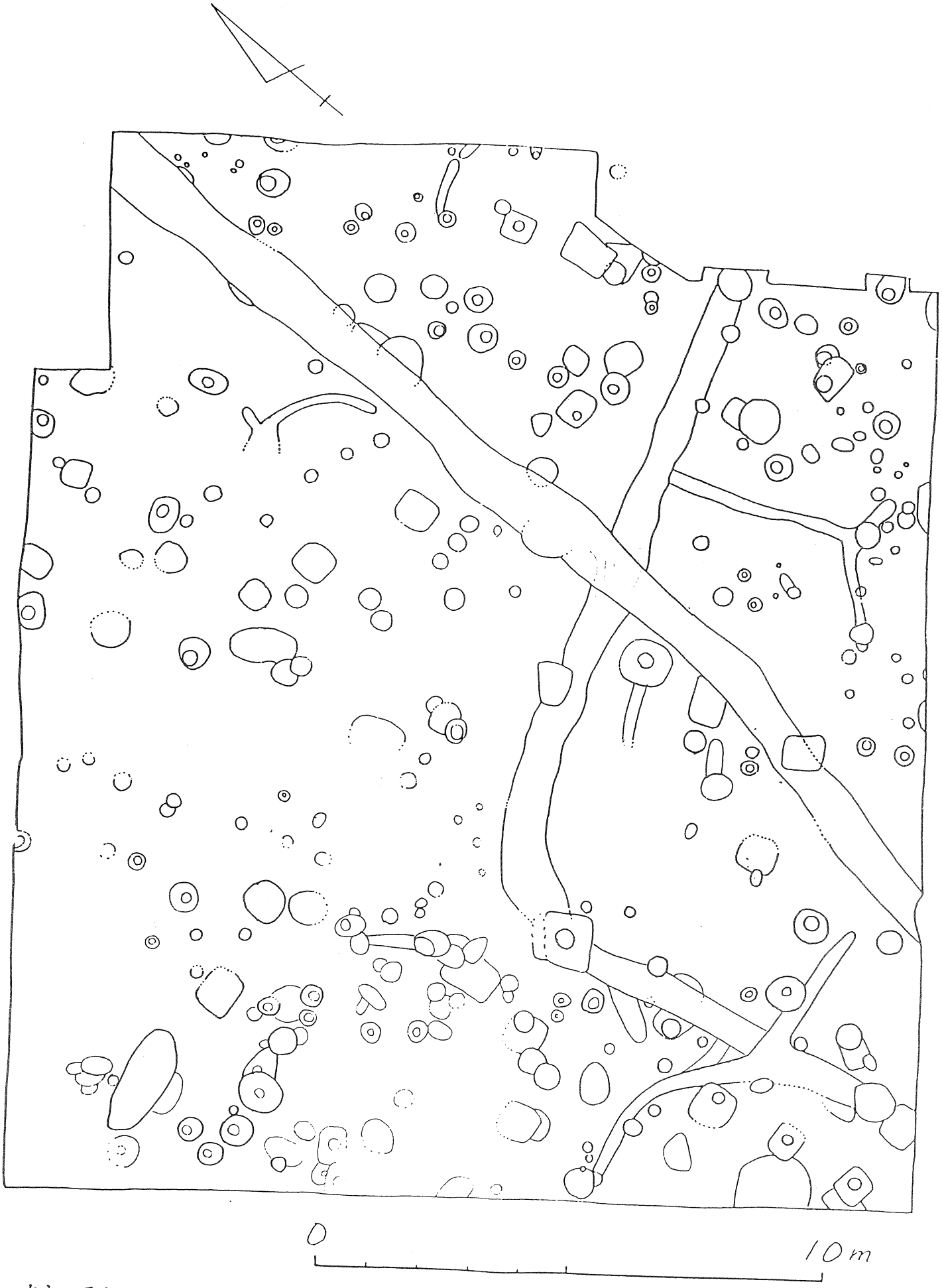
調査名　市営御菅西第2住宅建設に伴う御蔵遺跡埋蔵文化財発掘調査
調査地　神戸市長田区御蔵通5丁目66他
調査面積　約400㎡
調査主体　(財) 神戸市スポーツ教育公社
調査概要　今回の調査では、現在の地表から約50㎝下で、奈良時代の終わりごろから平安時代の始めごろの遺構面が検出されました。遺構の密度は非常に高く、現在の区画ではなく、南北方向に向きをあわせた、太い柱を持つ掘立柱建物や、溝、柱穴、土器や鹿の骨が入った穴など見つかりました。また、当時の人々が使っていた土器や瓦なども多数見つかっています。

注目されるのは、瓦が出土している事です。当時、瓦が葺かれる建物は、寺や役所などに限られており、現在の様に一般的なものではありません。この事から、この御蔵地区が、有力な人々が生活する、当時の中心的な場所であった可能性があります。

さらに下の土層から、人々が生活していた地面が見つかっており、奈良時代以前にも人々が生活していた事がわかります。詳しい内容は、これからの調査によって明らかにしていきたいと思います。



御蔵遺跡の位置



奈良～平安時代の遺構　S＝1/100

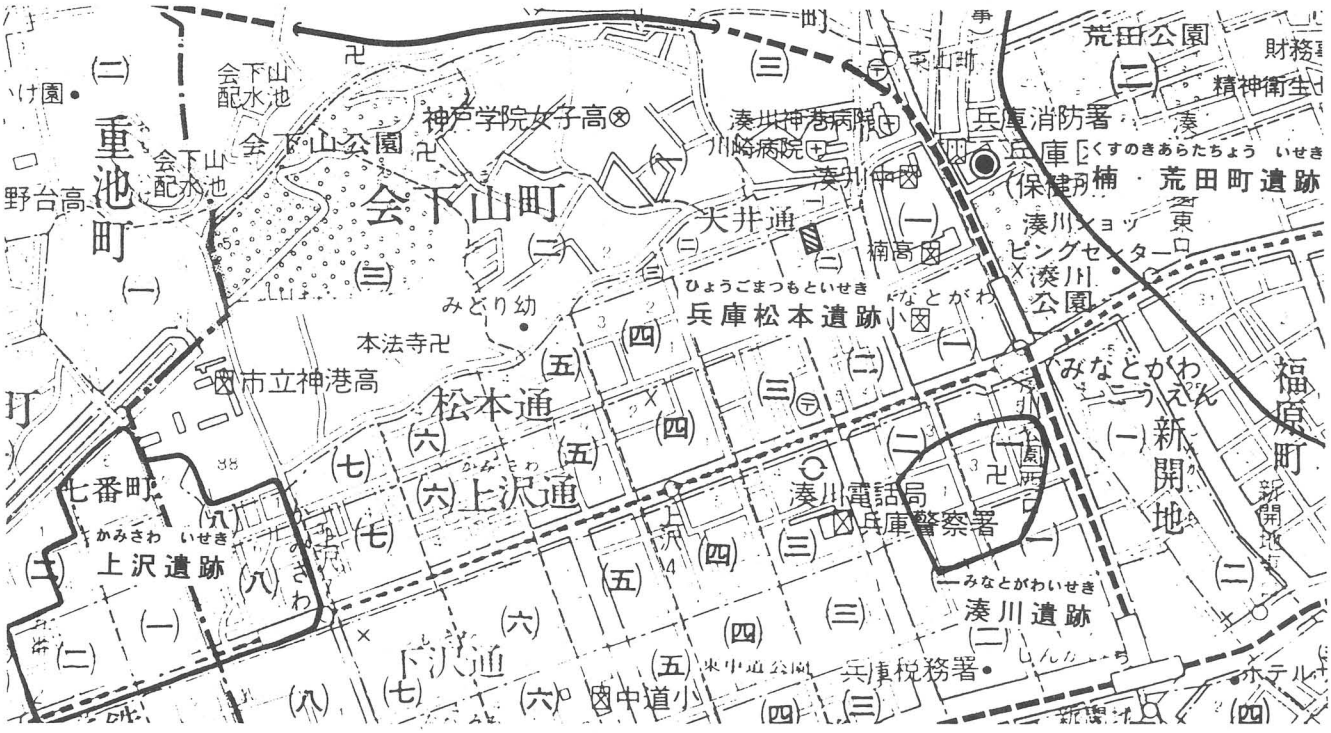
1998・3・22

兵庫松本遺跡見学のしおり

神戸市教育委員会

今日、みなさんにお越しいただいたこの遺跡は、昨年の10月に発見されたものです。ここに市営住宅をたてる計画が出されるともに、遺跡があるかないかを確かめるための試し掘りをしたところ、千数百年前の土器のかけらや柱の跡が見つかったため、遺跡のあることがわかりました。現在の町名をとって兵庫松本遺跡と名づけ、市営住宅の大きな基礎をつくるのに土地を深く掘って、いままで残されてきた遺跡が失われてしまう前に、後世に記録というかたちで歴史の証拠を残すために調査をおこなうことになりました。

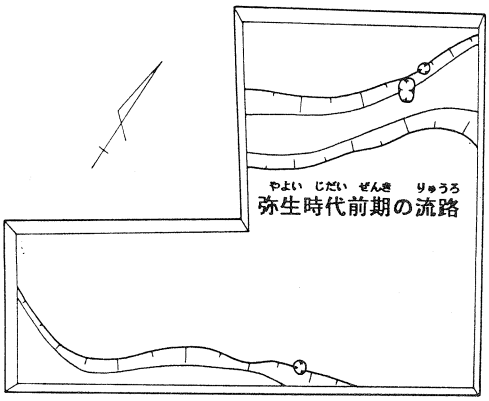
このところこの周辺では、復興事業にともなってたくさんの遺跡が発掘調査されています。山手幹線沿いで現在も調査をおこなっている上沢遺跡では、弥生時代前期（いまからおよそ2300年前）から鎌倉時代（およそ 700年前）にわたってむらがあったことがわかっています。発見されたものの中でめずらしいものとしては、古墳時代中頃（およそ1500年前）のお祭りに使われたと想像されている石の小玉や刀をまねたペンダントのようなものなどがたくさんでてきたほか、朝鮮半島から来た人びとがつくったと考えられている建物跡、そして奈良時代（およそ1200年前）のおまじないに使ったと考えられている土でつくったミニチュアの馬や銅製のベルトのバックルなどがあります。

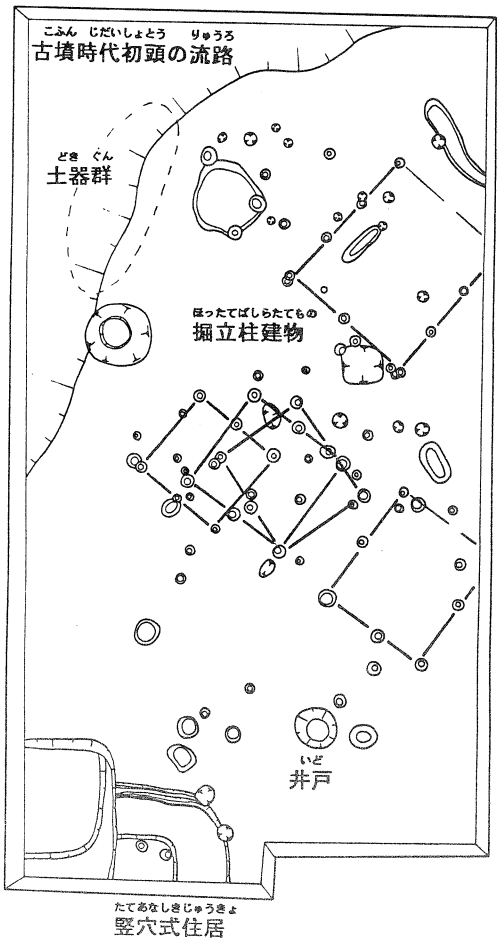


兵庫松本遺跡と周辺の遺跡

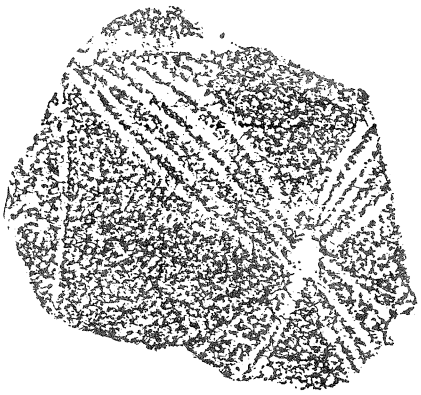
それでは、現在調査中の兵庫松本遺跡についてご説明いたしましょう。まず、地表から50～80cmのところまで掘ると、まず幾筋もの細く浅い溝が見つかりました。この溝は田んぼを鋤く時についたもので、溝の中からでてきた土器から、鎌倉時代頃はこのあたりは田んぼだったことがわかりました。その田んぼの土を掘りすすむと、弥生時代前期から古墳時代初頭（およそ1700年前）の人びとの生活の痕跡が発見されました。古墳時代初頭のものとしては、掘立柱建物４棟と大量の土器が見つかった流路があります。これらの土器は、流路の淵の部分にびっしりと敷きつめるように投げ込まれていました。でてきた状態から、ゴミとして捨てたのではなく、なにかのお祭りに使われたのではないかと考えられます。弥生時代後期（およそ1800年前）のものとしては、竪穴式住居１棟と井戸１カ所、溝などがあります。そして少し時代はさかのぼりますが、調査地の北端付近で弥生時代前期の流路がみつかりました。その中から、下に示したような「木葉文」と呼ばれるこの時代に特徴的な模様の入った土器のかけらが出てきました。日本で米作りが始まった頃のものです。実は北側の地区は全体が荒い砂の堆積で、弥生時代の始めごろは湊川の本流か支流かいずれにしても大きな川が流れていたと考えられます。

この遺跡では、豊かな川の流れに支えられて生活を続けた古代の人びとの足跡がはっきりと残されていることがわかり、また私たちの祖先の歴史を考える貴重な資料がたくさん発見されました。兵庫松本遺跡はさらに周辺に広がっているものと考えられます。大切な祖先の遺産を後世に伝えるため皆様のご協力を賜りますようお願いいたします。





遺跡の全体図



木葉文（実物大）

現地説明会資料

平成10年度

1998年5月10日
神戸市教育委員会文化財課

上沢遺跡見学のしおり

上沢遺跡は平成元年（1989）に房王寺線の道路拡幅に伴い、長田区6・7番町で初めて埋蔵文化財発掘調査が行われました。この時の調査によって、この地域にも、古くから人々が住み続けていたことが明らかになりました。

その後、上沢遺跡の調査は、平成8年（1996）の山手幹線拡幅に伴う調査で、埋蔵文化財が極めて良好に地下に存在することがわかり、記録にとどめる為の発掘調査を行いました。これ以後、上沢地区での調査件数は増大し、同時にそれぞれの調査地点で地域の歴史を明らかにする資料が次々と発見されました。

最も古くは、縄文時代の終わり頃（2300年前頃）に流れていた川から縄文人が使った土器が見つかっています。

大陸から日本に米作りが伝わった、弥生時代の初め頃の人達の生活した跡も見つかりました。（2200年前頃）

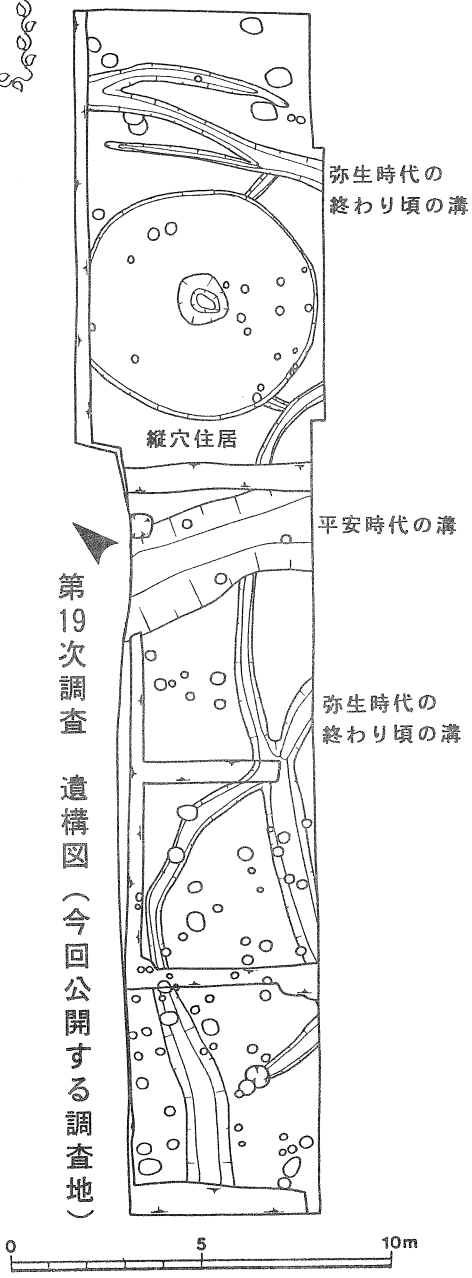
それから時代は少し新しくなって弥生時代の終わり頃から古墳時代の初め頃になりました。（1700年前～1600年前頃）上沢に再び人々が住み始めます。多くの溝が掘られ、割れた食器のゴミ捨て穴も見つかりました。円形の縦穴住居が1棟、四角形の縦穴住居が2棟見つかりました。縦穴住居のまわりには住居を囲むように溝が巡っているものもあります。

それからまた、長い時間が過ぎていき、日本の首都が奈良にあった時代（1200年前頃）、都から遠く離れた上沢でも人々は元気に生きています。この時代の上沢では掘立柱建物が見つかり、丸太を縦割りにした材をくり抜いて作った井戸や、板材を精巧に組んだ井戸も見つかっています。柱穴からは銅製のベルト金具も見つかりました。これは役人の服装につけられる金具で、地方の役所の存在が考えられます。また、雨乞いなどを祈願する時に使う土製のミニチュアの馬も見つかっています。

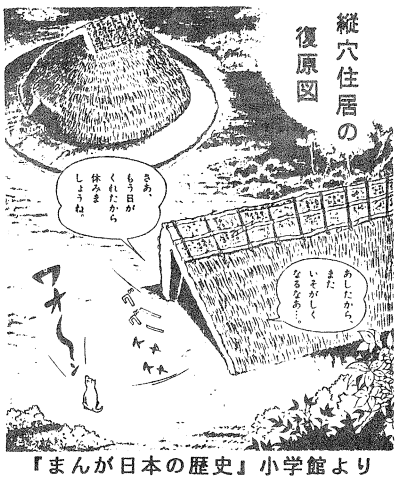
その後、都は京都に移り平安時代です。この時代にも上沢の人達は掘立柱建物に住み、生活をしています。（1100年前頃）

それからまた、時は流れていきます。紫式部が『源氏物語』を書き、平清盛が神戸の福原に都を遷した時代を過ぎた鎌倉時代。（800年前頃）上沢の人達はその同じ時代をずっと暮らして来ました。

それから、上沢遺跡では、あのいまわしい阪神・淡路大震災の地割れの痕跡や弥生時代中頃（2000年前頃）に野島断層が動



第19次調査　遺構図（今回公開する調査地）

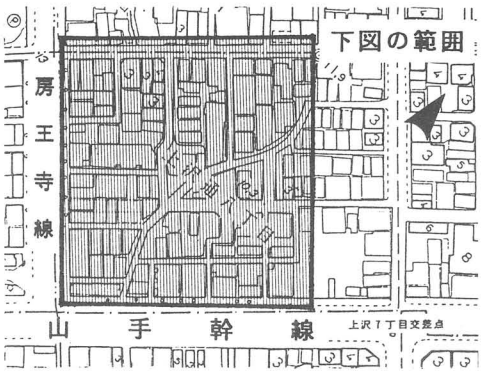


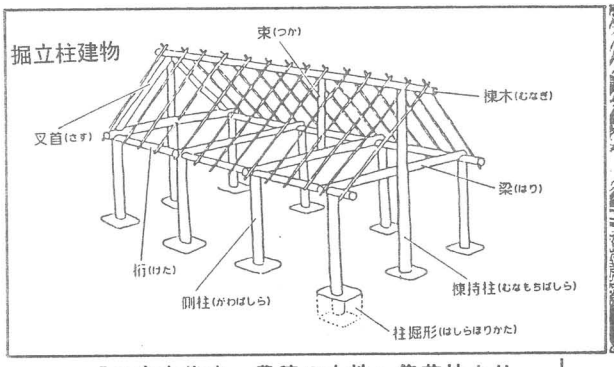
縦穴住居の復原図

『まんが日本の歴史』小学館より

いた時の地すべりの痕跡も見つかっています。

実に、上沢の人達の足跡は2000有余年に渡って今につながっているのです。地域の歴史は不明な点が多いのですが、発掘調査によって、私たちの祖先が大地に刻んだ跡が、今、明らかになろうとしています。上沢遺跡はさらに周辺にも広がっていると思われ、祖先の残してくれた大切な遺産を私たちの時代で終わらせることなく、子どもや孫の時代に伝える為に、皆様のご協力を賜りますようお願いいたします。





『日本古代史　豊穣の大地』集英社より

縦穴住居の内部の様子（『まんが日本の歴史』小学館より）

房王寺線

第18次

第12次

第6次

第5次

①奈良時代の井戸
一辺約2m
深さ約2m

②中世の大穴
約9m×3m
深さ約1m
用途不明

第10次

第4次

③銅製ベルト金具
柱穴から出土
一辺2cmで
正方形の金具
（巡方）

⑤弥生時代初め頃の穴
弥生前期の土坑

第14次

第13次

⑥掘立柱建物
奈良時代の建物

⑦鎌倉時代の井戸
底からオケが出土
（曲げ物）

第7次

⑧掘立柱建物
平安時代の建物

第3次3区

第8次

第3次2区

④古墳時代初め頃の溝と穴
ごみ捨て穴（土坑）
大量の土器が出土

第16次　6区

第16次　2～5区

第19次

⑨弥生時代の終わり頃の溝

⑩古墳時代初め頃の家
周囲を溝が巡る

⑪弥生時代終わり頃の家

⑫平安時代の溝

上沢遺跡で見つかった主な遺構

平成10年6月4・5日

神楽遺跡 発掘調査説明会のしおり

神楽遺跡とは・・・

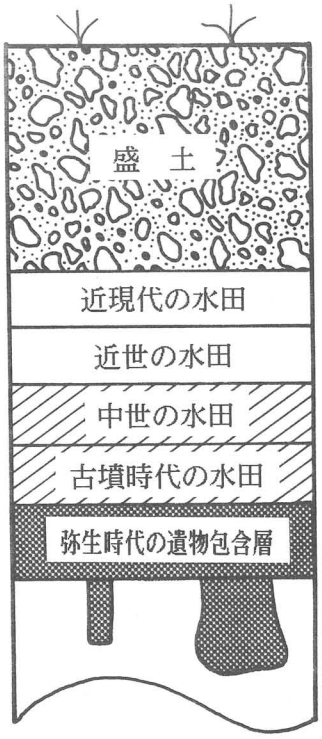
神楽遺跡は昭和54年の神戸市営地下鉄建設の際に見つかりました。その後も保育所の建て替えや住宅の建設などの機会に調査を行っていて、神楽町2丁目のあたりを中心に、弥生時代後期(約1800年前)・古墳時代中期(約1500年前)・平安時代(約1000年前)の遺跡が広がっていることがわかっています。

地面の下はどうなってるの・・?

発掘調査は地表から順に掘り下げていきます。例えば神楽遺跡では、右の図のような地層の堆積になっていました。1番上の現代の盛土の中からは、以前ここにあったガソリンスタンドの重油タンクが4本も出てきて、驚かされました。

その下は古墳時代から昭和時代までの水田土壌が積み重なっており、ずっと田んぼだったようです。刈藻川や妙法寺川の氾濫によって、少しずつ地盤がかさ上げされてきたのでしょう。

さらにその下の黒っぽい粘土層の中に弥生土器が含まれており、当時の人々の生活を垣間(かいま)見ることができました。



神楽遺跡の断面図

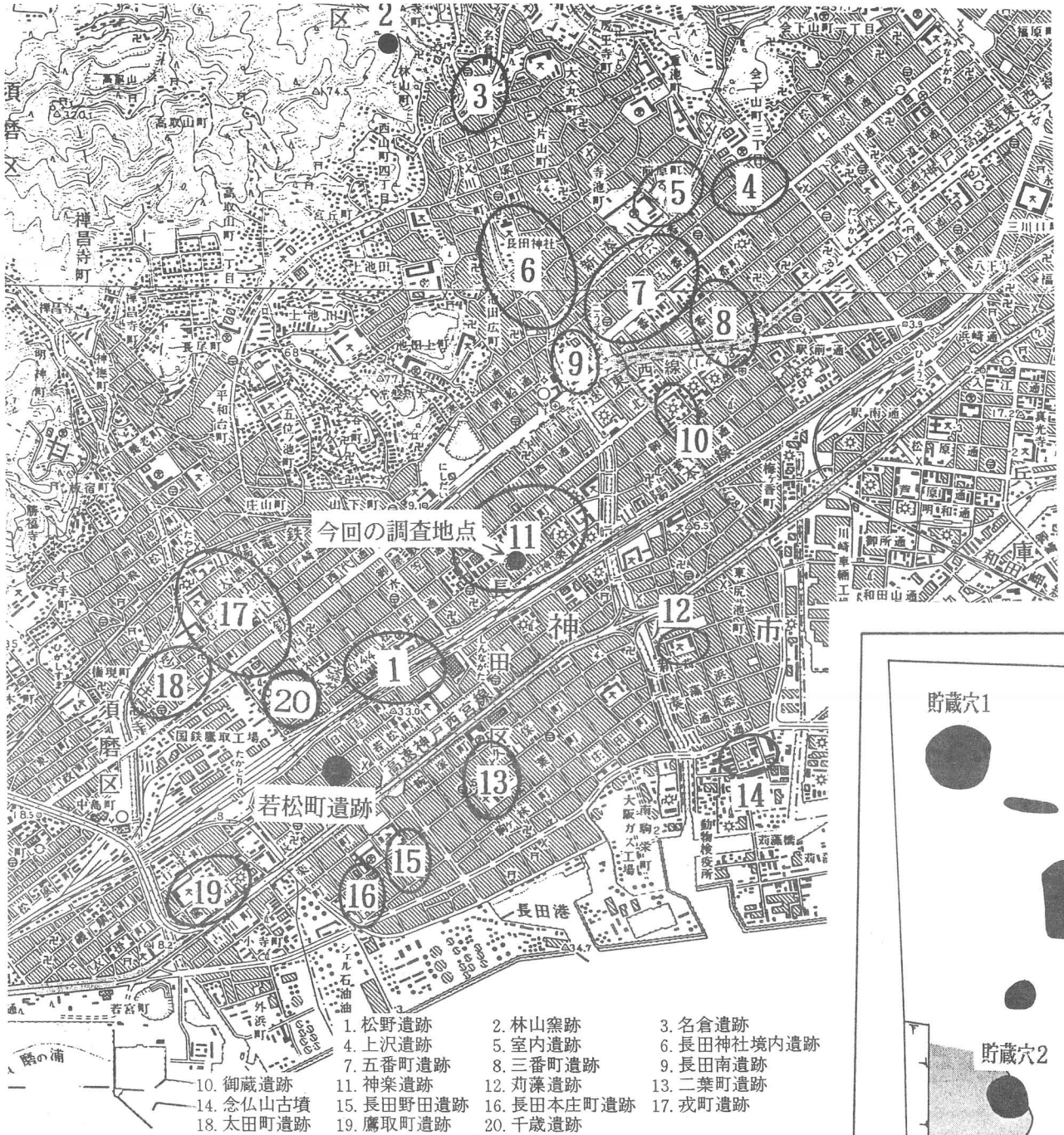
今回の調査でわかったこと

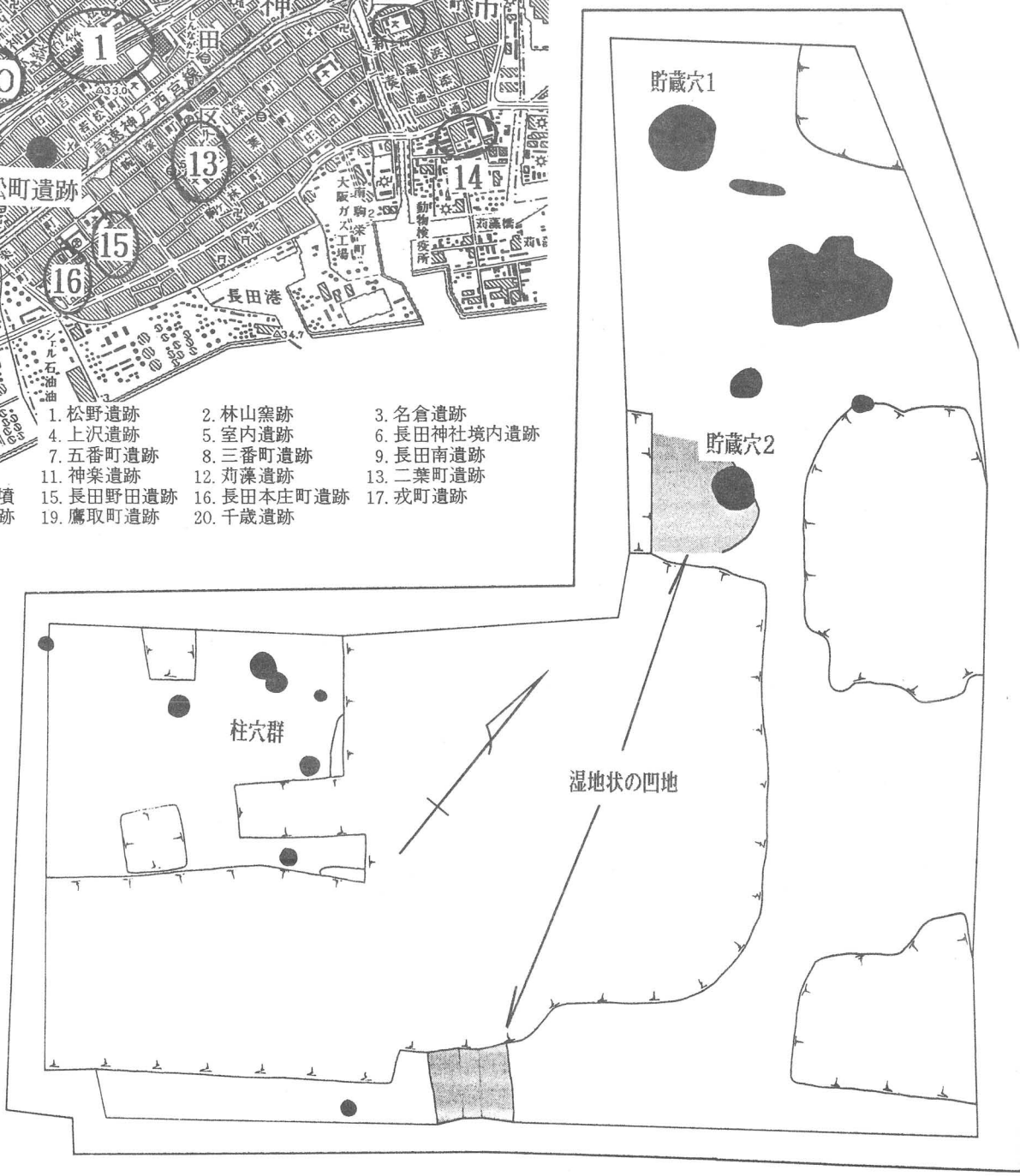
▷弥生時代末～古墳時代初め頃(約1700年前)の貯蔵穴の跡が2つ見つかりました。そのうち貯蔵穴1からは、穴の昇り降りに使った木材と、動物の骨か角の断片が出土しました。

▷神楽遺跡で初めて、弥生時代前期(約2300年前)の土器がまとまって出土し、日本で米を作り始めた頃、すでにこのあたりでも人々が水田を営んでいたことを物語っています。

▷遺跡の範囲が、4丁目の方にも続いていることがハッキリしました。弥生時代のムラの中心は、さらに北西側に伸びるようです。

神戸市教育委員会





神楽遺跡遺構配置図 （1／125）

若松町遺跡
現地説明会資料

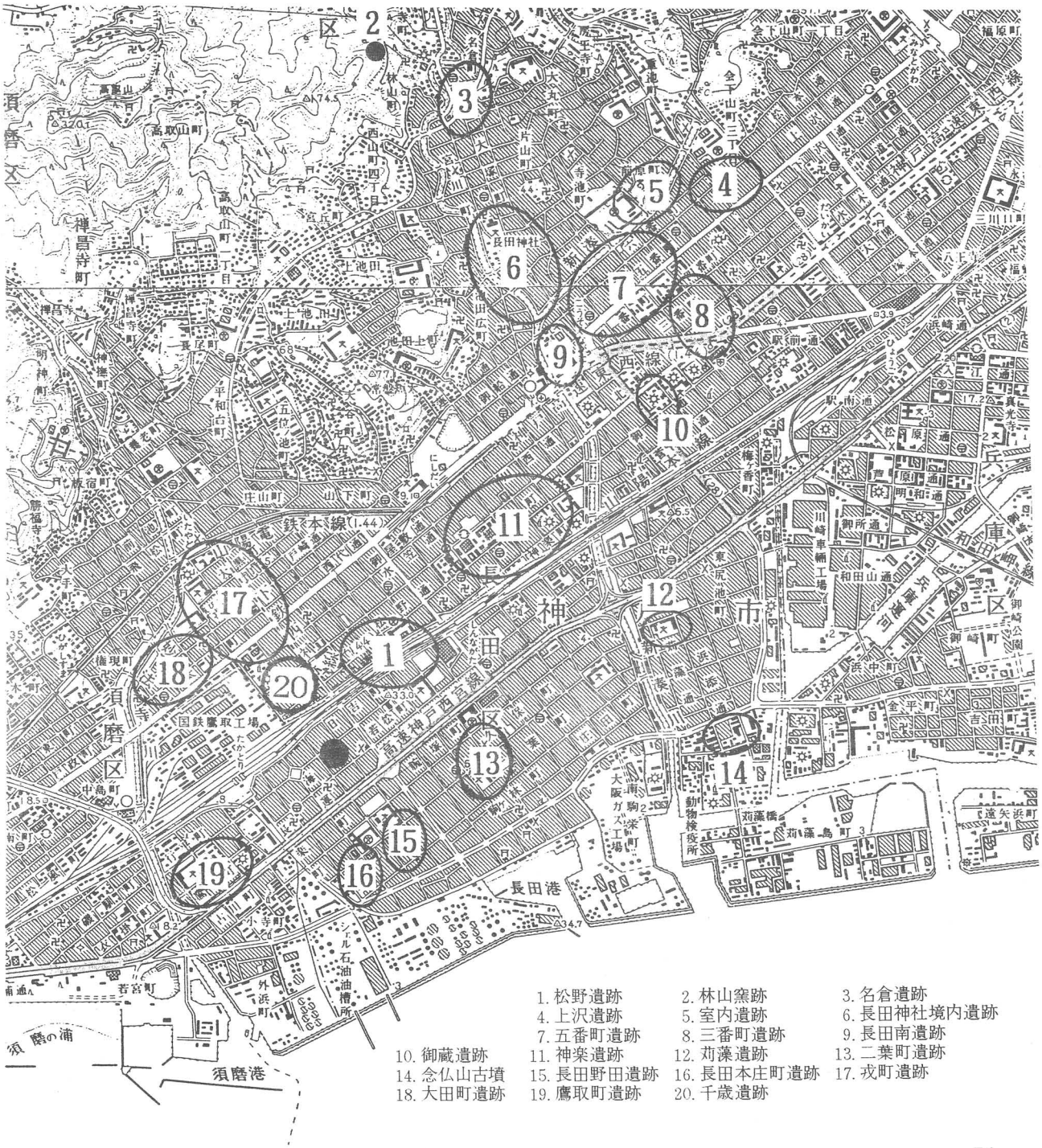
平成１０年６月６日

神戸市教育委員会

1．はじめに

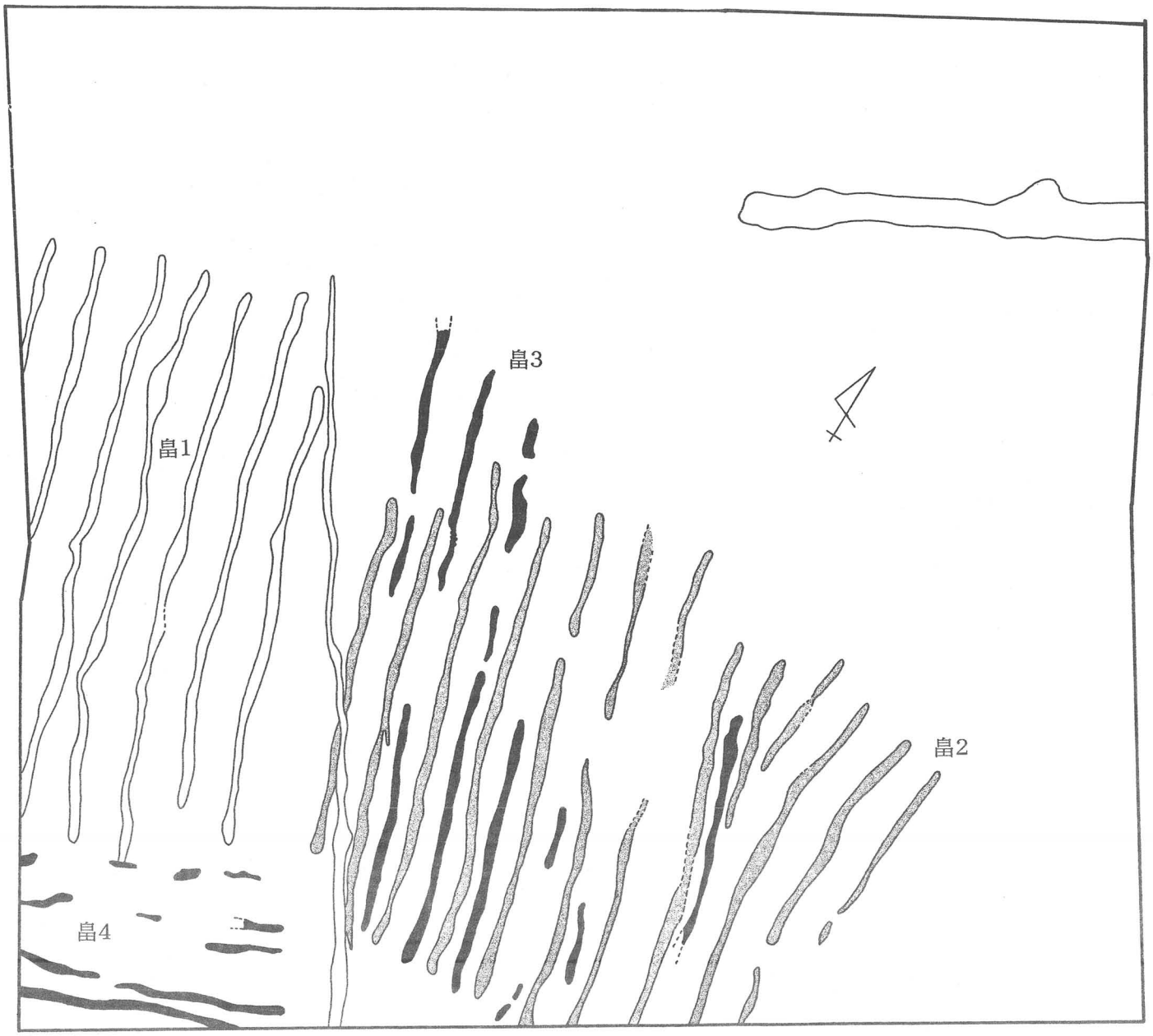
若松町遺跡は、神戸市長田区の西南部に位置する遺跡です。今回の調査は、阪神・淡路大震災の復興にともなう共同ビルの建設に先立ち、5月8日から行ってきました。

若松町遺跡の周辺では、千歳遺跡、松野遺跡、鷹取町遺跡などの遺跡が知られていました。しかし、若松町遺跡の存在は知られていませんでした。このため、今回の調査に先立って、遺跡があるかどうかを確認する調査を行ったところ、遺跡があることがわかり、今回調査を行うことになりました。



２．調査の結果

今回の調査でみつかったのは、弥生時代と古墳時代と平安時代の生活のあと（遺構）です。ただし、古墳時代は柱穴１つが、平安時代は数条の溝がみつかっただけです。このため、今回見ていただくのは、**弥生時代**の遺構が中心となります。



遺構平面図(S=1／200)

具体的に何が見つかったのかというと、何本も並行する細長い溝です。しかも、ほぼ同じ間隔で並んでいます。このような、並行する溝については、畠の畝（うね）の両側に掘られた溝ではないかと考えています。残念ながら、土を盛った畝そのものは、その後の耕作により削られたため、残っていませんでした。今回の調査でみつかったのは、いくつもの畝が並んでいた痕跡ということになります。

このような畝をよく見ると、調査地の中央部では、溝の間隔が他より狭くなっていることがわかります。しかも、浅い溝と深い溝が交互に並んでいます。これは、耕作した時期の違う畠が重複した状態でみつかったものと考えられます。また、深い溝からなる畝のなかに、一箇所溝と溝との間隔が広い所があります。ここが、畠と畠の境ではないかと思われます。このほか、調査地の南側には方向が約90°違った畠がみられます。以上、４つの畠（畠１～畠４）を見つけたことになります。ただし、畠４については、溝の間隔が一定していないことから、複数の畠が重複しているものと考えられますが、残り具合がよくないため、今回は１つの畠として扱うことにします。各畠の規模は以下の通りです。

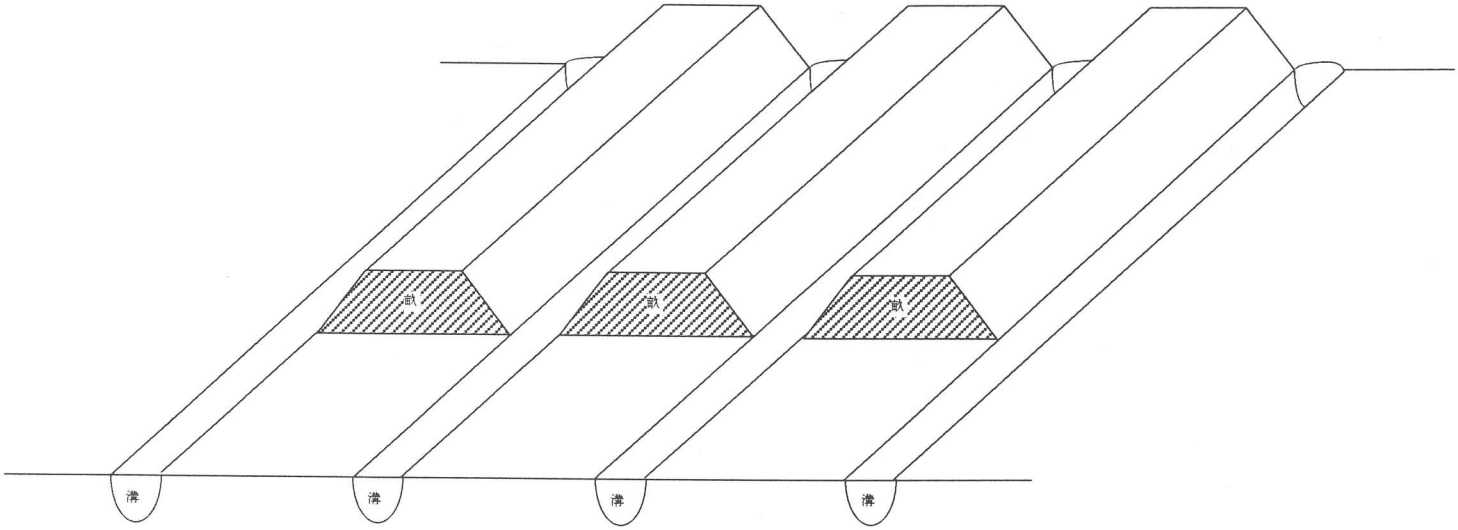
畠１　畝の幅は約1.40ｍで、６畝からなります。最も長い畝の長さは19ｍで、面積は約190㎡となりますが、さらに南西側に広がるものと思われます。

畠２　畝の幅は約1.20～1.40ｍで、10畝からなります。最も長い畝の長さは19ｍで、面積は約300㎡となります。

畠３　畝の幅は約1.40ｍで、７畝からなります。最も長い畝の長さは19ｍで、面積は約220㎡となります。

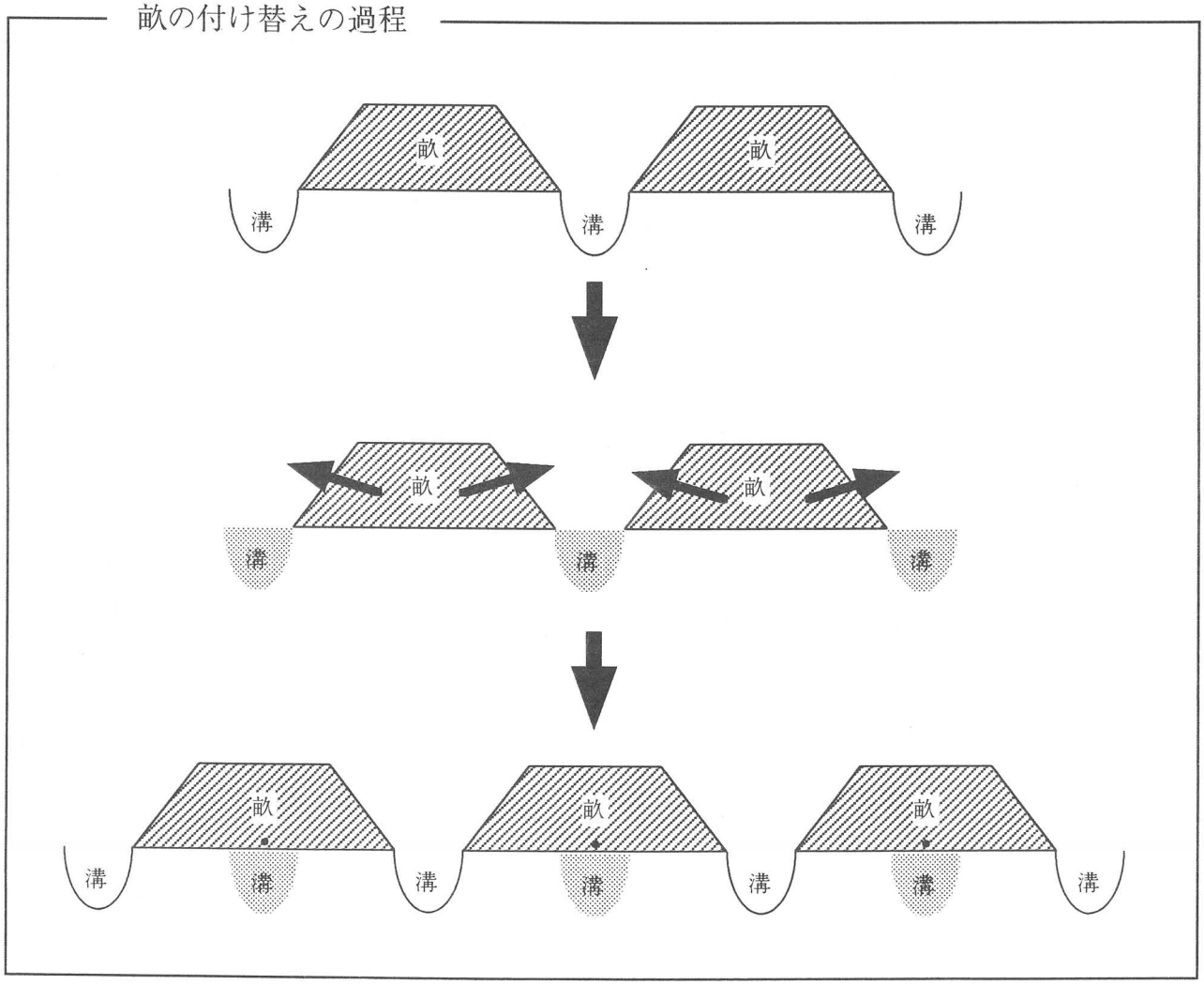
畠４　５条の畝溝があり、３畝を確認できます。ただし、各畝の幅は2.20ｍと、他の畝より極端に広くなっています。このため、多くの畝溝が削平されていることも考えられます。

各溝の幅は約30㎝で、畠１・畠２で20～30㎝、畠３・畠４で10㎝の深さです。溝の底の部分をよくみると、何箇所かで凸凹になっている所があります。これは、溝をスコップ（鋤）で掘り起こした時のあとではないかと思われます。

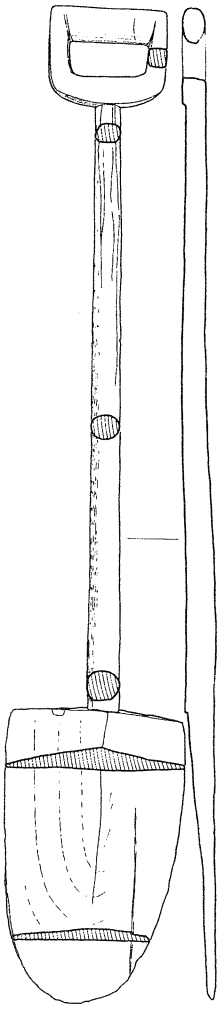


畠の断面モデル図

畝の付け替えの過程



ところで、このような畠で何を作っていたのかが気になります。しかし、現在のところ作物そのものあるいはその種などはみつかっていません。現在、畠の土を洗ったり、土の中に含まれる作物の花粉や細胞の化石などを調べていることろです。



亀井遺跡出土鋤

３．まとめ

調査の結果、４つの単位、26畝からなる、弥生時代の畠が見つかりました。

弥生時代というのは、今から約2300年前から1800年前にかけての約500年間をいいます。今回見つかった畠は、溝のなかから出てきた土器から弥生時代の終わりごろにあたるものです。一般的に、この弥生時代から日本で稲作が始まったと言われています。この証拠に、各地で水田の跡がみつかっています。近くでは、若松町遺跡の山側にある**戎町遺跡**（須磨区）でもみつかっています。

このため、弥生時代は米を食べていた時代というイメージが強く、他に何を食べていたのかについてはあまり注目されていませんでした。これは、今までに**ひえ**や**あわ**や**まめ**などがみつかっていましたが、これらを作った畠の跡がほとんどみつかっていないこともその原因と考えられます。弥生時代の畠については、神戸市内でははじめての発見で、兵庫県でも１例（赤穂市　周世入相遺跡）見つかっているだけです。大変貴重な発見といえます。

最後に、畠でつくられたものですが、ひえとかあわなど以外に、陸稲（おかぼ）の可能性も考えられます。このことについては、畠の土を細かく分析することによって明らかにしていきたいと思います。いずれにしても、今回の発見は、弥生時代の食生活を考える手掛かりとなるものと考えています。

兵庫津遺跡調査の概要

平成10年８月14日

１．はじめに

兵庫の港は、古くは大輪田泊とよばれ、やがて平氏一門の日宋貿易の拠点となり大きな発展を遂げる。やがて中世、兵庫津と名をかえるようになっても、当時の大消費地である大坂、京都と西国とを結ぶ商品流通の大動脈であった瀬戸内海水運の要として栄えた。その後、戦国の世になると兵員や軍需物資の輸送目的からも着目されるようになった。

このため、池田氏や三好信吉（豊臣秀次）によって、ある程度の城郭化が進められたりもしたが、兵庫津の町は、中世の様相を町割などに残すものであった。

やがて、慶長元年（1596）の大地震によって壊滅的な打撃を被った兵庫津であったが、江戸時代には、大坂と地方の人の往来、物資の流通の増加に伴って発展をつづけ寛文９年（1669）には、人口１万３５１７人を数え、宝永８年（1711）には２万８０２人となりその後、これを前後しつつ幕末の兵庫（神戸）開港をむかえる。

２．調査概要

現在までに遺構面を２面、確認している。

第１遺構面は、江戸時代後期～幕末にかけての時期のもので、宝永の大火（1708）の焼土層の上につくられている。当時の地表面は、後世の削平を受けており、建物などは、明確にできなかったが、井戸、炉跡、埋桶、土坑、石組み遺構など町屋に付随すると思われる遺構を検出した。

ＳＥ０２は、底の部分に木枠の残る井戸であり、ＳＥ０７は、石組みの井戸である。

炉跡は、30㎝四方くらいの四角く掘り込まれたもので、素掘りで壁が赤く焼けたものや、瓦で囲い底に土器片が据えられているものもみられた。

またＳＫ０９は、曲げ物の中から、灯明皿や陶磁器の碗、皿そして多量の魚骨、鱗などが出土した。何らかの、お供え物を埋納した遺構のようである。

埋桶は、ゴミ捨ての穴に使われたと思われるもので、多量の魚骨、貝殻などが、含まれていた。かなり多くの種類の魚が食べられていたようで、現在、同定作業中である。

注目すべきは、第２遺構面で、一面を焼土層に覆われており、火災にあったものと考えられる。焼土層は10～30㎝ほど堆積し調査区外へとさらに広がっている。相当大規模な火災であったことが窺える。

火を受けて固くなった当時の地面（焼土面）には、建物の礎石が整然と並び、焼け落ちたと思われる、炭化した建築材が折り重なるように倒壊し、これらに混じって、陶磁器類、金属製品、木製品等の生活道具が出土した。

町屋群（建物群）は、礎石より、建物７、８棟の復元が可能である。規模は、概

ね2～3間（約4～6m）の間口で、奥行きは、7間前後（約14m）と推定され、街路に短冊形に細長く取りつく。

焼け落ちた建築材には、柱や板の他に畳状のもの、竹や枝状のものを簾状に連ねたものが使用されていた。これらと共に20～30cm程度の石がかなりみられる。おそらく、板葺き屋根の置き石として使われていたものであろう。

この他、建物に付随する施設としてカマド跡、埋甕、暗渠などの施設が検出された。

カマド跡は、石の芯に土を塗り付けて造られており幅80cm、奥行き40cm、高さ25cmほどの小さなもので、焚口が2口付けられている。

埋甕は、丹波焼などの甕を3分の1ほど埋め込んだものである。水甕などの用途があったものと思われる。

暗渠遺構は、土間状の部分の下に造られており屋内の排水を目的としたものと思われる。

出土遺物は、生活用具などを中心に数多く出土している。

陶磁器類は、伊万里焼、唐津焼、瀬戸・美濃焼、丹波焼、備前焼など各地のものがみられ、器種も碗、皿、徳利、瓶、甕、擂鉢など豊富である。

また香炉や素焼きの灯明皿や、土錘などの漁撈具もみられる。

この他に土製品として、土人形がある。仏像や天神像、西行法師像、祠、面、動物など信仰に関するものから遊び道具のようなものまで、いろいろなモチーフがある。

金属製品としては、寛永通宝、天保通宝などの銭貨をはじめ、キセル、簪や各種の飾り金具などの銅製品、釘、刃物などの鉄製品がある。

また、今回は特に火事によって炭化した漆塗りの椀や櫛、下駄、砧、木箱などの木製品がある。

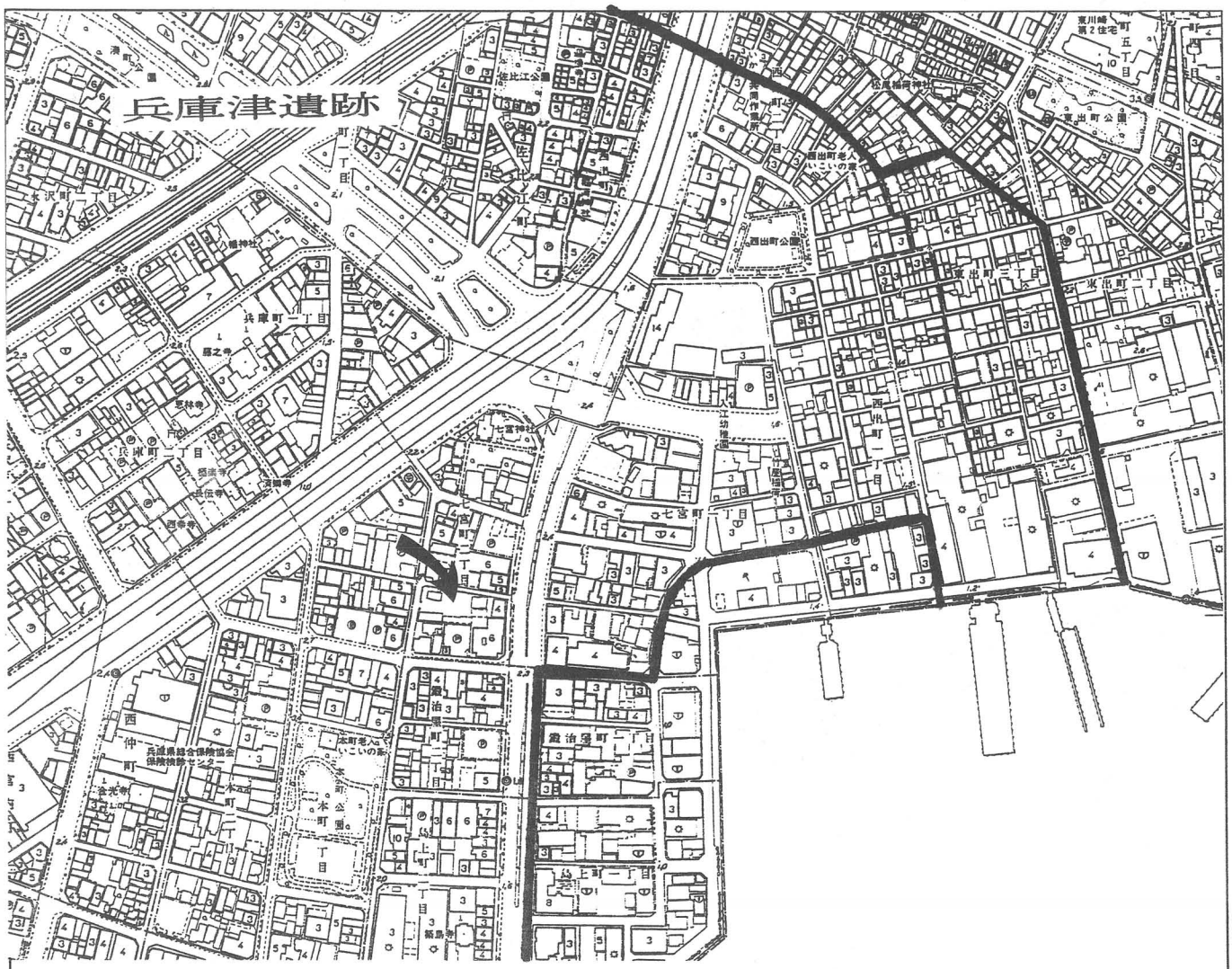
この他、自然遺物として埋桶などから出土した食物残滓と思われる魚骨、貝殻や炭化麦などもみつかっている。

3．まとめ

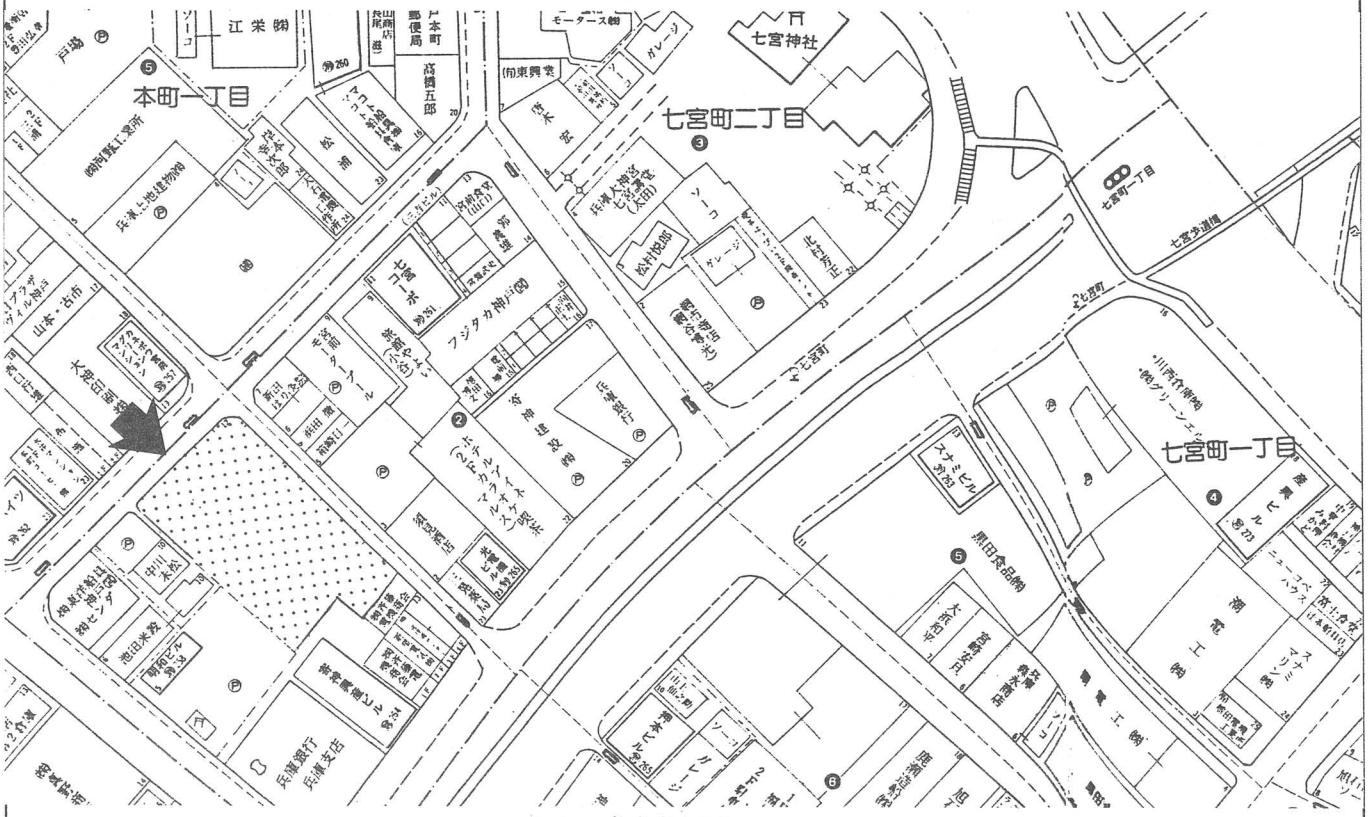
兵庫津遺跡は、過去、比較的小規模な発掘調査しか実施されずその実態が不明であった。今回の調査によって実年代をおさえることのできる焼土層を検出することができた。さらに焼土層の下には良好な状態の焼失町屋群が存在し数々の成果が得られた。建築学や近世史などの分野においても興味深い資料を提供することになるであろう。

No.

図．1



調査区周辺図

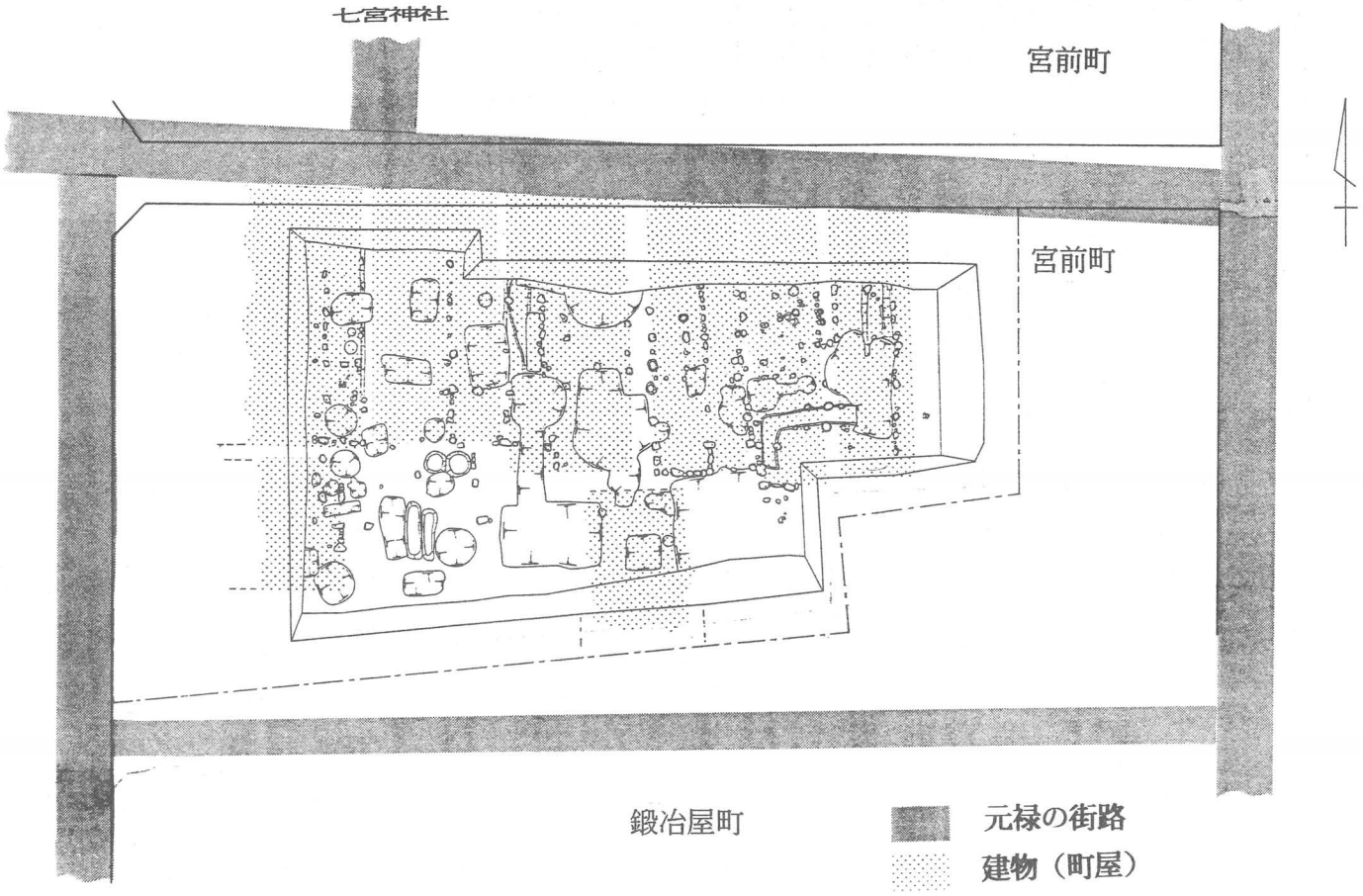


調査位置図

図　2

（元禄兵庫津絵図）　〔部分〕

〔「再版神戸市史附図」大正12年刊行　より〕



調査区と町屋　（概念図）　図　3

1998年10月4日（日）

御蔵遺跡・見学のしおり

神戸市教育委員会

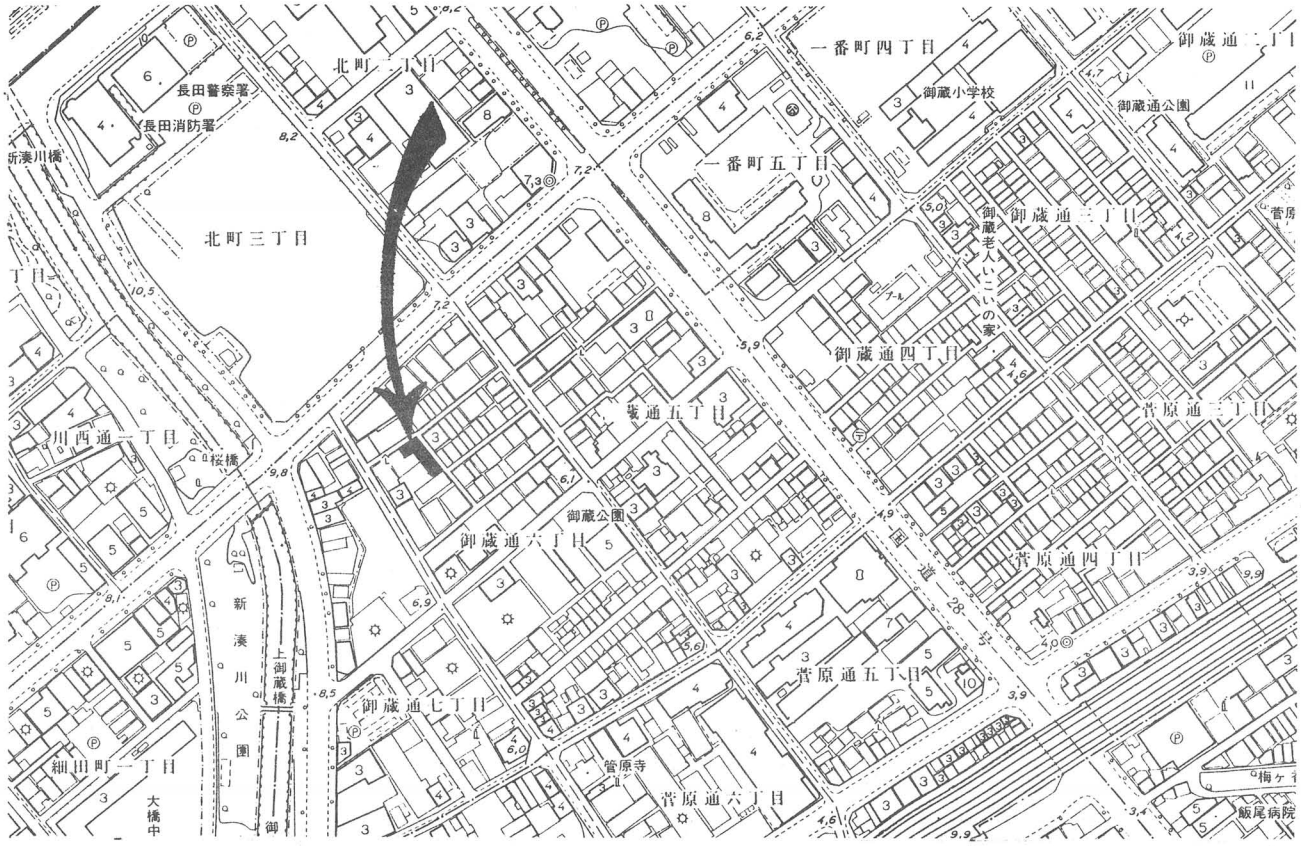
本日、皆さんにお越しいただいたこの遺跡は、現在の町名をとって、『御蔵遺跡』と呼ばれています。

御蔵遺跡は、平成２年に、御蔵通４丁目の地域福祉センター建設に先立って、遺跡があるかないかを確かめるための試し掘りの時に、見つかりました。

調査の結果、現在の地面の下、約1.2m～1.5mのところから、平安時代（今からおよそ900年前頃）～鎌倉時代（今からおよそ700年前頃）の土器のかけらが出てきました。

平成７年１月、阪神大震災によって、この地域でも、数多くの家屋が被災し、被災地復興のため、『御菅西地区震災復興土地区画整理事業』が始まりました。

平成９年12月～平成10年２月、御菅西市営住宅の建設工事に伴う発掘調査が行われ、古墳時代後期（今からおよそ1500年前頃）と奈良時代（今からおよそ1200年前頃）の「掘立柱建物」と呼ばれる昔の人々の住居の跡が見つかっています。



位置図

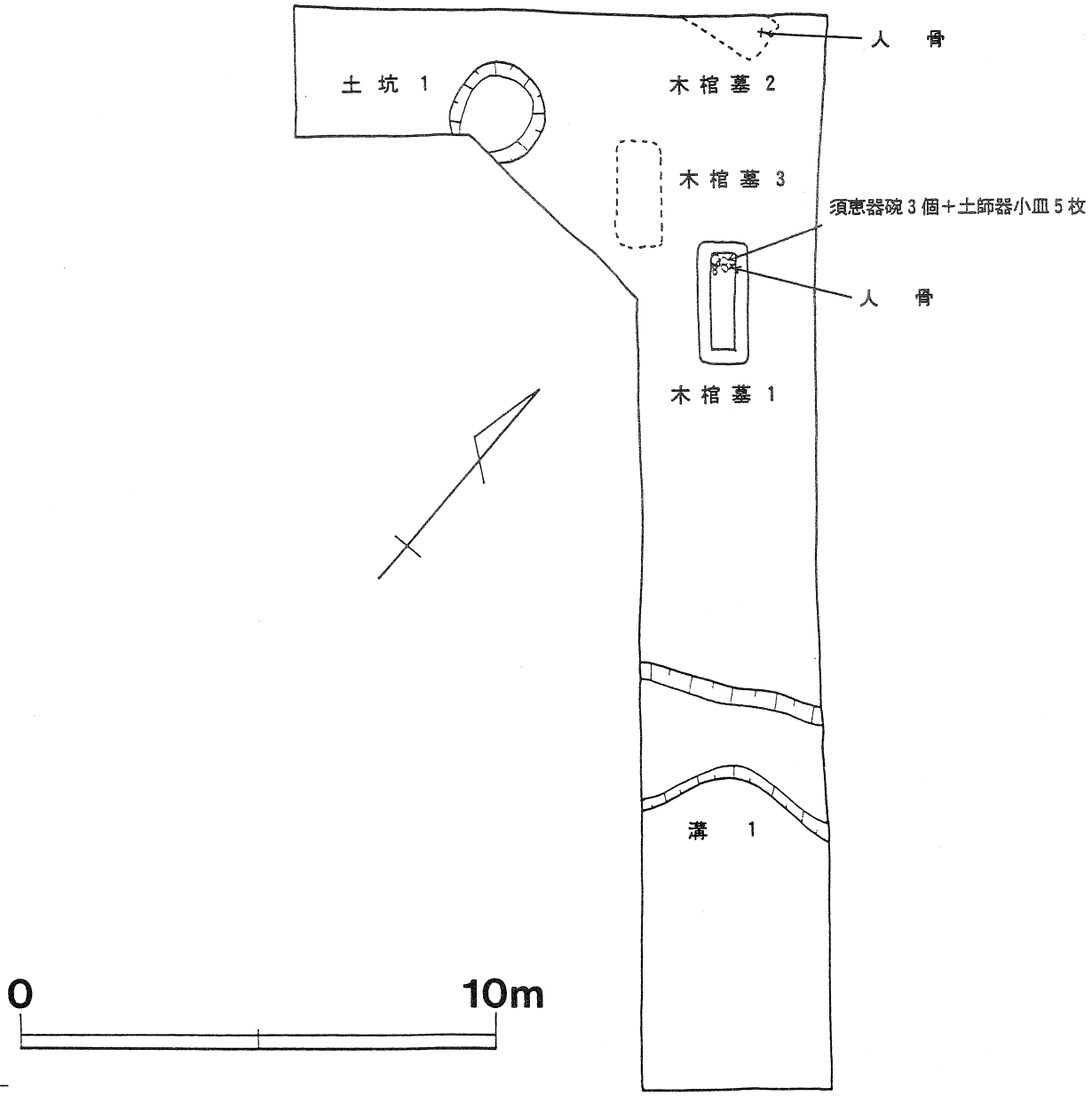
この遺跡は、東側が、長田区一番町５丁目・御蔵通４丁目から、西側が、御蔵通６丁目にかけての範囲にひろがっていることが明らかになってきました。

今回の調査地は、御蔵遺跡の第９次（９番目）の発掘調査で、神戸市の区画街路予定地にあたります。

現在の地面の下、約1.0mのところから、平安時代（今からおよそ900年前頃）のお墓が３か所、土坑と呼ばれる「水溜め」または土器等のゴミ捨て場が１か所、溝が１か所で見つかっています。

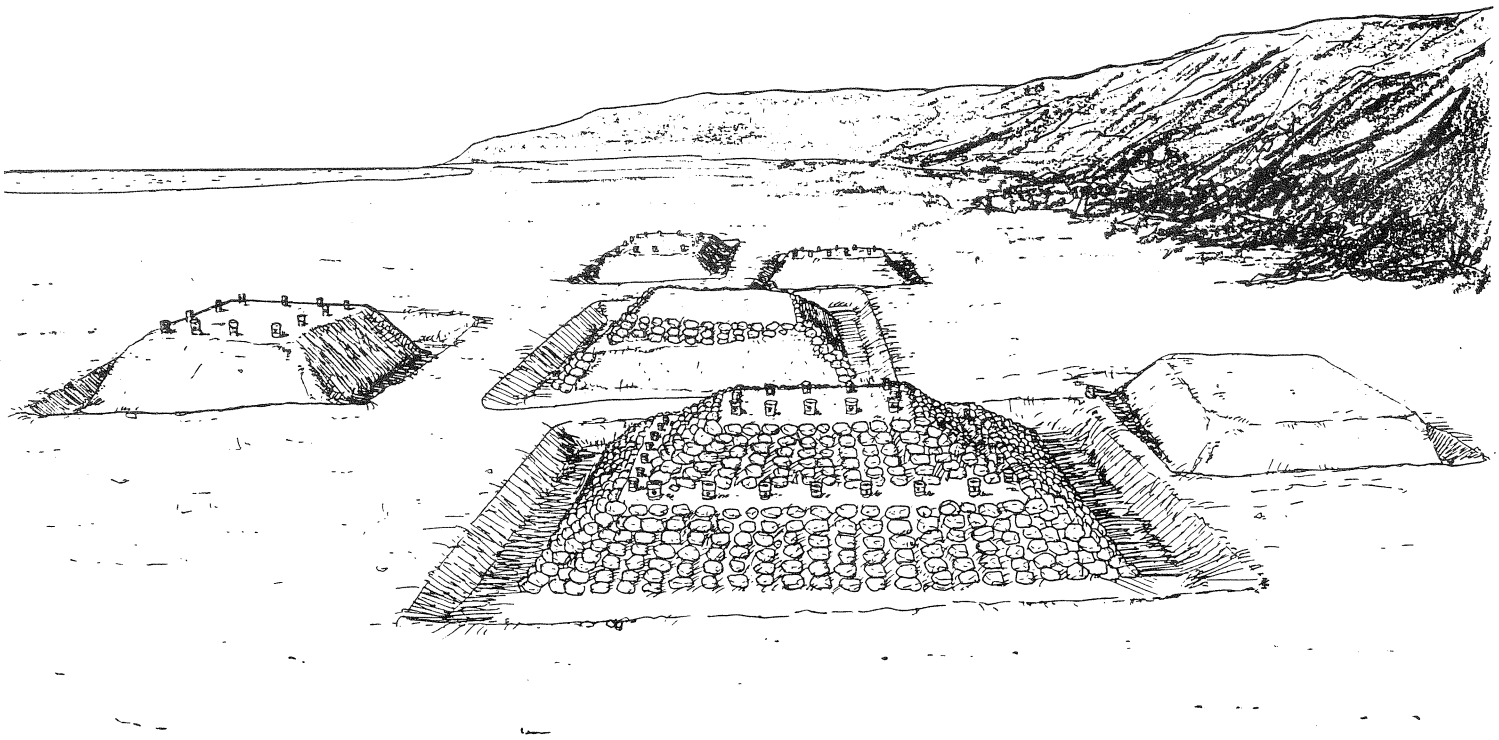
現在調査中のため、細かいことについてはまだわかっていませんが、このお墓は、『木棺墓』と呼ばれる遺体を木棺（木で作られた箱型のお棺）の中に納めて埋葬するタイプのお墓であると思われます。

これらは、私たちの祖先の歴史を考える上において、たいへん貴重な資料であり、大切な祖先の遺産を後世に伝えていくためにも、皆様のご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。



住吉宮町遺跡

現地説明会資料



平成11年1月24日

神戸市教育委員会

1．はじめに

平成７年１月17日未明に阪神・淡路地方をおそった地震は、神戸市東灘区住吉周辺においても大きな被害をもたらしました。今回みなさんにご覧いただく住吉宮町遺跡の調査も、震災によって被害をうけた建物の跡地に新しく、再開発ビルディングを建てる計画がもちあがり、その建設工事に先立って行われたものです。

神戸市を東西に横切る、六甲山地の南側一帯には、中小の河川によって扇状地が形成されています。住吉宮町遺跡は、住吉川やその他の小河川によって形作られた、標高20ｍ～30ｍの扇状地に立地しています。

住吉宮町遺跡は昭和60年に発見されてから、これまでに31回におよぶ調査が行われてきました。これまでの調査では、古墳時代の初め（約1700～1800年前）の竪穴住居や周溝墓、古墳時代の中頃（約1550～1700年前）の住吉東古墳や坊ヶ塚古墳と、その周辺に造られた古墳時代中頃から終わり（約1400～1700年前）にかけての古墳群、奈良時代（1300年前頃）の菟原郡（うばらぐん）の役所に関わりがあると考えられる、建物跡や井戸、平安時代（約800 ～1200年前）の、祭祀（さいし）跡がともなう建物跡などがみつかっています。

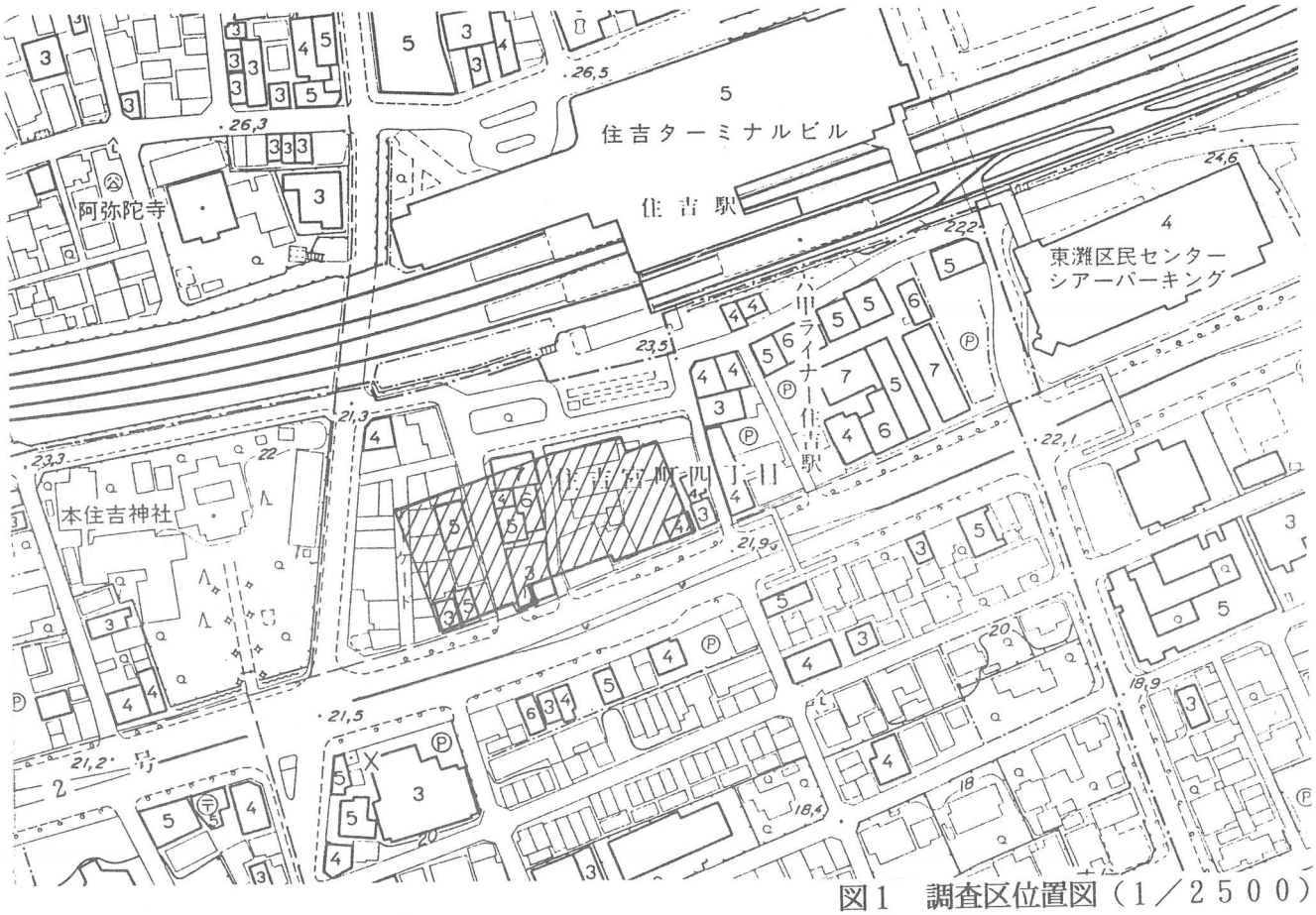


図１　調査区位置図（１／２５００）

住吉宮町遺跡においてこれまでにみつかっている古墳は約50基あり、住吉東古墳・坊ヶ塚古墳を除くと、全てが一辺５～20mの方墳ばかりです。これらの古墳群はいまのところ、国道２号線の北側で、今回の調査地を中心に東西約600 mにわたって確認されており、この付近には、まだ数多くの古墳が地下に眠っていると思われます。

２．今回の調査について

今回の調査では、古墳時代後期（約1400～1500年前）の方墳７基を始めとして、横穴式石室１基、墳丘を持たない石棺（せっかん）が７基、その他に溝、落ち込みなどの遺構がみつかりました。また、弥生時代の終わり（約1700年前）頃の竪穴住居や川の跡、室町時代（約670 ～430 年前）の井戸や、建物の柱跡と考えられる穴などもみつかっています。

古墳はいずれも今の地面から約１m下でみつかりましたが、それ以降の洪水や水田、建物を作ったときの造成工事などによって、上部が削られていました。しかし、下部が残っているために古墳が密集して存在していた状況はよくわかり、良好な資料を得ることができました。

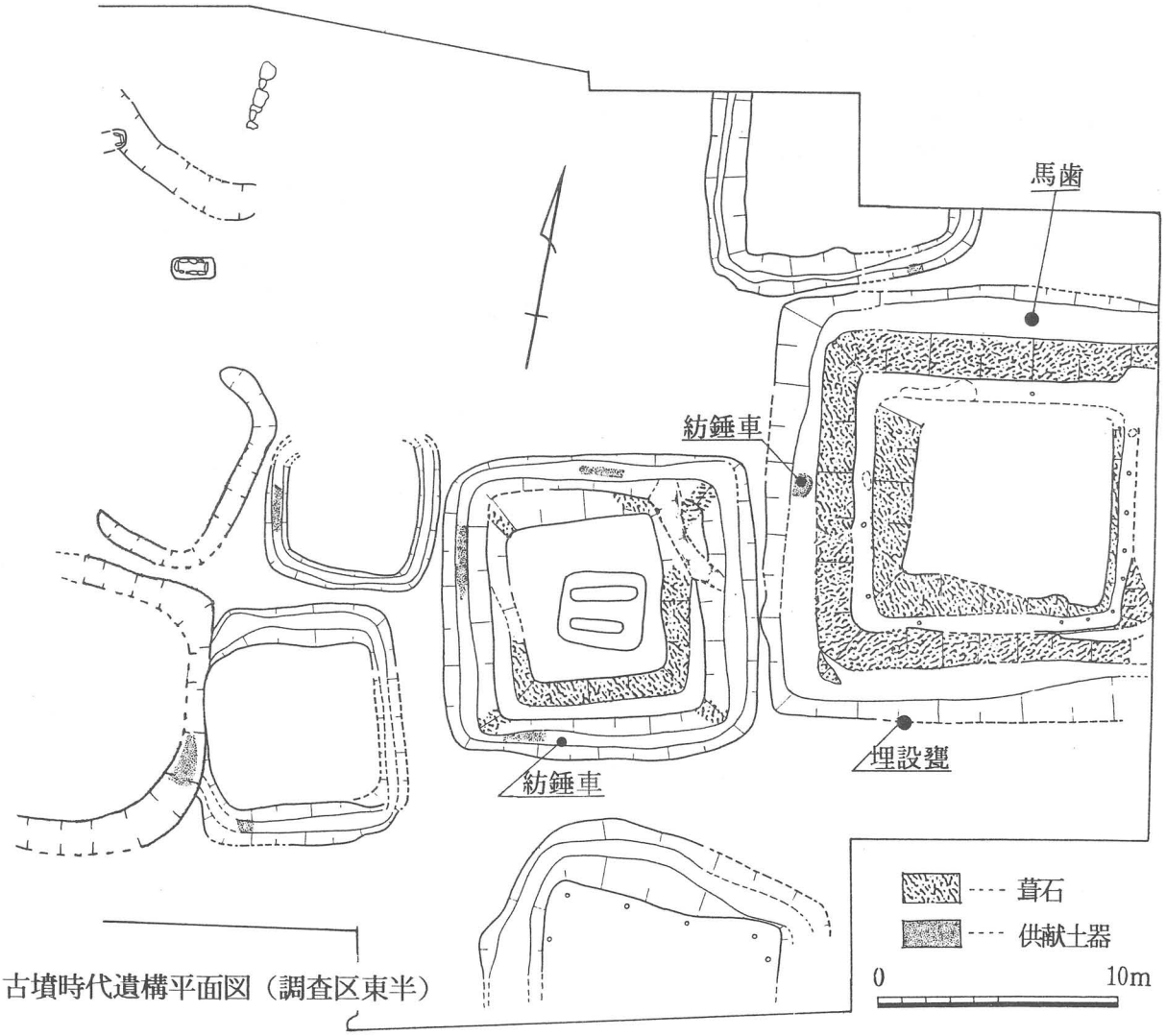


図２　古墳時代遺構平面図（調査区東半）

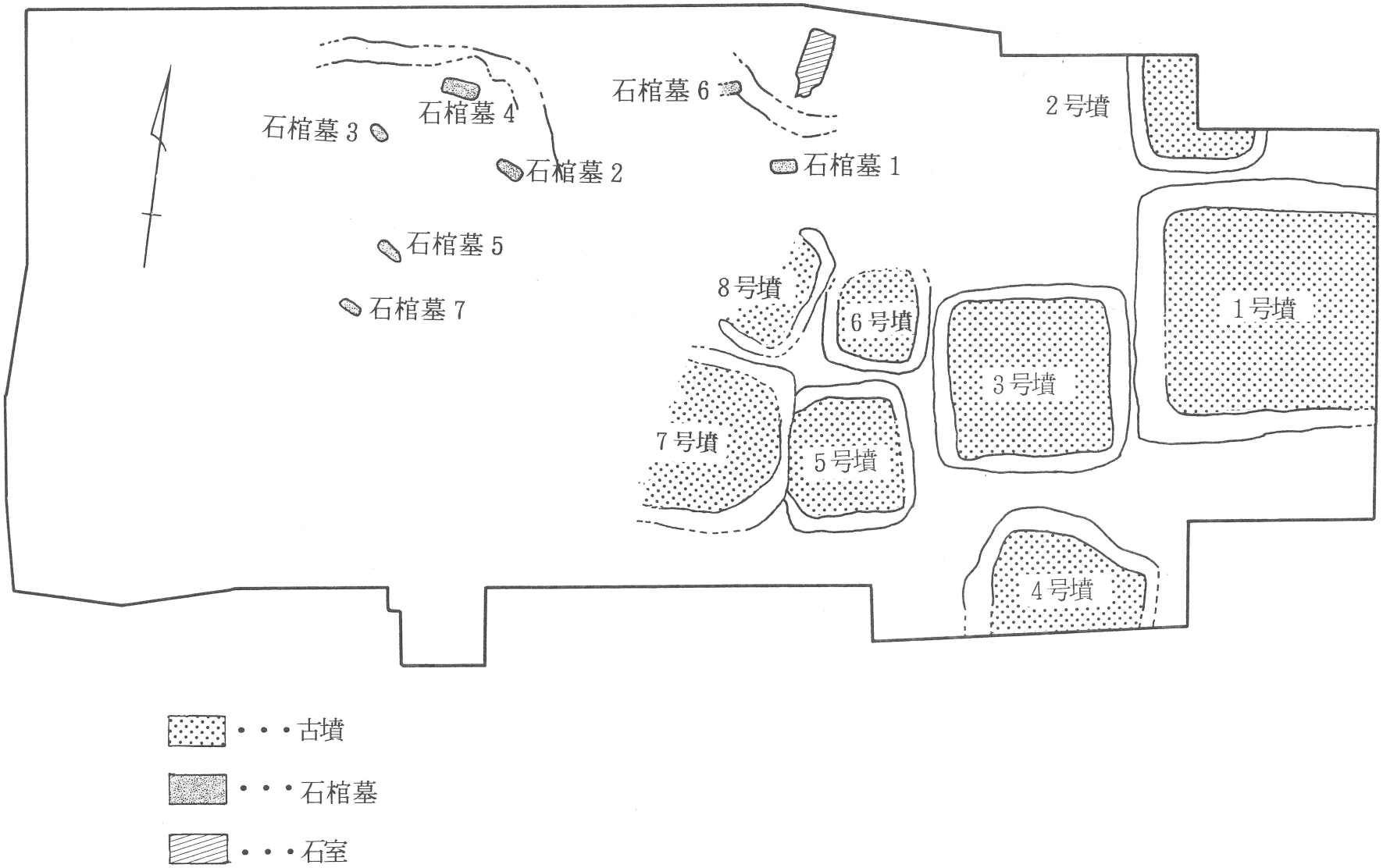


図 3　古墳時代遺構配置図（1／400）